第３節　百塚住吉遺跡A地区・百塚遺跡A地区出土二重口縁壷形土器と土器祭祀

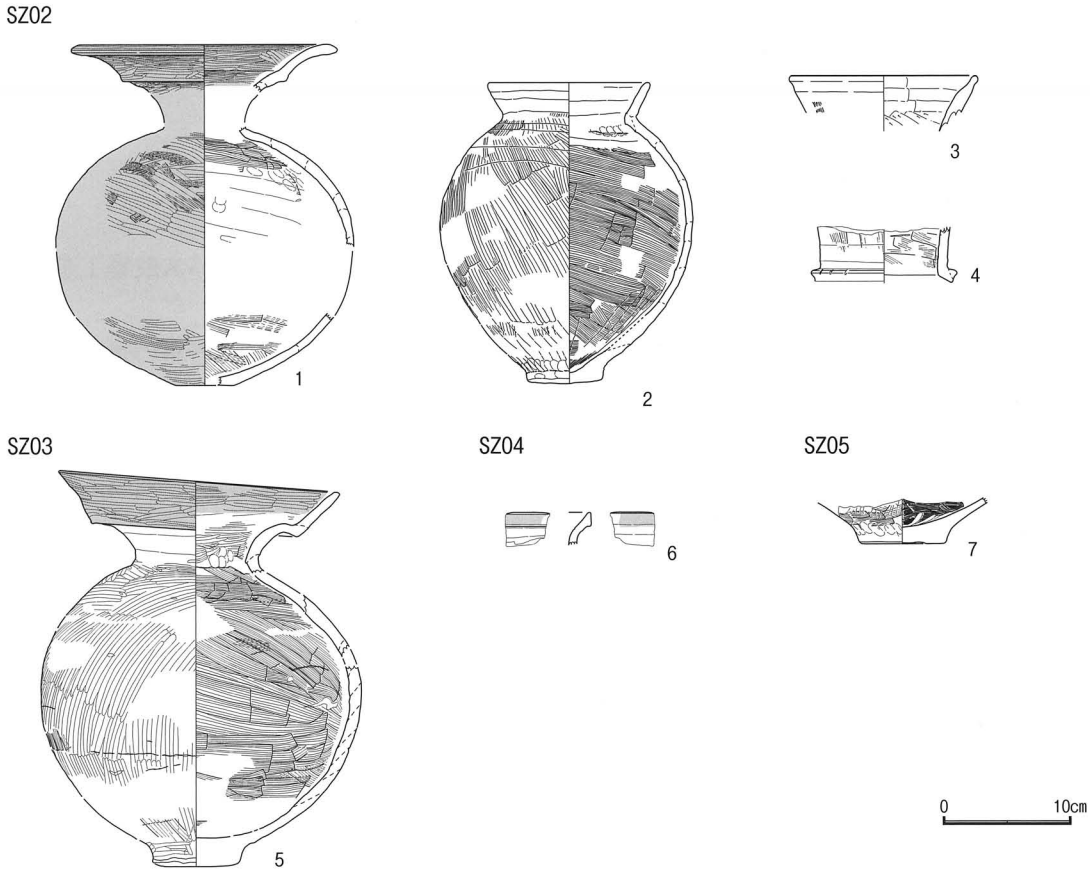
ここでは、両遺跡から出土した壷形土器（以下、壷とする）について、類例との比較検討を行い、その特徴を明らかにすると共に、越中周辺地域の墳墓における土器祭祀の様相を検討する。

(1)百塚住吉遺跡A地区・百塚遺跡A地区出土壷の特徴

百塚住吉遺跡A地区および百塚遺跡A地区から出土した壷を集成した。

百塚住吉・百塚遺跡SZ02からは４点の壷が出土した（１～４）。単口縁の直口壷２点、二重口縁壷２点が確認され、二重口縁壷と直口壷による組成をとる。１は外面全面と口縁部内面が赤色塗彩された二重口縁壷である。口唇部が肥厚し、大きく外反する口縁部が特徴的である。頸部は破片がないため推定の域をでないが、有段部の状況からすると直立する様子はなく、やや外反気味に立ち上がると考えられる。口縁部径より胴部最大径の方が大きく、胴部中位に最大径をもつ。底部は穿孔されない。４は二重口縁壷の頸部である。直立気味に立ち上がる頸部に突帯を巡らせ、突帯頂部にはキザミを施しており、１とは形状が異なる。２は直口壷である。長胴で胴部中位に最大径をもち、短く開く口縁部を特徴とする。３も同様の器形と思われるが、有段部が短い二重口縁壷の可能性もある。

口縁部が大きく外反する二重口縁壷は、両遺跡周辺では富山市婦中町勅使塚古墳（前方後方墳・66m）、石川県七尾市国分尼塚１号墳（前方後方墳・53m）、富山県射水市二口油免遺跡１号墳（方墳・19m）などで認められる。いわゆる茶臼山型壷の系譜を引くものと考えられ、畿内系の影響を受けているものと理解される。勅使塚古墳の壷は口縁部資料で胴部の状況は明らかでないが、口縁部は有段部から頸部にかけて長く、直立する頸部形状をもつと推定され、これらは古相を示す。二口油免遺跡１号墳の壷は口縁部の有段部から頸部にかけて短く、明瞭な屈曲を持たないまま頸部へと続いて



百塚住吉遺跡A地区・百塚遺跡A地区における墳墓出土壷

いる。系譜の問題もあるが、退化傾向とみることもできよう。

直口壷は類例が乏しい。口縁部形状は異なるものの、富山県射水市HS－04遺跡SD051出土例の胴部形状が比較的近い。古墳出土例では、やや地域が離れるが新潟市（旧巻町）山谷古墳（前方後方墳・37m）出土例がある。口縁部が外反せずに立ち上がる点では石川県かほく市宇気塚越１号墳（前方後方墳・19m）出土例が近い。以上の特徴から、百塚住吉・百塚遺跡SZ02出土壷は漆町編年（田嶋1986）７群併行（古府クルビ式期）に比定できる。

百塚遺跡SZ03からは鉢形土器と共に１点の二重口縁壷が出土した（５）。胴部がややつぶれた球形で短く開く頸部をもち、有段部が下方に突出し、口縁部は外反せずに立ちあがる特徴をもつ。外面調整はミガキで、内面はハケ調整、口縁部のみが赤色塗彩される。底部は穿孔されない。百塚住吉・百塚遺跡SZ02出土壷と比較して形態差は明瞭で、時期的にも後出し、別系統の土器であることは明らかである。系譜的には東海系の影響を受けたものと位置づけたいが、浮文や肩部の装飾など通有の加飾は一切認められない。同様な例としては山谷古墳の二重口縁壷が近い形状をとる。下膨れの胴部形状や擬凹線文のなごりともみられる口縁部のヨコハケの存在など東海系の要素を色濃く残すのに対し、本例は口縁部形状の特徴と赤色塗彩される以外はその要素を認めることができず、山谷古墳例に比べて後出観は否めない。伴出した鉢も頸部のくびれがきわめて弱くて退化傾向を示しており、壷の年代観とよく符合する。

以上の特徴から、百塚遺跡SZ03出土壷は百塚住吉・百塚遺跡SZ02出土壷より新しく、漆町編年７・８群併行に比定することができる。

⑵越中周辺地域の墳墓出土壷との比較

百塚住吉遺跡・百塚遺跡出土二重口縁壷を理解するために、越中周辺地域の墳墓出土の壷についても簡単に触れておきたい。石川県加賀市小菅波４号墳（前方後方墳・17m）出土二重口縁壷には、畿内系と東海（近江）系のものが認められる。頸部は比較的締まったものが多く、いずれも肩部から口縁部にかけて装飾が施されるものが多い。特に、東海（近江）系とみられるものは口縁部に円形浮文や棒状浮文が付加されるものがあり、パレススタイル壷の影響を受けたものとみられる。石川県加賀市分校カン山１号墳（前方後円墳・37m）出土二重口縁壷は円形浮文などにより加飾されるものと、加飾されない個体が含まれており、小菅波４号墳よりはやや時期が下るものとみられる。また、国分尼塚１号墳については加飾されない二重口縁壷を主とするが、口縁部を擬凹線文と棒状浮文で飾る東海系のものも一部含まれるようであり、分校カン山１号墳出土二重口縁壷と同時期ないしはやや下るものとみられる。石川県押水町宿東山１号墳（前方後円墳・21.4m）出土二重口縁壷は大型・中型の２タイプ存在するが、中型壷は短く外反して立ち上がる頸部に外反する口縁部をもち、有段部は明瞭である。胴部は扁平ないしは下膨れを呈しており、底部は焼成後穿孔である。大型壷は逆「ハ」字状に開く口縁部に短く外反して立ち上がる頸部をもち、有段部は明瞭で外方に突出する。これらはいわゆる茶臼山型壷の系譜を引くもので、畿内系の二重口縁壷の影響を受けたものと解される。胴部形状や胴部内面のハケ調整が全面に認められることからも、富山県小矢部市関野１号墳出土二重口縁壷よりは先行すると考えられる。

関野１号墳出土二重口縁壷は逆「ハ」字状に開きながら立ち上がり端部で外反する口縁部をもち、短い頸部と球形の胴部が特徴的である。宿東山１号墳出土二重口縁壷と同様に、大型壷と中型壷の組み合わせである。胴部のプロポーションや外面ハケ調整のみであること、内面調整も底部付近で限定的に認められるのみであることから、百塚住吉・百塚遺跡SZ02例や勅使塚古墳例、二口油免遺跡１号墳例、宿東山１号墳例よりは明らかに後出するものである。百塚遺跡SZ03例と比較しても、内面調整の簡略化は明確であり、漆町編年８群併行とみられる。

石川県中能登町雨の宮１号墳（前方後方墳・64m）出土二重口縁壷は細破片による復元のため、細部に不明確な点が残るが、胴部はやや長胴気味で、幅広の頸部に明瞭な有段部をもち、大きく外反す

る口縁部を特徴とする。外面はミガキ調整、胴部内面はハケ調整である。これらの特徴から一見、関野１号墳出土二重口縁壷より古い印象を受ける。しかしながら、共伴する高坏は坏部が短いなどやや特異な形状をとるものの、畿内系の屈曲脚高坏の特徴を備えており、関野１号墳出土二重口縁壷より後出する漆町編年９～10群併行とみられる。以上から、百塚住吉・百塚遺跡SZ02例は、加飾二重口縁壷が含まれる小菅波４号墳例や宇気塚越１号墳例、分校カン山１号墳例などよりは新しく、加飾されずに底部穿孔される宿東山１号墳例や関野１号墳例、雨の宮１号墳例などよりは古いと推定できる。勅使塚古墳例とほぼ同時期ないしは若干後出すると考えられるであろう。

百塚遺跡SZ03例はかなり形骸化するものの、東海系の影響下にある二重口縁壷とみることができる。胴部内面の全面にハケ調整が認められることから、関野１号墳例よりは先行するものみられ、宿東山１号墳例と同時期とみられる。

(3)二重口縁壷祭祀の展開

百塚住吉遺跡・百塚遺跡の墳墓は既に墳丘が失われていたため、壷は周溝内に転落した状態で出土した。本来の配置は不明確である。出土土器が全ての土器組成を示さないにしても、少なくとも壷については破片を含めて同種のものが複数個体確認されない点に、その組成上の特徴を見出すことができる。このことは、これらの壷の配置が不明確ではあるものの、１点ないしは数点の壷を主体とする祭祀形態をとるものと考えられる。

特定の位置から壷が１点ないしは数点確認される例は、主に東日本に認められる。これらは、古墳の正面観（岩崎1983・川村1989）との関連が指摘されているが、墳墓としての正面観のみならず特定箇所での祭祀形態を示しているものともみられる。岩崎卓也氏は、埋葬施設上の土器群を用いる祭祀形態が儀礼化する経過のなかで、くびれ部からの土器の出土量が増えることを指摘している（岩崎1973）。これは、旧来の共同体的な祭祀形態から壷に特化した儀礼行為への変容を物語るものであろうか。

宇気塚越１号墳では、周溝底面で直口壷の周囲に破砕した加飾二重口縁壷が散布された状態で出土しており、周溝内での祭祀ないしは廃棄行為を想定できる。また、地域は離れるものの、埼玉県東松山市諏訪山29号墳（前方後方墳・53m）では後方部側面のブリッジ周辺より複数個体の二重口縁壷・壷・器台・高坏・ミニチュア土器などが出土し、ブリッジ部での祭祀が想定される。

一方、関野１号墳や宿東山１号墳など同じ形態の壷が多く認められる例については、墳頂部や墳裾部などに囲繞ないしは特定箇所にまとまって配された可能性を想定できる。群馬県高崎市元島名将軍塚古墳（前方後方墳・91m）でも周溝内に転落した状態で13～14個体の二重口縁壷が出土し、墳頂部の方形配列が推定されている。これらは、いずれも埴輪的な多量配置（囲繞配列）の傾向がうかがえるものであろう。

関野１号墳に後出する雨の宮１号墳においては、墳丘部が全面調査されたにもかかわらず、二重口縁壷の出土量は２個体程と極めて少なく、多量配置された形跡はない。土器組成のなかに高坏の占める割合が多く、手捏土器が含まれることに土器組成の特徴があり、二重口縁壷を主体とする祭祀形態の変容をうかがうことができる。能登においては、雨の宮１号墳に後続するとされる石川県中能登町水白鍋山古墳（帆立貝型前方後円墳・64m）において埴輪の樹立が認められており、二重口縁壷を主体とする祭祀形態から埴輪祭式の受容への過渡的な段階のものと考えることができる。

百塚住吉遺跡・百塚遺跡ではいずれも前者の祭祀形態である。以上の検討から、越中周辺地域においては漆町編年７・８群から９群（高畠式期）の段階で、古墳における祭祀形態に大きな変化があったことをうかがうことができた。

（佐藤好司）

引用・参考文献

石川考古学研究会　1986　『シンポジウム「月影式」土器について』
石川県立埋蔵文化財センター　1987　『宿東山遺跡－一般国道159号押水バイパス改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』
岩崎卓也　1973　「古式土師器再考」『史学研究　91』　東京教育大学文学部
岩崎卓也　1983　「まとめ」『森将軍塚古墳　Ⅲ』　更埴市教育委員会
大野英子　2007　『王塚・千坊山遺跡群－富山平野の弥生墳丘墓と古墳群－』日本の遺跡18　同成社
小黒智久　2007　「勅使塚古墳と王塚古墳」『大境－富山県考古学会機関誌－』第27号　富山県考古学会
小田木治太郎　1989　「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学Ⅱ』　石川考古学研究会
小矢部市教育委員会・小矢部市古墳発掘調査団　1987　『関野古墳群』小矢部市埋蔵文化財調査報告書第19冊
川村浩司　1989　「緒立八幡神社古墳の編年的位置」『新潟考古学談話会会報』第４号　新潟考古学談話会
川村浩司　1989　「会津大塚山古墳の正面観と張り出し部」『会津大塚山古墳測量調査報告書』　会津大塚山古墳測量調査団
小杉町教育委員会　1999　『HS－04遺跡発掘調査報告』
埼玉県県史編さん室　1986　『埼玉県古式古墳調査報告書』
㈶富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査事務所　2003　『富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座　勅使塚古墳・永代遺跡・安居窯跡群・中山中遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第21集
塩谷　修　1983　「古墳出土の土師器に関する一試論」『古墳文化の新視角』　雄山閣
高崎市教育委員会　1981　『元島名将軍塚古墳』
高橋浩二　2001　「北近畿系統の土器と山陰系統の土器－越中弥生後期・終末期における日本海沿岸交流の諸段階－」『富山大学人文学部紀要』第37号　富山大学人文学部
田嶋明人　1986　「考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－」『漆町遺跡Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人　2006　「「白江式」再考」『陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集　吉岡康暢先生古希記念論集刊行会
田中新史　2002　「有段口縁壷の成立と展開－特化への道程・類別と２地域の分析－」『土筆』　第６号　土筆舎
田中幸生・中谷正和　2003　「越中における古墳出現前後の地域別土器編年」富山大学考古学研究室論集『蜃気楼－秋山進午先生古希記念－』　秋山進午先生古希記念論集刊行会
東海考古学フォーラム　1995　第３回東海考古学フォーラム『前方後方墳を考える』
東海考古学フォーラム　1996　第４回東海考古学フォーラム『鍋と甕そのデザイン』
富山県　1972　『富山県史』考古編
富山県教育委員会　1983　『富山県高岡市桜谷古墳群調査報告書Ⅱ』
富山市教育委員会埋蔵文化財センター　2007　『「婦負のクニ」成立のころ－四隅突出型墳丘墓から前方後方墳へ－』婦負の国　弥生フォーラム資料
富山大学人文学部考古学研究室　1990　『越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告－北陸の前方後円・後方墳の一考察－』富山大学考古学研究報告第４冊
富山考古学会　1990　『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立50周年記念シンポジウム《発表要旨・資料集》
奈良県教育委員会　1961　『桜井茶臼山古墳　附　櫛山古墳』
奈良県立橿原考古学研究所　2002　『箸墓古墳周辺の調査』
奈良県立橿原考古学研究所付属博物館　2004　『前方後方墳－もう一人の主役－』
新潟県巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室　1993　『越後山谷古墳』
「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ　1993　『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』平成２年度文部科学省科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書　研究課題番号02301056（研究代表者　甘粕　健）　新潟大学人文学部考古学研究室
常陸安戸星古墳調査団　1982　『常陸安戸星古墳』
氷見市教育委員会　2001　『柳田布尾山古墳　第３次調査の成果』氷見市埋蔵文化財調査報告第33冊
堀　大介　2006　「越前・加賀地域」『古式土師器の年代学』　㈶大阪府文化財センター
埋蔵文化財研究会　1988　第24回埋蔵文化財研究集会『定型化する古墳以前の墓制』
埋蔵文化財研究会　1989　第25回埋蔵文化財研究集会『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』
埋蔵文化財研究会　1995　第38回埋蔵文化財研究集会『前期前方後円墳の再検討』
まつおか古代フェスティバル実行委員会　1997　『発掘された北陸の古墳報告会資料集（発表要旨）シンポジウム「５世紀の越の国－大型古墳の動向と地方豪族－」』
吉岡康暢　1991　『日本海域の土器・陶磁』〔古代編〕人類史叢書９　六興出版
鹿西町教育委員会　2005　『史跡 雨の宮古墳群　国指定史跡雨の宮古墳群整備事業に伴う発掘調査報告書』

第４節　百塚住吉遺跡・百塚遺跡のいわゆる出現期古墳が提起する諸問題

はじめに

ここでは、百塚住吉遺跡・百塚遺跡の弥生時代後期～古墳時代前期の墓域が提起するいくつかの課題を検討する。古墳や墳丘墓、周溝墓の概念規定については長い議論の歴史があり、現在でも論者によってさまざまに用いられている。北陸では他に台状墓があるものの、両遺跡の場合は盛土による構築法であり、主に地山を削り出して墳丘を構築する台状墓には当たらない。

古墳や墳丘墓、周溝墓といった細かな概念規定を行うことは可能だが、個々の墓がどれに該当するのかを判断することは、実際は難しい。各地の発掘調査事例から、方形周溝墓などの周溝墓も盛土を有することが明らかにされている。墳丘の構築法は、古墳・墳丘墓・周溝墓の間で顕著な差が認められないので、盛土工法という観点では弥生～古墳時代にかけて連続性が認められる。盛土工法の大きな画期は版築（様）工法の受容まで待たねばならない。従って、主体部が失われたために副葬品の様相が不明で、墳丘上での儀礼に用いられた供献土器が乏しい場合などは、墳丘構造からは上記３つの概念のどれに該当するのか判断できないことになる。また、周溝が全周する墓が墳丘を完全に削平された状態で検出された場合、方形周溝墓なのか方墳なのか方形墳丘墓なのかという判断も難しい。

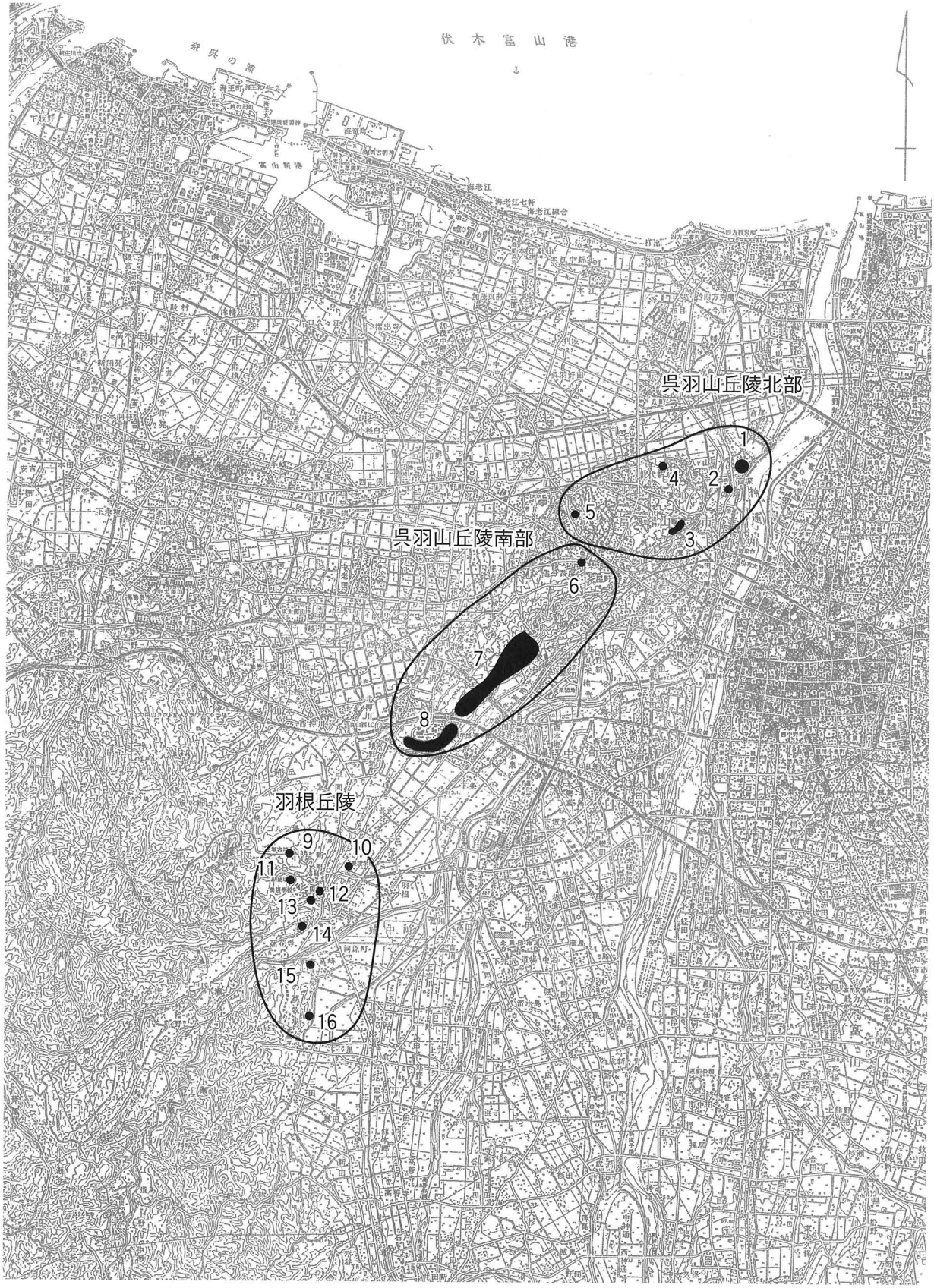
定型的とされる前方後円墳の成立を重視する立場もあるが、不定型あるいは小型の前方後円形の墓が定型的な前方後円墳に先立って成立することが明らかになり、また弥生墓制の多様性が明らかになるにつれ、古墳と墳丘墓、周溝墓の区分が難しくなっている。後の畿内に成立したヤマト王権（定型的前方後円墳に代表される）との関係をもつものを古墳と判断する立場もあるが、これは歴史解釈のモデルにあわせた演繹的なアプローチであり、汎日本列島的に普遍化してよいか、問題も残る。実際の考古資料（墓）に即す限り、ヤマト王権との直接的関係性を墳丘構造のみから追究することは難しい。副葬品（解釈はともかくとして、畿内に分布の中心が認められる、いわゆる威信財）からのアプローチが、現実的に採り得る方法となる。従って、副葬品の様相が明らかでないと、ヤマト王権との直接的関係性の有無を検討できないのが実状である。

以上から、本節では弥生時代後期後半～古墳時代前期前半に造営された墳丘盛土を持つ墓の総称として、いわゆる出現期古墳（以下、出現期古墳とする）と呼称する。第３章も、このような意味で前方後方墳・前方後円墳と呼称した。なお、土器の編年論は前節までに詳述されているので、基本的には再論しない。

第１項　婦負地域における出現期古墳の様相

婦負地域は、富山県域において古墳が集中する地域の一つである。ここでは、百塚住吉遺跡・百塚遺跡が所在する呉羽山丘陵北部と、呉羽山丘陵南部、羽根丘陵にわけて出現期古墳の様相を概観する（図１）。呉羽山丘陵南部・羽根丘陵については多くの先行研究があるものの、紙幅の都合から研究史の羅列は避ける。全長約７kmの呉羽山丘陵は、北東端から南西に向かって約2.3km地点に深い開析谷が入り込む。この開析谷を境として、便宜的に北部と南部に区分する。羽根丘陵は標高130mを最高位とした丘陵で、呉羽山丘陵から独立している。

呉羽山丘陵北部の様相　詳細は不明瞭ながら、百塚住吉遺跡・百塚遺跡以外にも出現期古墳は確認されている。杉坂古墳群（駒見1990・古川1999）は丘陵北東端の尾根筋（標高約50～60m）に立地し、数基からなる。いずれも削平を被っている。方形墓主体で、略測のみ行われている。６号墳の東辺に幅約５mの区画溝があり、深さ約50cm地点から高坏が出土した（図２）。坏部に３条の凹線をもつ点は、百塚住吉遺跡SZ04・勅使塚古墳出土高坏と類似している。詳細不明だが、６号墳の区画溝出土土器の年代観（弥生時代終末期前葉）に加え、いずれも低平と推定されることや地山削出しという構築法（１・７号墳）から、方形台状墓を主体とした墓域と推定できる。



1．百塚住吉遺跡・百塚遺跡　2．八ヶ山遺跡内古墳　3．杉坂古墳群　4．長岡八町遺跡　5．呉羽三ッ塚古墳　6．呉羽モグラ池遺跡　7．呉羽山丘陵古墳群　8．杉谷古墳群　9．王塚古墳　10．添ノ山古墳　11．勅使塚古墳　12．向野塚墳墓　13．六治古塚墳墓　14．鏡坂墳墓群　15．富崎墳墓群　16．富崎千里古墳群

図１　婦負地域における出現期古墳の分布（１：100,000、下図は国土地理院１：50,000地形図「富山」（平成19年１月１日発行１刷）・「八尾」（平成９年５月１日発行２刷）による）

八ヶ山遺跡内古墳は、百塚遺跡の方形周溝墓（SZ06）から南南東約400m、丘陵の縁辺（標高約19m）に立地する。墳頂には神明社が鎮座し、施工時に墳頂平坦面が若干削平されたように見受けられる（写真１・２）。辺長約15m、高さ約1.5mの方墳とされてきたが、甘粕　健氏は現地踏査により本墳を四隅突出型墳丘墓と捉え、その立地がもつ重要性を指摘している（古川2006）。

現況は、写真２のように墳端が外湾気味に見える部分もある。婦負地域で、試掘確認調査の結果、四隅突出型墳丘墓と確定した事例（突出部が明瞭に遺存していた例はない）の墳端の現況と似ているので、本墳は四隅突出型墳丘墓の可能性も十分ある。神通川水系に分布する婦負地域の四隅突出型墳丘墓のなかで最も下流に位置し、至近の百塚住吉遺跡・百塚遺跡の前方後方墳・前方後円墳の存在とあわせ、呉羽山丘陵北部の出現期古墳の意義を考えるうえで示唆的な立地を示す。

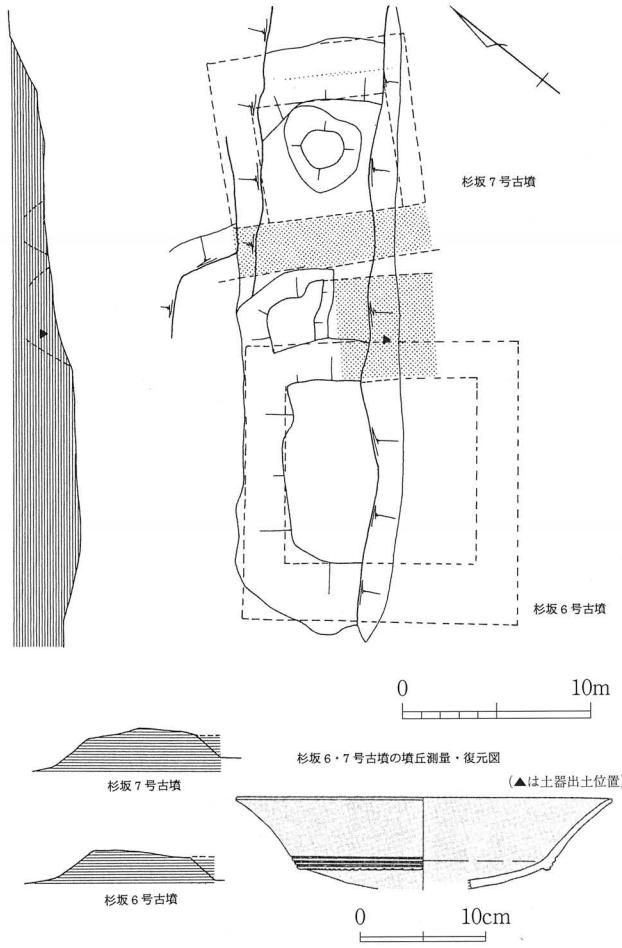


図２　杉坂６号墳（古川1999）と出土土器（駒見1990）

八ヶ山遺跡内古墳の東には曹洞宗友仙寺がある。また、友仙寺の南には個人（友仙寺檀家）の大規模墓地があり、同寺には「大正五年六月発掘之」と書かれた木箱に収納された弥生土器が寺宝として伝わっている。それらは、大正５年の大規模墓地の造成時に掘り出されたものと考えられる。弥生土器は破片状態になっておらず、焼成後底部穿孔された壷もあり、弥生墓からの出土品である可能性が高い（図３）。平成20年12月に、開発計画に伴って大規模墓地内の試掘確認調査（調査対象面積約2,400m^2）を実施した。遺構は確認されなかったが、古墳出現期と平安時代の遺物が若干出土した。試掘確認調査では旧地形と墓地造成工事の関係を知ることができた。当該地（標高約22m）の西側～北側には縄文時代からの遺物包含層が厚く堆積しているのに対し、南東隅（丘陵縁辺部）は遺物包含層が存在せず、墓地造成時の整地土直下で黄褐色地山が現れた。このことから、当該

写真１　八ヶ山遺跡内古墳（南東から）

写真２　八ヶ山遺跡内古墳（南西から）

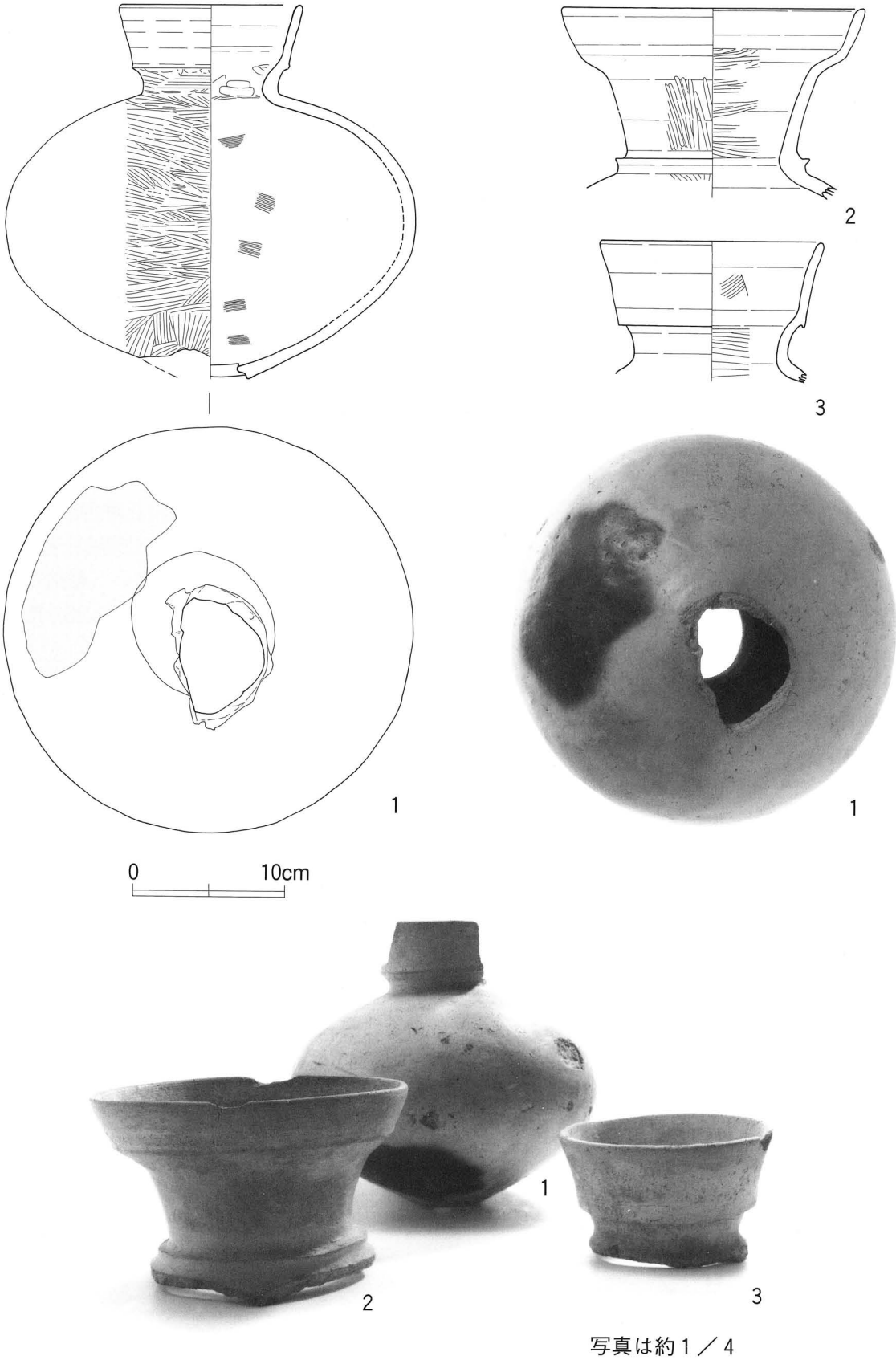


図３　曹洞宗友仙寺所蔵弥生土器（伝八ヶ山遺跡出土品）

地の旧地形は神通川寄りの丘陵縁辺から西方に向かって下る斜面地形だったことがわかる。水平面の造成にあたって、南東隅は地山まで大きく削り取られ、他の場所も遺物包含層を削り、必要に応じて盛土をして工事が行われた。このような大規模墓地内の状況からは、南東隅にあった弥生墓が造成工事の際に削平されるなかで友仙寺所蔵資料が拾い出されたと考えられる。なお、大規模墓地周辺の現地形と試掘確認調査結果から推定される旧地形を比較すると、大規模墓地南方も旧地形が損なわれている（削平されている）ことは明らかである。杉坂古墳群のように、出現期古墳は数基がまとまることが多いので、友仙寺周辺の丘陵縁辺部には出現期古墳が八ヶ山遺跡内古墳などの他にも点在していた可能性もある。

この他、呉羽三ッ塚古墳（小黒2004）も出現期の方墳と考えられる。

呉羽山丘陵南部の様相　杉谷古墳群（富山市教育委員会1974）は呉羽山丘陵南西端（標高約50～80m）に位置し、弥生時代終末期～古墳時代前期前半の出現期古墳が確認されている。四隅突出型墳丘墓（４号墳）や前方後方墳（一番塚古墳）、方形台状墓、長方形墳丘墓、円墳１基（三番塚古墳）から構成され、方墳の５号墳と６号墳の間にはほぼ同時期の方形周溝墓と方形台状墓、円形周溝墓から成る杉谷A遺跡（富山文化研究会1975）がある。方形周溝墓群は木棺型式や副葬品の内容が明らかになっており、素環頭鉄刀や鉄短剣、ヤリガンナ、鉄素材などの鉄製品のほか、銅鏃やガラス小玉などが出土した。杉谷古墳群に接して、北西方向へ約２kmにわたって続く呉羽山丘陵古墳群（富山市教育委員会1984）がある。婦負地域にあって、例外的に弥生時代終末期の四隅突出型墳丘墓（No.６・10・18号墳：いずれも未発掘調査であり、確定事例ではないが、その可能性は高い（藤田1999））や前期前方後円墳（No.16号墳）、中期前方後円墳（古沢塚山古墳）、後期前方後円墳（No.26号墳）など、断絶期を挟みつつも長期にわたって継続する。

呉羽山丘陵南部北端には呉羽モグラ池遺跡（小林1995・1997）がある。杉谷古墳群・呉羽山丘陵古墳群からはやや離れた位置にあり、直線距離ではむしろ呉羽山丘陵北部の杉坂古墳群に近い。呉羽山丘陵西麓に位置することもあわせ、呉羽山丘陵北部の呉羽三ッ塚古墳と共に、独立した感がある。不定形（長方形・コ字形）の周溝が連続して検出され、そのうち１つの区画中央に、長軸方向に沿って主体部が２基直列していた。基底部しか遺存していないが、箱形木棺と推定される（図４）。主体部の延長線上の周溝内には、主体部とほぼ同形同大の土坑があり、周溝内埋葬の可能性がある。周溝内埋葬は、百塚遺跡SZ03のほか、杉谷A遺跡の方形周溝墓でも確認されており、婦負地域で継続した埋葬習俗の一つだった可能性もある。周溝からは焼成後に底部が穿孔された大型長頸壷が出土した。埋葬儀礼に使用されたと考えられる本土器の年代から、杉谷A遺跡に先行すると考えられる。

羽根丘陵の様相　弥生時代後期後半（富崎３号墓）～終末期中葉（六治古塚墳墓）まで、６基の四隅突出型墳丘墓が確認されている。弥生時代終末期後葉に前方後方形墳丘墓（向野塚墳墓）が出現し、古墳時代前期には小型前方後方墳（９号墳）・方墳15基・円墳（10号墳）からなる富崎千里古墳群の

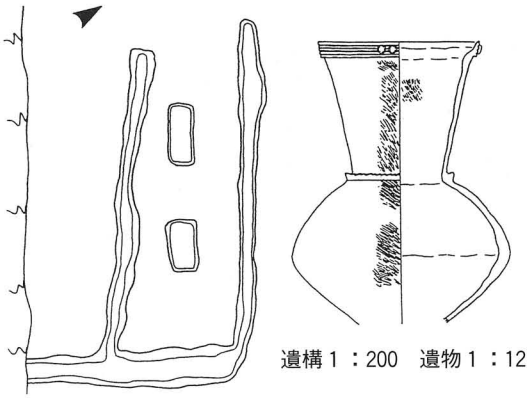


図４　呉羽モグラ池遺跡の方形周溝墓（小林1997，写真は小林1995）

ほか、大型前方後方墳（勅使塚古墳・王塚古墳）が出現する（婦中町教育委員会2002）。

以上の概観によれば、３地域とも方形墓が主体を占める点で共通する。呉羽山丘陵北部と羽根丘陵は古墳時代前期前半で墓域の形成が途絶えるのに対し、呉羽山丘陵南部が長期間にわたって墓域として利用され続ける点は異なるが、いずれも墓域形成の端緒は方形墓である。百塚住吉遺跡・百塚遺跡でも、最初に営まれたのは方形墓（方形周溝墓）である。百塚住吉遺跡の前方後円墳（SZ01・04）は北陸最古段階のものだが、小型前方後円墳であることとあわせて重視しなければならないのは、それらが突発的に出現したのではなく、方形墓を営むだけの階層分化が進行した集団がいくつか点在するなかで、そのうちの一つの集団が他の集団に先んじて前方後方墳と前方後円墳を採用したことである。有力集団のいない緩衝地帯に突如出現した前方後方墳・前方後円墳ではないことを確認しておきたい。なお、前方後方形の採用という点では３地域ともほぼ同時期の現象である。

第２項　居住域の位置

羽根丘陵（王塚・千坊山遺跡群）では丘陵上に墓域が形成され、眼下に当該期の集落が確認されたことで、墓域と居住域の対応関係が明らかになった（婦中町教育委員会2002ほか）。これに対し、呉羽山丘陵では今のところ墓域の眼下で当該期の集落が確認されていない。百塚住吉遺跡・百塚遺跡で確認された出現期古墳の被葬者の居住域は、どこに求めるべきであろうか。丘陵眼下だけでなく、周辺まで対象を広げても、当該期の集落として確実視できるだけの発掘資料が得られた遺跡は神通川河口付近の打出遺跡（富山市教育委員会2004・2006）のみである。打出遺跡は直線距離で約3.5km離れており、居住域としてはやや遠い感がある。古墳時代前期後半～中期の集落跡が確認された八町Ⅱ遺跡（富山市教育委員会2008）でも遺物包含層から古墳出現期の土器が少量出土しているものの、集落の存在を確実視できる状況にはない。従って、居住域は不明とせざるを得ない。しかしながら、王塚・千坊山遺跡群における墓域と居住域の位置関係や、古墳時代首長居館とその奥津城の関連性に関する研究（新潟大学人文学部考古学研究室2000）を参考にする限り、百塚住吉遺跡・百塚遺跡の出現期古墳を残した集団の居住域も遺跡近傍にあった可能性が高い。このような認識の下、ここでは第３章第１節で示した百塚住吉遺跡以外の近傍の遺跡（図５）における古墳出現期の様相を概観する。

百塚住吉B遺跡の様相　今次発掘調査では表土直下で平安時代や時期不明の遺構が確認された。また、平安時代以外にも弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が出土した。同様に、平成11年の試掘確認調査でも弥生時代後期の遺物が出土していた。今次発掘調査区の西隣の試掘確認調査区（今次発掘調査区との比高差約１m）では、弥生時代後期後半の遺構（土坑）や遺物（図６・写真３）が確認された。今次発掘調査（百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡）の検出遺構・出土遺物と比較して、最古段階に位置づけられる。百塚住吉B遺跡周辺は後世の土地利用により地形が大きく変化しているが、旧地形は西から東に向かって緩やかに下降していたと考えられる。より高位に位置し、早くから墓地として利用されてきた試掘確認調査区は削平を免れたと考えられる。百塚住吉B遺跡は、今次発掘調査では古墳出現期の遺構が明確でないものの、弥生時代後期後半から人々の活動の場として利用されていたのである。

百塚住吉D遺跡の様相　遺構は確認されていないが、遺物包含層から弥生土器が定量出土した（第２章第２節）。代表的なものを図７・写真４に示す。奈良時代のピットに混入した細形管玉（直径2.37mm）は、寺村光晴氏の型の基準ではⅠa型に相当する。わずか１点から管玉の年代を推定することには慎重でなければならないが、北陸でⅠa型は弥生時代中～後期に位置づけられる（寺村1981）。本遺跡のような細形管玉は、長岡八町遺跡でも表面採集されている。丸玉２点・垂玉１点と共に採集された管玉22点は直径1.90～2.85mm（平均2.38mm）であり、Ⅰa'型が１点のほかはすべてⅠa型である。Ⅰa型が主体であることから中～後期の時期幅で捉えられ、Ⅰa'型は後期中葉に出現するとされることから、後期後半に限定できる。長岡八町遺跡採集管玉が弥生時代終末期（月影式期）に下る要

図５　百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡近傍における古墳出現期の遺跡
（１：5,000、下図は富山市基本図（平成７年作成）による）

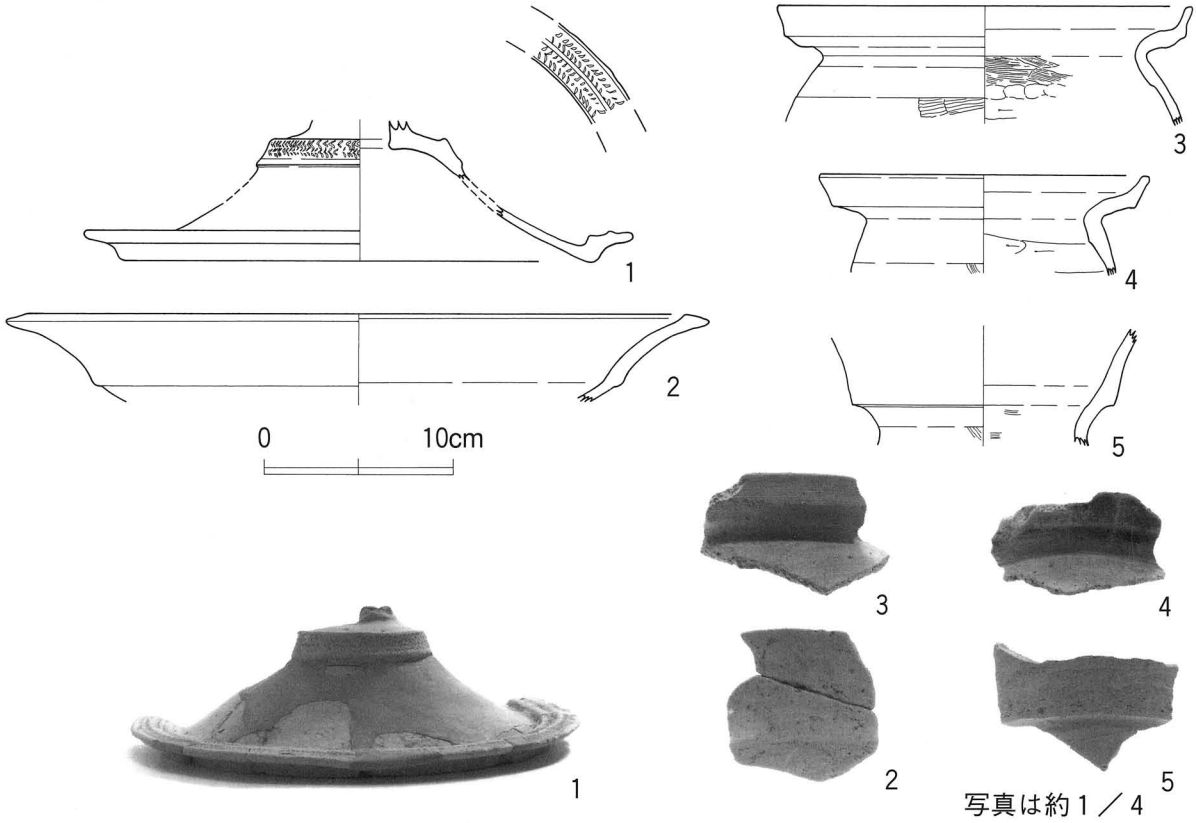


図６・写真３　百塚住吉B遺跡（平成17年度試掘確認調査区）出土土器（位置は図５参照）

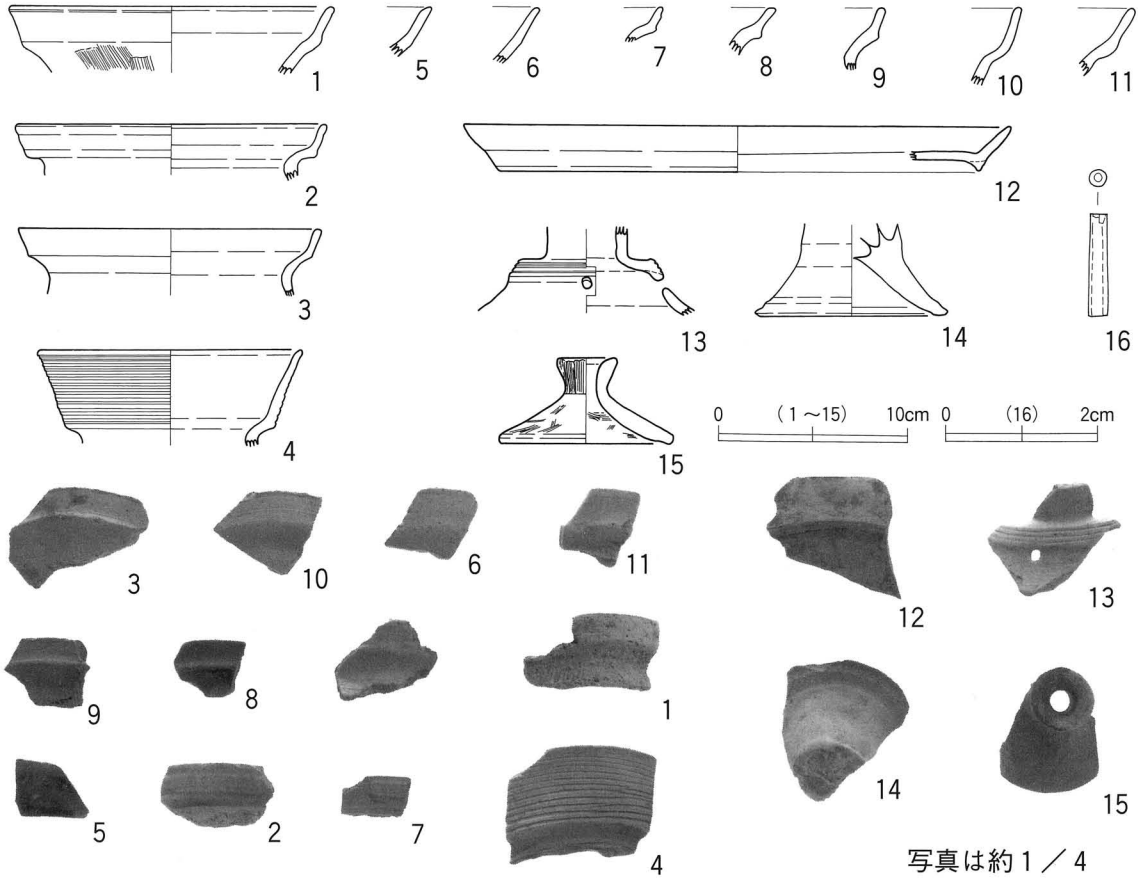


図７・写真４　百塚住吉D遺跡発掘調査出土品
（土器は遺物包含層出土品、細形管玉はピット（奈良時代）出土品、位置は図５参照）

素は認められない。百塚住吉D遺跡出土管玉も長岡八町遺跡採集管玉とほぼ同時期に位置づけられる。包含層出土土器より古くなるが、それは後期後半に遡る遺構の存在を示唆するものである。

藤田富士夫氏は、長岡八町遺跡採集管玉から土壙墓の存在を推測している（藤田1977）。同型式の管玉が同時にまとまって採集された以上、その可能性は高い。長岡八町遺跡の存在もあわせ、呉羽山丘陵北部では弥生時代後期後半以降、人々の生活痕跡をうかがうことができる。現状では、百塚の地に出現期古墳を残した集団の居住域は、呉羽山丘陵北部にあったと想定すべきであろう。

第３項　北陸における百塚住吉遺跡・百塚遺跡の出現期古墳の歴史的位置

(1)出現期古墳の先後関係

主要地方道富山八尾線道路改良事業では、百塚住吉B遺跡・百塚住吉遺跡・百塚遺跡を縦断して法線が計画された。百塚遺跡B地区の南方で実施した試掘確認調査では出現期古墳が確認されていないので、法線部分の南北方向では百塚住吉遺跡SZ06（以下、百塚住吉SZ06とする。他遺構も同様に略記する）が北端、百塚SZ06が南端と判明した。いずれも方形周溝墓である。ここでは、百塚住吉遺跡・百塚遺跡の出現期古墳の相対的先後関係を明らかにするため、主に第３章で築造時期を言及しなかった墓の検討を行う。

百塚SZ04の検討　両遺跡では、３基の方形周溝墓を検出した。周溝が全周するもの（百塚住吉SZ06）、四隅に陸橋をもつもの（百塚SZ06）、一辺の中央にのみ陸橋をもつもの（百塚SZ04）が各１基ある。百塚住吉SZ06は出土土器から月影Ⅰ式期（弥生時代終末期前葉）と特定でき（第３章第４節）、百塚SZ06も杉谷A遺跡との比較から弥生時代終末期頃に位置づけられる（第３章第６節）。

北陸における百塚SZ04の類例を表１にまとめた。類例は加賀・越中・越後に認められる。越後の奈良崎遺跡１号方形周溝墓の規模・形態が最も類似する。同墓が出土土器から弥生時代後期に位置づけられる（新潟県教育委員会ほか2002）ほか、加賀の千木野A遺跡SX01（石川県小松市教育委員会1996）や宮永ほじ川遺跡６号溝（石川県松任市教育委員会ほか1995）から、本型式の墓は弥生時代後期から古墳時代前期後半まで続くことがわかる。越中の石塚遺跡SZ03（高岡市教育委員会1992）は全容が不明だが、陸橋幅から大型墓と推定できる。周溝（陸橋付近）は前方部を意識していない。出土した二重口縁壷が加賀漆町遺跡編年（田嶋1986，以下、漆町○群期とする）の漆町７群期に位置づけられるので、当該期以降は墳丘の大型化が進むことがわかる。時期差が、墓の規模に表れているのである。以上から、小型墓の百塚SZ04は漆町７群期までは下らない可能性が高い。

参考として付した、高橋分類１類（前方後方形周溝墓）は未発達ながらも前方部を意識したものであり、これらの時期も考慮することで百塚SZ04の下限を推定することができる。高橋浩二氏の検討（高橋2006）によれば、１類は漆町５～７群期に位置づけられるという。前方部という意識が芽生えつつある高橋１類が弥生時代終末期後半には成立するので、百塚SZ04は下っても弥生時代終末期後半までと考えられる。

百塚SZ04の時期を遺構単独で推定すると、弥生時代後期～終末期後半とせざるを得ないが、隣接する墓の時期や遺跡の形成時期幅を考慮すると、ある程度時期幅を限定できる。百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡の発掘調査・試掘確認調査出土弥生土器は後期後半（法仏式期）が上限である。集落の存在を明瞭に把握できていないが、当該期の竪穴建物などのほか、土器も定量確認されたので、調査区周辺に弥生時代後期後半から人々が居住し、墓域も形成されたと考えられる。従って、墓域形成の上限は後期後半で、百塚SZ04がその端緒の一つとなった可能性が高い。後述する百塚SZ05が弥生時代終末期後半に位置づけられるので、下限は弥生時代終末期前半と推定できる。

以上から、百塚SZ04はおおむね弥生時代後期後半～終末期前半の時期幅で捉えられる。

百塚SZ05の検討　百塚SZ05は、地中レーダー探査の結果、短い前方部の存在が推定された（第４章第７節）。推定された後方部形態は不整形だが、発掘調査を行えば周溝は方形にめぐると予想され

表１　北陸における百塚SZ04の類例と前方後方形周溝墓（高橋分類１類）

遺跡・遺構名（旧国名）	全長（m）	後方部幅（m）	前方部長（m）	くびれ部幅（m）	くびれ部比率（くびれ部幅÷後方部幅×100）	時期（田嶋1986ほか）
百塚・SZ04（越中）	9.0（辺長）	—	—	4.3（陸橋幅）	—	弥生時代後期後半～終末期前半
戸水C・ST02（加賀）	7.2（辺長）	—	—	2.2（陸橋幅）	—	不明
御経塚シンデン・ST05（加賀）	8.2（辺長）	—	—	2.8（陸橋幅）	—	漆町７群期以前
奈良崎・１号方形周溝墓（越後）	10.8（辺長）	—	—	4.2（陸橋幅）	—	弥生時代後期
藤ヶ森・方形周溝墓（越後）	8.6（辺長）	—	—	4.0（陸橋幅）	—	不明
石塚・SZ03（方形周溝墓、越中）	不明	—	—	５m以上（陸橋幅）	—	漆町７群期
千木野A・SX01（加賀）	約16（辺長）	—	—	3.6（陸橋幅）	—	漆町９群期
宮永ほじ川・６号溝（加賀）	約17（辺長）	—	—	７m程度か（陸橋幅）	—	漆町９～10群期
下新町・SX33（越後）	3.8	2.5	0.7	0.5	20.0	不明
一塚・SX07（加賀）	16.0	13.2	3.4	4.5	34.1	漆町５～６群期
藤江C１号墳（加賀）	12.5	10.2	2.2	約3.9	38.2	漆町７群期
神野・SD303（加賀）	21.0	15.6	4.0	5.5	35.3	不明
宇気塚越１号墳（加賀）	19.0	13.0	4.0	5.0	38.5	漆町７群期

※１：辺長は陸橋に対して直交方向の辺で計測した。陸橋の延長方向の辺長と長さが異なる場合が多い。
※２：赤塚分類（赤塚1992）のB１型墳丘墓でも、「前方部」への意識を認め得る（陸橋の周溝下端線が「前方部」方向に向かって屈曲する）ものは除外した。また、一辺の中央１ヶ所のみに陸橋をもつ例のみを集成し、陸橋が１ヶ所でも、隅角に近いものは除外した。
※３：御経塚シンデン遺跡ST05は、報告（石川県野々市町教育委員会ほか2001）では前方後方墳、高橋浩二氏（高橋2006）は前方後方形周溝墓とするが、報告書（図面・写真）を見る限りでは「前方部」への意識を認めることができない。ここでは、同墓の「前方部」を陸橋と捉え、方形周溝墓として扱う。規模は報告図面から計測した。なお、同遺跡ST10（漆町７群期，13m×11.5m）も幅1.8mの陸橋をもつが、他例に比べて陸橋が細く、大型の周溝を伴うことから陸橋をもつ方墳と判断し、本表からは除外した。
※４：一塚遺跡SX07より下段（前方後方形周溝墓）は、高橋2006から引用した。

る。市道下の既設埋設管等の影響から、前方部前端周溝の有無は判読できなかった。百塚住吉・百塚SZ02は浅い溝があり（第３章第３節）、百塚住吉SZ03は調査担当者により、本来的に前方部前端周溝が存在しない可能性が高いと判断された（第３章第４節）。前方部長に具現化する前方部への意識の強弱という観点から3基を比較すると、百塚SZ05は最も意識が弱いと判断される。百塚SZ05出土土器は弥生時代後期後半を主体とし、終末期のものを含む。いずれも破片資料で、埋葬儀礼に用いられたものと認定できるものはない。前田清彦氏（前田1997）や高橋氏（高橋2006）、伊藤雅文氏（伊藤2008）の研究成果を考慮すると、弥生時代後期後半に百塚SZ05ほどの前方部をもつ墓があるとは考えにくい。百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡では弥生時代後期後半から人々の生活痕跡をうかがうことができるので、百塚遺跡でも当該期に人々が生活していても不思議ではない。以上から、百塚SZ05出土土器は墳丘盛土への混入品と理解できる。

築造時期を推定する手がかりは、周溝から出土した柳葉形鉄鏃である。北陸において弥生時代鉄器の出土例は加賀に多く、越中では数が限られる。越中で鉄器生産（鍛冶）が行われた可能性を想定できるのは富山市打出遺跡（富山市教育委員会2006）のみである。打出遺跡では切片（端切れ）や棒状鉄器（第51図）の存在を主たる根拠（鍛冶炉の可能性も想定できるピットも含め）に、村上恭通氏（村上1998・2000）や松井和幸氏（松井1999・2001）が想定する始原的な鍛冶（棒状鉄器を叩き延ば

し、鏨で切断して製品に加工する）工程が、弥生時代後期後半～古墳時代前期前葉に行われていた可能性を想定できる（小黒2006）。出土鉄器の様相から、鉄鏃や切出形のナイフなどの小型品は十分に製作できる状況にあったと考えられる。

このような弥生時代鉄器の受容のあり方や製作状況を考慮しつつ、当時としては貴重な鉄器が墓から出土したことを重視するなら、百塚SZ05出土鉄鏃は本来、主体部に副葬されていたが、削平に伴って周溝内へ流入したものと判断できるのではなかろうか。従って、百塚SZ05は鉄鏃からの年代推定が可能となる。弥生時代鉄器の出土例が多い北陸南西部の集落遺跡において、鉄鏃は弥生時代後期前半から認められる。百塚SZ05例の類例としては、石川県津幡町七野墳墓群９号墓（方形台状墓）出土品を挙げられる。同墓の詳細は明らかでないが、林　大智・佐々木勝両氏は弥生時代終末期（月影式期）に位置づけており（林・佐々木2001）、百塚SZ05例も弥生時代終末期頃に位置づけることが可能である。わずか１例から、月影式期に限定することには慎重でなければならないので、前方後方形を呈することを加味して白江式期までの幅をもたせる。百塚SZ05は特に、論者によっては「前方後方形墳丘墓」・「前方後方形周溝墓」と呼称されるものであり、呉羽山丘陵北部で最初に造営された前方後方形の墓である。ほぼ同時期に、羽根丘陵（向野塚墳墓）や呉羽山丘陵南部（杉谷一番塚古墳）でも前方後方形の墓が出現する。

前方部の様相　先に検討した百塚SZ04は、赤塚分類（赤塚1992）のＢ１型墳丘墓に相当する。周溝形態に注目すると、百塚住吉SZ03はＢ２型、百塚住吉・百塚SZ02がＢ３型、百塚SZ05はおそらくＢ２型と思われる。つまり、遺跡内に赤塚分類のB型すべてが存在するのである。ここで、仮に前方部の発達という観点で型式組列を組むと、平面形態における発達は前方部の伸長や、前方部前端周溝の有無（墳丘内外の明示）から読み取れることになる。一方、立面形態（周溝）に注目すると、前方部の伸長と共に前方部の周溝も浅く狭いものから、深く広いものへと発達すると想定できるだろう。

これらの視点から百塚住吉遺跡・百塚遺跡の出現期古墳を検討する。平面形態からは、百塚SZ04（Ｂ１型）→百塚SZ05（Ｂ２型？）（→）百塚住吉SZ03（Ｂ２型）→百塚住吉・百塚SZ02（Ｂ３型）となる。立面形態に注目すると、前方部周溝が不明な百塚SZ05を除いて、百塚SZ04→百塚住吉・百塚SZ02→百塚住吉SZ03となる。百塚住吉・百塚SZ02と百塚住吉SZ03の先後関係が、平面形態からの推定と立面形態からの推定とでは逆転することになる。百塚住吉SZ03が前方部前端周溝をもつ（Ｂ３型）と解釈すれば矛盾は解消されるが、遺跡を最も熟知した調査担当者の観察所見を重視する。

このような前方部周溝の立面形態の差は、前方後円墳（百塚住吉SZ01・04）でも認められる。調査区外に遺構が続くことや撹乱を被っていることから、第３章第３・４節では慎重を期して両墳とも前方部前端周溝の有無は不明とした。ここでは発掘所見を基に前方部前端周溝の有無を検討する。

SZ01の前方部西側周溝の墳丘側下端線（第13図）および等高線図（第14・116図）をみると、東に向かって曲がり始めていることがわかる。主軸上において復元的に当該部を観察すると、後円部長：前方部長は１：0.92であり、ほぼ等しい。従って、前方部の墳端は検出した南端付近に存在した蓋然性が高く、曲がり始めた周溝が前方部前端に巡っていくと考えられる。SZ04の主軸上における後円部長：前方部検出長は１：0.67であり、前方部は調査区外にある程度伸びる可能性が高い。前方部前端は撹乱や用水掘削により失われていると判断されるが、SZ04の前方部周溝はSZ01と異なり、くびれ部から急激な変化を伴わずに徐々に浅くなっている点に注目したい。くびれ部を境に急激に浅くなるSZ01が前方部前端周溝をもつのであれば、徐々に浅くなるとはいえ、SZ01よりも周溝掘削に労力を投入したSZ04が前方部前端周溝をもたないとは考えにくい。赤塚分類を準用すると、共にＢ３型の可能性が高いものの、周溝の立面構造の差を重視するとSZ04の方が新しいと考えられる。

周溝の立面構造の差と共に注目すべきは、前方後方墳・前方後円墳と形が違っても、周溝の立面構造が共通する２基が、主軸方向を直交／斜交させるかのように前方部を近接させて位置することである。百塚住吉・百塚SZ02と百塚住吉SZ01、百塚住吉SZ03と百塚住吉SZ04が一対となる。これらの関

係性を重視すると、百塚SZ05の東側に前方後円形の墓が存在する可能性も想定できる。２基一対の配置は密接な関係があったことを示しており、それは当然ながら築造時期も近いことを示唆する。

百塚住吉SZ01と百塚住吉・百塚SZ02は共にＢ３型である。前方部周溝の立面構造も類似しているが、百塚住吉SZ01の方が若干幅広で深く掘削されている。全長も百塚住吉SZ01の方が大形化しており、百塚住吉SZ01に後出的要素が認められる。

以上の前提的資料操作を基に、土器の年代観との整合性を確認する。百塚住吉・百塚SZ02は出土土器から古墳時代前期前葉（古府クルビ式期）に位置づけられ（第４章第３節）、百塚住吉SZ04も白江～古府クルビ式期に位置づけられる（第３章第４節）。百塚住吉SZ01・03出土土器には、百塚住吉・百塚SZ02や百塚住吉SZ04と同列に扱えるような出土状態の資料はなく、遺構の時期を推定するにあたって資料的精度は低い。ただ、小破片ながら東海系土器は古府クルビ式期に位置づけられる（第３章第３節）。

百塚住吉・百塚SZ02出土直口壷は、単体でみた場合は二重口縁壷より古相を示す（白江式期）とも考えられるが、伴出資料の二重口縁壷の年代観を重視して、古府クルビ式期に位置づけるのが妥当である。なお、口縁部形態は違うものの、外面に叩き調整が施された壷は富山市婦中町鍛冶町遺跡（婦中町教育委員会2003）からも出土している。百塚住吉SZ04出土高坏は白江式期に位置づける見方もあろうが、大型高坏の類例が古府クルビ式期（漆町７群期）の大型前方後方墳である（㈶富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2003・小黒2007）勅使塚古墳でも認められ、同墳を漆町８群期とみる考え（高橋2006・2007，大野2007）もあるので、大型高坏は古府クルビ式期までは残ると評価する。従って、百塚住吉・百塚SZ02と百塚住吉SZ04は、土器の年代観からはほぼ同時期となる。

２基一対の計画的配置から築造時期が近接する可能性を想定できることは、埋葬儀礼に使用されたと認め得る土器がない百塚住吉SZ01・03も、百塚住吉・百塚SZ02と百塚住吉SZ04の土器の年代観からほぼ同時期の築造と推定できることになる。つまり、Ｂ２型の百塚住吉SZ03とＢ３型の百塚住吉SZ01は、ほぼ同時期に築造されたのである。百塚住吉SZ04の後円部南側周溝は北側周溝と比べて内外縁とも直線的であり、これは先行して造営された百塚住吉SZ03に配慮した結果と考えられる。また、立面構造の差からは百塚住吉SZ01より百塚住吉SZ04の方が後出的と捉えられる。

以上を総合すると、古府クルビ式期のなかでの相対的先後関係は、百塚住吉SZ03→百塚住吉・百塚SZ02→百塚住吉SZ01→百塚住吉SZ04となる。百塚住吉SZ03に先立って百塚SZ05が造営されたので、

表２　百塚住吉遺跡・百塚遺跡の出現期古墳の変遷（相対的先後関係）

	時期	A群	B群	C群	参考（婦負地域）
弥生時代	後期後半				富崎3号墓（◆）
	終末期前葉	↑ 百塚SZ04（◇） ↓		百塚住吉SZ06（◇）	呉羽モグラ池（◇） 鏡坂1号墓（◆）
	終末期中葉		↑		六治古塚墳墓（◆）
	終末期後葉	↑ 百塚SZ05（■） 【A-2群】↓　【A-1群】	百塚SZ06（◇） ↓		杉谷A遺跡（◇） 杉谷4号墳（◆） 向野塚墳墓（■）
古墳時代	前期前半	百塚SZ03（■） 百塚住吉・百塚SZ02（■） 百塚住吉SZ01（●） 百塚住吉SZ04（●）	百塚SZ01（□） ↑ 百塚SZ03（□） ↓	↑ 百塚住吉SZ05（○） ↓	↑ 勅使塚古墳（■） ↓

◇:方形周溝墓　◆:四隅突出型墳丘墓　■:前方後方形墳丘墓・前方後方墳　●:前方後円墳　□:方墳　○:円墳　←→:推定時期幅

相対的には前方後方墳の方が古いものの、小型前方後方墳と小型前方後円墳が同じ土器型式の時間幅のなかでほぼ同時存在したことを確認しておきたい。また、B２型（百塚住吉SZ03）とB３型（百塚住吉・百塚SZ02）がほぼ同時存在することは、B１型→B２型→B３型と単純に進化論的型式変化を遂げるのではなく、実際は複雑だったことを示している。それは、富山県高岡市石塚遺跡SZ01（B１型：漆町７群期）とSZ02（B３型）がほぼ同時期に存在することからも明らかである。

方墳と円墳　百塚SZ01・03は方墳、百塚住吉SZ05は円墳である。このうち、埋葬儀礼に使用されたと考え得る出土状態で土器が出土したのは百塚SZ03のみである。同墳出土土器は二重口縁壷の年代観から漆町７・８群期に位置づけられる（第５章第３節）。SZ03の周溝北東隅は隣接するSZ01の周溝南西隅を避けるように狭められており、これは先行して造営されたSZ01に配慮した結果と考えられる。SZ01・03も重複せずに隣接しているので、先に示した前方後円墳と前方後方墳の関係と同じく、２基一対で計画的に配置されたと考えられる。SZ01の周溝出土太形管玉は第99図５が寺村分類Ⅳb型（径9.10mm）、同６がⅣa型（8.35mm）であり、弥生時代の管玉とは考えられない。古墳時代に下るものであり、SZ03出土土器の年代観と整合する。両墳は古墳時代前期前半に相次いで造営されたと考えられる。

百塚住吉SZ05からは、埋葬儀礼に使用されたと考えられる土器は出土していない。婦負地域における小型円墳の出現時期も詳細不明だが、方形墓主体の墓域に円墳が１基のみ存在する例は認められる。富崎千里古墳群は古墳時代前期前半の古墳群とされている（婦中町教育委員会2002）。10号墳のみ円墳（直径約20m）で、古府クルビ式期に、方墳群に後続して造営されたと推定されているが、時期を限定できるだけの資料は得られていない。方墳群のなかに立地し、同古墳群では前期後半に下る資料は確認されていないものの、漆町８群期までの幅をもたせて捉える必要がある。

杉谷古墳群でも三番塚古墳（直径約25m）が唯一の円墳として造営された。トレンチ調査では遺物が出土していない。杉谷古墳群の長方墳のいくつかは弥生時代終末期前葉の方形台状墓（杉谷８・９・10号墳）や終末期中葉の長方形墳丘墓（杉谷６号墳）と考えられ、方形墓は弥生時代終末期のなかで終焉を迎えると推定される（小黒2007a）。このことから、新たな墳形ながら同じ墓域に造営された三番塚古墳は古墳時代前期前半のものと推定する。

富山県高岡市桜谷古墳群（大村1926）でも前期前半の円墳は認められる。９号墳（直径約18m）は中期古墳とされてきたが、採集された内行花文鏡が清水分類の倣製内行花文鏡DⅠ類に相当し、前期前葉の製作と推定されている（清水1994）ことから、本墳は前期前半に造営されたと考えられる（小黒2005）。ここで例示した円墳は百塚住吉SZ05（直径約12m）に比べて大形であり、階層的には上位に属すと考えられるが、SZ05を古墳時代前期前半の造営と推定する際に否定する材料とはならないだろう。杉谷A遺跡では円形周溝墓（赤塚分類を準用するとB１型に相当）が１基検出されており、円形墓は弥生時代終末期から存在した。

百塚住吉遺跡・百塚遺跡で検出した11基の出現期古墳は、その位置関係や型式組列からA～Cの３群に大別できる。A群は方形周溝墓（B１型）から前方後方形に変化し、前方後円墳と密接な関係をもつグループで、百塚住吉遺跡A・B地区および百塚遺跡A地区に位置する。百塚SZ05の位置づけは流動的だが、くびれ部を境に急激に浅くなる前方部の周溝形態を志向したA１群と急激な差を設けずに徐々に浅くすることを志向したA２群に細分できる。B群は四隅に陸橋をもつ方形周溝墓から方墳へと変化するグループで、百塚遺跡A・B地区に位置する。この変化は、杉谷A遺跡と杉谷古墳群を一体のものとしてみた場合の変化と類似している。C群は百塚住吉遺跡C地区に位置する。SZ05とSZ06は時期差があると推定されるので、本来ならば２群に分ける必要があるものの、便宜的に一括した。B群と同様に、杉谷A遺跡と杉谷古墳群を一体のものとしてみた場合の変化と類似する。

(2)下島説の検討

第５章第２節において、百塚住吉SZ04が、当初は前方後方墳として造営されていたが、前方後円

墳という新たな情報を得た結果、途中から前方後円墳に設計変更された可能性が指摘された（以下、下島説とする）。それは、後円部の周溝形態を主たる根拠として、前方後方墳と前方後円墳が共存する例が認められる例があることも念頭に置いた解釈である。最も遺跡を熟知した調査担当者の解釈であり、尊重されるべきものではあるが、編集者の立場から若干の検討を加えておく。

先に示したように、後円部の周溝形態からは、先行して造営された百塚住吉SZ03に配慮した結果とも解釈できる。下島説には、設計変更後、なぜ後円部南側周溝および西側周溝を他と同様に、築造企画通り丸く仕上げなかったのかという疑問を整合的に説明できないという問題点がある。十分なスペースがあるにもかかわらず、設計変更後の築造企画通りに施工されなかった理由が説明されねばならない。推定される出現期古墳の相対的先後関係や２基一対の配置（セット関係）を念頭に置くとき、設計変更という検証が困難な解釈よりも、先行する古墳に配慮した結果、直線的になったと判断する方が良いのではなかろうか。

(3)百塚住吉SZ01・03・04、百塚住吉・百塚SZ02、百塚SZ05の歴史的位置

ここでは、北陸における漆町８群期までの前方後方墳（前方後方形墳丘墓を含む）・前方後円墳の様相を概観することで、百塚住吉SZ01・03・04、百塚住吉・百塚SZ02、百塚SZ05の歴史的位置を探る。

前方後方墳の歴史的位置　表３に北陸の古墳時代前期前半までの前方後方墳をまとめた。越前・加賀では漆町５～６群期に前方後方形の墓が出現する。この段階のものは前方後方形墳丘墓、もしくは前方後方形周溝墓と呼ばれることが多い。能登・越中・越後ではわずかに遅れるものの、ほぼ同時期に出現する。現状では北加賀での検出例が多く、南加賀を含めて全長15m超の規模である。能登・越中では時期が下ることとも関係すると思われるが、若干大形化する。百塚SZ05は前方部の詳細が不明なものの、副葬品と判断できる鉄鏃の類例が北加賀の七野９号墓にあり、前方部の存在とあわせ、当該期に位置づけられる。百塚SZ05は、北陸最古級の前方後方形墳丘墓の一つと評価できる。全長は不明だが、推定後方部長が約８ｍと、百塚住吉SZ03より小形であることから、SZ03の方が後出すると考えられる。鉄鏃の類例が北加賀に認められることを重視するなら、鉄鏃だけでなく本墓制に関する情報も北加賀から呉羽山丘陵北部にもたらされた可能性を想定できるのではなかろうか。

漆町７群期になっても、北加賀では若干規模を大形化させつつ、前代から引き続いて小型前方後方墳が造営される。この段階のものも前方後方形周溝墓と呼称する立場もあるが、ここでは小型前方後方墳とする。南加賀や能登、越中でも墳丘規模が大形化する。この段階になると、北加賀よりも他地域の方が墳丘規模は大きくなり、漆町８群期にはさらに大形化して、北加賀に顕著な前方後方墳は認められなくなる。百塚住吉SZ03および百塚住吉・百塚SZ02は、漆町７群期の小型前方後方墳としては一般的な規模であり、前代にもたらされた前方後方形墳丘墓をベースとして、若干大形化させつつ継続的に造営されたのであろう。百塚住吉SZ03のように、後方部から前方部に向かって周溝が徐々に浅くなる小型前方後方墳は多くある。しかしながら、百塚住吉・百塚SZ02のようにくびれ部を境に前方部の周溝を急激に浅くさせるものは、現在までのところ当該期の北陸には呉羽山丘陵北部以外に認められない。本墳では畿内系二重口縁壺が埋葬儀礼に用いられた。この点を考慮すると、特異な前方部周溝は本集団独自の発案である可能性のほかに、他地域の集団からもたらされた情報に基づく可能性も想定できるが、現状ではその故地を見出せない。後述する宿東山１号墳（能登）は、百塚住吉・百塚SZ02および百塚住吉SZ01と立面形態が類似した周溝をもつものの、両墳に後出する。

前方後円墳の歴史的位置　表４に北陸の古墳時代前期前半までの前方後円墳をまとめた。一見して、数が少ないことがわかる。いわゆる纒向型前方後円墳（寺沢1988）が加賀（分校カン山１号墳）・能登（宿東山１号墳）・越後（観音平４号墳）にあり、これらに比べて前方部が長い一群（百塚住吉SZ01・04，谷内16号墳，稲場塚古墳）もある。北陸における古墳時代前期前半の前方後円墳は２群に大別できることになる。なお、表４から除外した、筆者が造出付円墳と捉える一群の造出に関して、いわゆる纒向型より短小の前方部と捉える立場を含めれば、合計３群となる。

表３　北陸における前方後方形墳丘墓と古墳時代前期前半の前方後方墳

遺跡名（旧国名）	全長(m)	主体部	副　葬　品	時期（田島1986）	備　考
松尾谷（若狭）	約40	割竹形木棺３	ヤリガンナ１（後方部主体）、ヤリガンナ１・管玉３（前方部第１主体）、槍１・剣１・鉄鏃１（前方部第２主体）	漆町８～９群期	前方部複数埋葬
中角SX－１（越前）	20.8	－	－	漆町５～６群期	
小菅波４号（加賀）	16.6	箱形木棺２	ヤリガンナ１・ガラス小玉５（第１主体）、ヤリガンナ１・鉄鏃２（第２主体）	漆町５～６群期	前方部周溝よりヒスイ勾玉１・管玉１
一塚SX03（加賀）	16	－	－	漆町５～６群期	周溝からガラス小玉１
一塚SX04（加賀）	17.5	－	－	漆町５～６群期	
一塚SX07（加賀）	14	－	－	漆町５～６群期	
河田山３号（加賀）	17.5	割竹形木棺	鉄剣１・ヤリガンナ２	漆町５～６群期？	
藤江C１号（加賀）	12	－	－	漆町７群期	
戸水C・ST01（加賀）	8	－	－	漆町７群期	
戸水C・ST16（加賀）	21.3	－	－	漆町７群期	
末寺山５号（加賀）	30.6	木棺	剣１	漆町７群期	
御経塚シンデン・ST01（加賀）	27	－	－	漆町７群期	
御経塚シンデン・ST14（加賀）	20.8	－	－	漆町７～８群期	
戸水C・ST11（加賀）	24	－	－	漆町７～８群期	
南新保１号（加賀）	30	－	－	漆町７～８群期	
河田山１号（加賀）	25	－	－	漆町７～８群期？	
末寺山２号（加賀）	30.4	－	－	漆町７～８群期？	
末寺山６号（加賀）	57.4	－	－	漆町８～９群期	
上町マンダラ２号(能登)	21	－	－	漆町６～７群期	
宇気塚越１号（能登）	18	箱形木棺３	ヤリガンナ２・鉄鏃１・ガラス小玉１	漆町７群期	埋葬施設は重複
垣吉B22号（能登）	17.5	箱形木棺	なし	漆町７群期	
大槻11号（能登）	27.7	－	－	漆町７群期	
国分尼塚２号（能登）	33	割竹形木棺	鏡１・鉄器１・管玉20	漆町７～８群期？	
国分尼塚１号（能登）	53.5	割竹形木棺	鏡1・鉄刀1・剣1・短刀1・槍2・鞆1・銅鏃57・鉄鏃4・鉄斧3・鑿3・ヤリガンナ2・勾玉1・管玉10	漆町８群期	木棺囲み木組施設
小田中亀塚（能登）	61	－	－	漆町８群期	
川田ソウ山１号（能登）	53.6	－	－	漆町８～９群期？	
百塚SZ05（越中）	－	－	－	漆町５～６群期	後方部周溝から鉄鏃１推定後方部長約８ｍ
向野塚（越中）	25.2	－	－	漆町６群期	
杉谷一番塚（越中）	39	－	－	漆町６～７群期？	
百塚住吉SZ03（越中）	約14	－	－	漆町７群期	
百塚住吉・百塚SZ02（越中）	17.3	－	－	漆町７群期	
富崎千里９号（越中）	33.5	－	－	漆町７群期	
石塚SZ02（越中）	29	－	－	漆町７～８群期	
勅使塚（越中）	64.5	－	－	漆町７～８群期	
五分一（越中）	43	－	－	漆町８群期？	
王塚古墳（越中）	62	－	－	漆町８～９群期	
保内三王山４号（越後）	16	－	－	漆町６～７群期？	
八幡山SX03S14（越後）	13	－	－	漆町７群期	
山谷（越後）	37	割竹形木棺	鑿1・管玉7・ガラス小玉29	漆町８群期	

※主に前田1997・高橋2006を参照して筆者の見解をまじえて作成し、時期の推定根拠が乏しい事例は省いた。

表4　北陸における古墳時代前期前半の前方後円墳

遺跡名（旧国名）	全長(m)	主体部	副　葬　品	時　期	備　考
分校カン山1号（加賀）	36.7	割竹形木棺	鏡1・槍1・鉄斧1・管玉7	漆町7群期	いわゆる纒向型
宿東山1号（能登）	21.4	箱形木棺	鏡1	漆町8群期	いわゆる纒向型
百塚住吉SZ01（越中）	約24	－	－	漆町7群期	
百塚住吉SZ04（越中）	22以上	－	－	漆町7群期	百塚住吉SZ01より わずかに大形と推定
谷内16号（越中）	47.6	割竹形木棺	剣1・ヤリガンナ1・方形板鍬先1	漆町8群期頃？	
観音平4号（越後）	33.6	－	－	漆町7～8群期？	いわゆる纒向型
稲場塚（越後）	26.3	－	－	漆町8群期前後？	

※花野谷1号墳（越前）・神谷内12号墳（加賀）・観音平1号墳（越後）については造出付円墳と捉え、本表からは省いた。

橋本博文氏（橋本1996a）によれば、いわゆる纒向型前方後円墳は千葉県市原市神門5号墳（庄内式古段階期）を最古例として、多くは庄内式新段階期に位置づけられ、布留式古段階期に下るものもあり、定式化前方後円墳（奈良県桜井市箸墓古墳）出現後の例は従属的な階層構造のなかで理解できるという。方格規矩四神鏡を副葬する分校カン山1号墳・宿東山1号墳は最終段階のものとなり、時期の推定が困難な観音平4号墳も当該期に属す可能性が高い。北陸における初期前方後円墳はいわゆる纒向型が多い。

実態は単純化できないが、大局的な型式学的見地に立てば、いわゆる纒向型は定型的とされる前方後円墳より先行すると捉えられるので、前方部が発達した百塚住吉SZ01・04は平面形態に限ってみればいわゆる纒向型よりも「定型」に近づいている。百塚住吉SZ04出土土器が分校カン山1号墳出土土器と同時期に位置づけられ、百塚SZ01が百塚住吉SZ04に先行することから、北陸には漆町7群期にいわゆる纒向型と「定型」に近づいた長さの前方部をもつ前方後円墳に関する情報がもたらされたことがわかる。

宿東山1号墳（石川県立埋蔵文化財センター1987）の周溝は百塚住吉SZ01に類似するものの、後円部後端に陸橋をもつ点は異なる。分校カン山1号墳（加賀市教育委員会1979）は後円部が大規模に破壊されているものの、周溝は後円部から前方部に向かって緩やかに浅くなり、前方部前端には周溝が存在しないので、宿東山1号墳の周溝形態が分校カン山1号墳からの影響によるものとは考えにくい。いわゆる纒向型前方後円墳のなかで、強いて類例を求めるとするなら、福岡県小郡市津古生掛古墳（全長30m，庄内式新段階）を挙げられるが、くびれ部での段差が宿東山1号墳ほど明瞭ではない。以上から、宿東山1号墳の周溝は百塚住吉SZ01にヒントを得て成立したと推定できるのではなかろうか。また、谷内16号墳は狭長な前方部をもち、その度合いは百塚住吉SZ01より大きい。この点では、百塚住吉SZ01からヒントを得たとも考えられる。呉羽山丘陵北部にもたらされた前方後円墳の情報は、石動丘陵東麓や石動・宝達山地といった西方にも二次的に発信された可能性が高い。

表4を作成して気づくことは、北陸の前期前半の前方後円墳のなかで谷内16号墳が突出して大きいことである。また、谷内16号墳からは主体部を被覆する盛土から土師器細片47点が出土し、埋葬後に墳丘を完成させる過程で祭祀に用い、破砕して埋めたと考えられ、「思いきって復原」（報告書29頁）された二重口縁壺を根拠として漆町8群期に比定された（小矢部市教育委員会・小矢部市古墳発掘調査団1988）。突出した規模をもつことに加え、土器の遺存状態を考慮する限り、漆町8群期に限定して良いかという疑問も残る。16号墳より高位に位置し、先行すると目されている谷内17号墳は測量調査の結果、全長約36mに復原された（小矢部市教育委員会・小矢部市古墳発掘調査団1988）が、筆者は20m前後とみる。私見が的を射たものであれば、17号墳と16号墳との間で規模の格差が大きくなり、16号墳により後出的要素を認めることも可能になる。

以上から、谷内16号墳は漆町8～9群期の時期幅で捉えるべきと判断する。この場合、後続する関

野１号墳の時期比定との整合性が問題になるが、漆町９群期とされる（小矢部市教育委員会・小矢部市古墳発掘調査団1987）くびれ部出土土器群を漆町９～10群期の時期幅で捉える、つまり谷内16号墳・関野１号墳を共に下降させることで解消されるだろう。関野１号墳の後円部に鎮座する関野神社社殿建築時に出土したとされる柳葉形銅鏃（早川コレクション：富山県埋蔵文化財センター保管）は、その形態的特徴から前期後半の時期幅で捉えられるが、細身であることを重視するなら中葉近くよりはむしろ末葉近くに位置づけられるものであり、関野１号墳の時期を下らせることと大きな齟齬はきたさない。

以上の検討を通して、百塚住吉SZ01・04は富山県域における最古の前方後円墳、北陸でも分校カン山１号墳と並んで最古段階の前方後円墳と判明した。百塚住吉SZ01・04のくびれ部幅はいずれも約4.5mしかなく、当該部における盛土厚を多くは期待できない。それは、前方部全体の盛土厚にもつながり、後円部の盛土厚も主に周溝の掘削土を盛り上げた程度と考えられる。両墳は主体部を収めるに足る最低限の盛土を後円部に施し、それにあわせて前方部の盛土を調整した低墳丘の古墳と推定される。これは、前方後方墳も同じである。

北條芳隆氏は、箸墓古墳の築造を基点とした巨大前方後円墳、およびその直接的な影響下に成立した資料群（第２群前方後円（方）墳）と、弥生墳丘墓を基点として連続的な変化を示し、地域ごとの伝統を保持しつつ推移する資料群（第１群前方後円（方）墳）に区分すべきことを説いた（北條2000）。筆者は、北條氏の提言に賛同する立場にあるので、百塚住吉SZ01・04は共に第１群前方後円墳、百塚住吉SZ03および百塚住吉・百塚SZ02を第１群前方後方墳と評価する。百塚SZ04以後、継続的に墓域が形成されるなかで採用された前方後方形・前方後円形の墓であり、今回得られた考古学的所見のみから、これらの古墳にヤマト王権中枢との直接的関係性を認めることは難しい。谷内16号墳は、京都府山城町椿井大塚山古墳の四分の一規模相似墳とされた（小矢部市教育委員会・小矢部市古墳発掘調査団1988）が、相似墳かどうかを検討するには情報量が少ない。総体として、第１群前方後円墳と判断すべきものである。

北條氏の問題提起以後、その方向性の下で前方後方墳に的を絞った検討が加えられた（中井2004・藤沢2004）。藤沢　敦氏の言を借りると、前方後方墳は単純化すると「階層的位置を占める前方後方墳」と「習俗としての前方後方墳」があり、今次発掘調査で検出した前方後方形墳丘墓・前方後方墳・前方後円墳はいずれも埋葬習俗として採用された形が反映されたものと考えられる。集団内における階層的位置の反映であることは確かだが、前方後方形・前方後円形を採るから他集団に比べて絶対的権力をもつと解釈するのは早計である。なぜなら、埋葬の場である後方部・後円部は、在地の伝統的な方形墓と比較して小形であり、また墳丘全体の盛土量も少ないと推定されるからである。百塚SZ05の後方部（約８m四方と推定）はほぼ同時期に存在した百塚SZ06（方形周溝墓：約10m×約９m）の約７割、百塚住吉・百塚SZ02の後方部はほぼ同時期に存在した百塚SZ01・03（方墳）の半分ほどの面積しかないのである。前方後円墳もほぼ同様である。百塚SZ03は周溝内に従属的な主体部を有し、上位階層の墓だったことがわかる。各時期における本集団の最上位の人物は、伝統的な方形墓を自らの墓として採用したと考えられる。その下位に位置する人物は新たに入手した情報に基づいて、前方後方形・前方後円形の墓を採用したのではなかろうか。逆説的にみれば、墓制に関して本集団内で厳格に規制されることはなかった、つまり墓制に反映される集団の階層構造が呉羽山丘陵南部・羽根丘陵に比べて成熟途上であったことを示している。

古墳出現期の婦負地域における呉羽山丘陵北部の地域的特質　呉羽山丘陵北部で前方後方墳や前方後円墳が造営された頃、羽根丘陵では大型前方後方墳（勅使塚古墳）が造営された。全長66mとされる（㈶富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2003）が、筆者は64.5m程度と推定している（小黒2007）。呉羽山丘陵北部の前方後方墳との格差は絶対的に大きい。婦負地域における古墳出現期社会の研究は、最近のものに限っても多く行われ（大野2007，小黒2007a・b，2008，高橋2007a・b，藤田

2002など)、多様な解釈が加えられている。諸説の当否は読者に委ねるが、呉羽山丘陵北部の諸勢力と比べて、呉羽山丘陵南部および羽根丘陵に墓域を形成した諸勢力の優位性は明らかである。呉羽山丘陵南部の出現期古墳の様相がやや不明瞭だが、古墳時代前期前半の婦負地域においては羽根丘陵の勢力が盟主的存在であった。

3地域での出現期古墳の出現や新たな墓制の採用時期はほぼ同時期と捉えられるが、より細かく先後関係を追究すると、呉羽山丘陵北部は総じて他に先んじて新来の墓制を採用している。方形周溝墓は呉羽山丘陵南部とほぼ同時期か、わずかに後出する。呉羽山丘陵北部において、百塚SZ04から百塚SZ05へと続く型式組列を想定することは、今回得られた資料からは難しい。それは、両者をつなぐ資料が検出されていないからである。現状では、百塚SZ05を呉羽山丘陵北部の墓制の展開のなかに位置づけることはできない。八ヶ山遺跡内古墳の評価は保留するとしても、前方後方形・前方後円形の採用は、呉羽山丘陵北部の集団が他の集団より確実に早い。呉羽山丘陵南部・羽根丘陵と比べて、呉羽山丘陵北部の前方後方形墳丘墓・前方後方墳は小形だが、それは集団の成熟度や階層分化の度合いに起因した差であろう。

呉羽山丘陵南部では多くの弥生時代鉄器が出土しているが、百塚SZ05例の存在から呉羽山丘陵北部にもほぼ同時期にもたらされていたことが判明した。鉄器製作は神通川河口付近の打出遺跡で確認されているが、打出遺跡から旧神通川を約4.5km遡上すると百塚の地に辿り着く。打出遺跡出土鏨(第51図469：弥生時代後期後半～終末期）の類例は、北陸では石川県加賀市猫橋遺跡1号溝例（石川県立埋蔵文化財センター1997：弥生時代中期末～後期後半)、山陰では鳥取市（旧青谷町）青谷上寺地遺跡SD11例（(財)鳥取県教育文化財団2002：弥生時代後期）を挙げることができ、婦負地域への鉄器流通に際して打出遺跡が拠点的機能を果たした可能性を想定できる。遠隔地間の物流・情報伝達の大動脈となる日本海やそこに連なる神通川に最も近いことで、呉羽山丘陵北部に遠隔地からの鉄器や新来の墓制がいち早くもたらされたと考えられる。野島　永氏は山陰～北陸の弥生時代鉄器の流通構造を拠点的交易型と評価した（野島2000)。婦負地域はその東端に位置する。打出遺跡や呉羽山丘陵の鉄器のあり方は、野島氏の評価を裏付けている。

以上の地理的要因に、墓制に反映される集団の階層構造が呉羽山丘陵南部・羽根丘陵に比べて成熟途上という社会的要因が重なって、呉羽山丘陵北部の集団は北陸でも最初期に前方後方形や前方後円形の墓を採用したと考えられる。ただし、集団墓の一つとして存在することは、弥生時代からの伝統に基づくなかでの変化だったことを示している。

第4項　百塚住吉遺跡・百塚遺跡の出現期古墳の歴史的意義

百塚住吉遺跡・百塚遺跡の出現期古墳で重要なのは、①小型前方後円墳・小型前方後方墳が前方部を直交させるかのように、または直列して、重複することなく計画的に配置されたこと、②百塚住吉SZ01と百塚住吉・百塚SZ02にみられるように、後円部・後方部の周溝が深く、くびれ部で深さを急激に減じ、幅も狭くなることである。

①で示した特徴的な配置は、北陸では現在までのところ確認されていない。北陸最古段階の前方後円墳であることもあわせ、呉羽山丘陵北部で成立したものではなく、北陸以外の地からもたらされた情報や思想に基づく結果である可能性が高い。その故地の検討は将来の資料の増加を持つこととして、ここでは北陸以東へ影響を及ぼした可能性のある要素について検討する。

古墳の配置　東日本の前期古墳を概観すると、①のような特徴的な配置を採る例は東北南部（会津盆地北西部）の男壇遺跡・宮東遺跡（会津坂下町教育委員会1990)、稲荷塚遺跡（会津坂下町教育委員会1995）で認められる。男壇遺跡では小型前方後方墳が前方部を直交させるように造営され、宮東遺跡では全長31.1mの前方後円墳（SZ01）に平行して全長15.2mの前方後方墳（SZ02）が存在する。また、稲荷塚遺跡では前方後方墳同士が直交するように配置され、くびれ部で急激に浅くなる周溝形

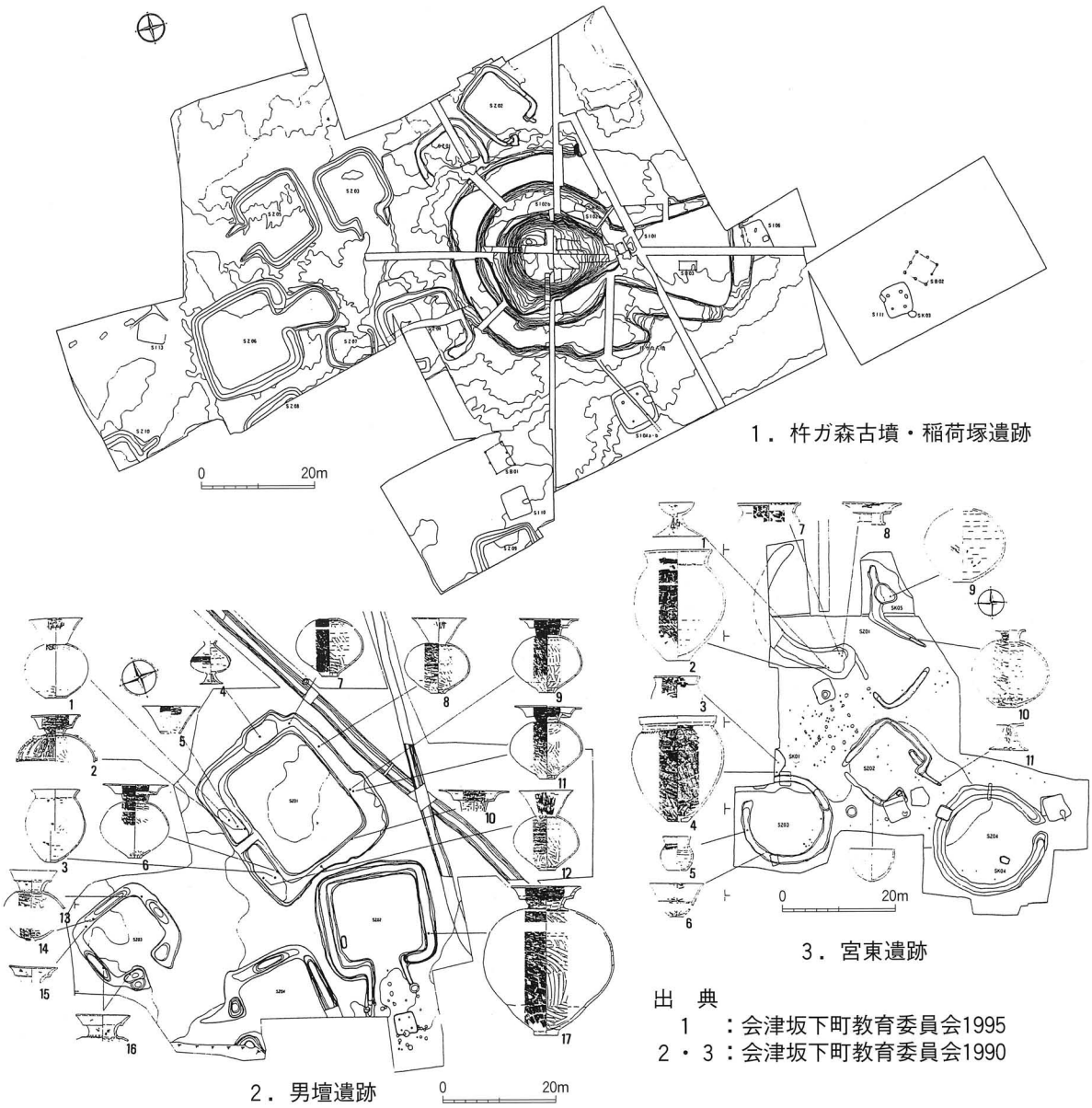


図８　会津盆地北西部の出現期古墳（１：1,200）

態をもつものもある。同遺跡内には前方後円墳（杵ガ森古墳：全長45.6m）があり、多様な墳形が混在する点では男壇遺跡・宮東遺跡と共に百塚住吉遺跡・百塚遺跡と共通する（図８）。

これらは漆町７～８群期に比定されており、百塚住吉・百塚遺跡の前方後円墳・前方後方墳とほぼ同時期か、わずかに後出する。

北陸北東部系土器　古墳出現期における東北南部や関東への北陸北東部系土器の波及については、数多くの研究が蓄積されている。古墳の配置という点で百塚住吉遺跡・百塚遺跡との類似性が認められた会津盆地でも、北陸系土器は確認されている。会津盆地の北陸系土器が注目されていくなかで、辻　秀人氏は土器だけでなく、住居構造の類似性にも注目した（辻1993・2003・2006）。さらに、会津若松市堂ヶ作山古墳出土鶏形土製品も北陸との関連性が指摘された（橋本1996b）。東北南部や関東で出土する北陸北東部系土器については、能登からの影響と評価されてきた（坂井・川村1993，川村1994・1996など）。その後、北陸北東部における地域性の把握が課題となるなかで、資料の蓄積や研究の深化（滝沢2005）をふまえ、近年は能登と限定できる状況になく、越後が主体的役割を果たした可能性も指摘されている（春日2005）。越中の土器も大局的にみれば、能登や越後と同様に北陸北東

部の土器としてまとめることが可能であり、甕や器台等、土器を単体で見た場合には会津盆地で認められる北陸北東部系土器のなかにも、越中出土例と似た例と捉えられるものもある。問題は土器群としての類似性を認め得るかどうかであり、越中の古墳出現期土器の研究も、今後は能登だけでなく越後や会津との比較を視野に入れて行う必要がある。

会津盆地とのつながり　今次発掘調査で検出した小型前方後方墳・小型前方後円墳は、先に示した会津盆地北西部の小型前方後方墳・小型前方後円墳の祖形と評価できる。北陸北東部系土器をはじめとする北陸系要素を多数確認できることに加え、墓制は容易に変わらない（佐原1979・都出1995）ことを鑑みるとき、上述した古墳の配置や周溝形態の類似性は大きな根拠となる。

会津盆地北西部には、先の事例に先行する出現期古墳が確認されている。塩川町舘ノ内遺跡（塩川町教育委員会1998）では四隅に陸橋をもつ方形周溝墓（SZ01・02）が検出された。中村五郎氏は、周溝内縁・外縁とも外湾する特徴や出土土器の特徴を重視して、北陸を経由して山陰から及んだ四隅突出型墳丘墓を弥生時代終末頃に会津盆地の人が造営したと解釈した（中村1998）。両墓を四隅突出型墳丘墓と捉える場合、出土土器の系統や四隅突出型墳丘墓の集中分布、会津盆地との距離を考えるなら、婦負地域の四隅突出型墳丘墓がその故地を検討する際の第一候補となる。しかし、婦負地域の四隅突出型墳丘墓は突出部先端にも周溝を巡らせるものが多い。資料が増加した婦負地域と対比する限り、外湾の度合が弱いこともあわせ、舘ノ内SZ01・02を四隅突出型墳丘墓とすることは難しい。

塩川町荒屋敷遺跡・湯川村桜町遺跡（福島県教育委員会ほか2005）の方形周溝墓（計８基）は、舘ノ内SZ01・02を評価する際に示唆的な資料である。荒屋敷SX04は四隅に陸橋をもつ方形周溝墓と推定される。舘ノ内SZ01よりも外湾する周溝をもつが、舘ノ内SZ01と同様に直線的なものもあり、弥生時代終末～古墳時代初頭の四隅突出形の方形周溝墓とされた。桜町遺跡の方形周溝墓はいずれも四隅に陸橋をもち、弥生時代後期後半頃のものとされた。四隅に陸橋をもつ方形周溝墓としては通有のものばかりである。この点が重要である。筆者は舘ノ内SZ02も通有の方形周溝墓と評価するが、弥生時代後期後半頃に通有の方形周溝墓が新たな墓制として受容され、弥生時代終末頃に舘ノ内SZ02→舘ノ内SZ01→荒屋敷SX04というように、陸橋の発達に伴って外湾度合が大きくなる方向で型式変化したと考えるのが妥当であろう。これらが直線的な周溝ももつのは、在地の方形周溝墓が展開するなかでの変化であることを如実に示している。呉羽山丘陵北部と会津盆地北西部の小型前方後方墳・小型前方後円墳の類似性を念頭に置くと、外湾する周溝に関する情報は、北陸からもたらされた文物や情報の一つとして、婦負地域にある四隅突出型墳丘墓の情報が大まかに及んだものと評価できるのではないだろうか。それは、舘ノ内SZ01・荒屋敷SX04のような方形周溝墓は会津盆地以外では確認されていないからである。保守性の強い墓制が波及したのではなく、人の移動によってもたらされた情報が在地の墓制に取り入れられたと考えられる。

新津丘陵とのつながり　会津盆地から阿賀川・阿賀野川を下ると、日本海に出る約20km手前で新津丘陵北端に着く。当該地には、新潟平野の代表的な高地性環濠集落の一つである新潟市（旧新津市）八幡山遺跡（新津市教育委員会2001・2004）がある。外環濠の外側には弥生時代後期の方形周溝墓があり、内環濠の内側では前方後方形周溝墓（SX03S14）が遺跡の最高所に造営された。北東約80m地点には古墳時代前期のものと目される大型の造出付円墳、古津八幡山古墳（新津市教育委員会1992）がある。八幡山遺跡の前方後方形周溝墓は早くから会津盆地との関係で注目されてきた（広井1992・1995）。報告書では、SX03S14の時期の推定が避けられた。それは、周溝出土土器が小片で、遺構に伴う資料とは判断できないと解釈されたためであろう。筆者も、土器からは遺構の年代を推定できないと考える。

八幡山SX03S14の前方部周溝は、調査時点では片側のみ検出された。前端の周溝は検出されていないが、重複（先行）する遺構の覆土上で検出されていない以上、本来的に存在しない可能性が高い。後方部・前方部とも約半分が20～30cm程度削平されており、前方部周溝が両側とも存在した可能性

は十分ある。本例は、赤塚分類のB２型、高橋分類では２類に相当し、越後では唯一の確認例である。高橋分類２類は漆町５～７群期の年代が与えられている。百塚SZ05および百塚住吉SZ03は、北陸では八幡山SX03S14に最も位置が近く、後出する百塚住吉SZ03は漆町７群期に位置づけられる。くびれ部から前方部周溝が緩やかに浅くなることをはじめ、周溝形態は百塚住吉SZ03と類似しており、呉羽山丘陵北部から新津丘陵に前方後方墳が伝えられた可能性を想定できるのではなかろうか。

古津八幡山古墳の時期は確定していないが、筆者は北陸の前期古墳の展開から古墳時代前期中葉頃と推定している。古津八幡山古墳の山側（八幡山SX03S14方向）には、川村浩司氏が作業仮説として提示した、墳丘完成後に「祭祀」の場として機能した「山頂側墳丘外広域平坦面」（川村1992）があり、広井　造氏は八幡山遺跡の前方後方形周溝墓の前方部の延長方向に古津八幡山古墳の「山頂側墳丘外広域平坦面」が位置することを重視している（広井1992）。筆者は八幡山SX03S14が漆町７群期に下ると推定するが、それは古津八幡山古墳の時期とも近づくことになり、広井氏が重視する古津八幡山古墳との位置関係とも整合的な解釈となる。

八幡山遺跡では、北陸系土器・東北南部系土器・折衷在地系土器が共存しており、北陸系土器・東北南部系土器がほぼ同じ比率で多量に出土した。竪穴建物は山側にのみ排水用の周溝が巡り、北陸でも検出例の多い住居構造と評価されている。会津若松市屋敷遺跡で「周溝墓」とされた溝を竪穴住居の周溝と理解することで、会津盆地の北陸北東部系土器の存在とあわせ、八幡山遺跡を介して北陸系の住居構造が伝わったと考えられている（新津市教育委員会2001）ことは、土器の様相とあわせ、八幡山遺跡の歴史的位置を端的に示している。

まとめ　以上の、北陸から会津への大きな動きのなかの一つとして、呉羽山丘陵北部の集団から、新津丘陵および会津盆地北西部の集団に墓制（前方後方墳・前方後円墳）が伝えられた。先に引用した墓制の保守性という観点に立つと、「移住」と断言するに足る考古学的資料は十分蓄積されてはいないが、呉羽山丘陵北部の集団から彼地まで人が移動したことは確かであろう。現時点では、墓造りの工人が指導のために移動した可能性までは想定して良いと考える。高橋浩二氏は、北陸（若狭・越前・加賀・能登・越中）の弥生時代後期～古墳時代前期の建物の分析から、北陸全体では漆町４群期までは建物数が増加するものの、漆町５群期に急激に減少することを確認し、その背後に人の移住・移動があると推定した（高橋1995）。北陸で建物数が減少する時期から、会津盆地で北陸系要素が認められることは重視すべきである。越中でも当該期に建物数は激減しており、移動・移住による結果の可能性も十分想定できる。

呉羽山丘陵北部の集団からの墓造りに関する情報は東方だけでなく、西方にも及んだ。これらが可能であったのは、呉羽山丘陵北部が神通川水系で日本海とつながっているからであり、同じく阿賀野川水系でつながる新津丘陵や会津盆地へと、河川・海上交通によって人々が遠距離移動することができたのである。日本海ルートで古墳文化が東北南部へ及んだことは早くから指摘されてきた（甘粕1993a・b，1994）。ここでは、政治史的解釈については言及しないが、百塚住吉遺跡・百塚遺跡で検出した出現期古墳は甘粕説を追認する資料の一つとなり得るものである。　（小黒智久）

引用・参考文献

会津坂下町教育委員会　1990　『福島県営会津南部ほ場整備事業　阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第16集

会津坂下町教育委員会　1995　『杵ガ森古墳　杵ガ森古墳・稲荷塚遺跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第33集

赤塚次郎　1992　「東海系のトレース－３・４世紀の伊勢湾沿岸地域－」『古代文化』第44巻第６号　㈶古代学協会

甘粕　健　1993a　「古墳文化形成過程の新潟平野と会津盆地」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』平成２年度文部科学省科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書　研究課題番号02301056　「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ（研究代表者　甘粕　健）

甘粕　健　1993b　「みちのくを目指して　日本海ルートにおける東日本の古墳出現期にいたる政治過程の予察」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会シンポジウム２　日本考古学協会新潟大会実行委員会

甘粕　健　1994　「東日本における古墳の出現－みちのくをめざして－」『東日本の古墳の出現』　山川出版社

石川県立埋蔵文化財センター　1987　『宿東山遺跡－一般国道159号押水バイパス改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』
石川県立埋蔵文化財センター　1997　『猫橋遺跡』水田営農活性化排水対策特別事業（片山津本町地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
石川県小松市教育委員会　1996　「千木野A遺跡」『千木野遺跡』
石川県野々市町教育委員会・野々市町御経塚第二土地区画整理組合　2001　『御経塚シンデン遺跡・御経塚シンデン古墳群－野々市町御経塚第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』
伊藤雅文　2008　『古墳時代の王権と地域社会』　学生社
大野英子　2007　『王塚・千坊山遺跡群－富山平野の弥生墳丘墓と古墳群－』日本の遺跡18　同成社
大村正之　1926　「桜谷古墳群」『富山県史跡名勝天然記念物調査会報告』第７号　富山県内務部
小黒智久　2004　「富山市呉羽三ッ塚古墳試掘確認調査速報」『富山市考古資料館報』No.41　富山市考古資料館
小黒智久　2005　「古墳時代後期の越中における地域勢力の動向」『大境』第25号　湊　晨先生追悼号　富山考古学会
小黒智久　2006　「打出遺跡の弥生～古墳時代鉄器」『富山市打出遺跡発掘調査報告書－一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告－』　富山市教育委員会
小黒智久　2007a　「越中の様相－四隅突出型墳丘墓から前方後方墳へ－」『「婦負のクニ」成立のころ－四隅突出型墳丘墓から前方後方墳へ－』王塚・千坊山遺跡群国指定記念「婦負の国　弥生フォーラム」資料　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
小黒智久　2007b　「勅使塚古墳と王塚古墳」『大境－富山考古学会機関誌－』第27号　富山考古学会
小黒智久　2008　「越中の様相－四隅突出型墳丘墓から前方後方墳へ－」『「婦負のクニ」成立のころ－四隅突出型墳丘墓から前方後方墳へ－』王塚・千坊山遺跡群国指定記念「婦負の国　弥生フォーラム」記録集　富山市教育委員会
小矢部市教育委員会・小矢部市古墳発掘調査団　1987　『関野古墳群』小矢部市埋蔵文化財調査報告書第19冊
小矢部市教育委員会・小矢部市古墳発掘調査団　1988　『谷内16号古墳』小矢部市埋蔵文化財調査報告書第23冊
加賀市教育委員会　1979　『分校古墳発掘調査報告』
鹿島昌也　1997　「富山市の遺跡９　百塚住吉D遺跡」『富山市考古資料館報』No.31　富山市考古資料館
春日真実　2005　「定型化した古墳出現（７期）以降」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第１分冊　新潟県考古学会
川村浩司　1992　「山頂側に存在する墳丘外広域平坦面」『古津八幡山古墳Ⅰ　1991年測量調査報告』　新津市教育委員会
川村浩司　1994　「関東南部における北陸系土器の様相について」『庄内式土器研究Ⅵ』　庄内式土器研究会
川村浩司　1996　「越の土器と古墳の展開」『越と古代の北陸』　名著出版
川村浩司　2003　『古墳出現期土器の研究』　高志書院
小林高範　1995　「富山市の遺跡６　呉羽モグラ池遺跡」『富山市考古資料館報』No.28　富山市考古資料館
小林高範　1997　「呉羽モグラ池遺跡」『発掘された北陸の古墳報告会資料集（発表要旨）シンポジウム「５世紀の越の国－大型古墳の動向と地方豪族－」』　まつおか古代フェスティバル実行委員会
駒見佳容子　1990　「呉羽山丘陵杉坂墳墓群をめぐって－埋葬遺跡にみる権力構造－」『富山市日本海文化研究所報』第４号　富山市日本海文化研究所
㈶石川県埋蔵文化財センター　2000　『金沢市戸水C遺跡・戸水C古墳群（第９・10次）』
㈶鳥取県教育文化財団　2002　『鳥取県気高郡青谷町　青谷上寺地遺跡４』一般県道青谷停車場井出線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　鳥取県教育文化財団調査報告書74
㈶富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2003　『富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座　勅使塚古墳・永代遺跡・安居窯跡群・中山中遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第21集
坂井秀弥・川村浩司　1993　「古墳出現前後における越後の土器様相－越後・会津・能登－」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』平成２年度文部科学省科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書　研究課題番号02301056　「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ（研究代表者　甘粕　健）
佐原　真　1979　「弥生時代論」『日本考古学を学ぶ(3)原始・古代の社会』有斐閣選書　有斐閣
塩川町教育委員会　1998　『県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業　塩川西部地区遺跡発掘調査報告書３　舘ノ内遺跡』塩川町文化財調査報告第４集
清水康二　1994　「倣製内行花文鏡類の編年－倣製鏡の基礎研究Ⅰ－」『橿原考古学研究所論集』第十一　吉川弘文館
高岡市教育委員会　1992　『市内遺跡調査概報Ⅰ－平成３年度，石塚遺跡，下佐野遺跡の調査－』高岡市埋蔵文化財調査概報第18冊
高橋浩二　2005　「弥生後期における住居跡数の変化と人口の動態」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』　大阪大学考古学研究室
高橋浩二　2006　「北陸の前方後方墳－柳田布尾山古墳の時期的評価をめぐって－」『石川考古学研究会々誌』第49号　石川考古学研究会
高橋浩二　2007a　『富山の古墳－氷見・雨晴の首長と日本海－』日本海学研究叢書　富山県・日本海学推進機構
高橋浩二　2007b　「阿尾島田A１号墳と富山・能登の前期古墳」『阿尾島田古墳群の研究－日本海中部沿岸域における古墳出現過程の新研究－』平成16～18年度科学研究費補助金（基礎研究（B）(2)）研究成果報告書（課題番号：16320107）　富山大学人文学部考古学研究室
滝沢規朗　2005　「新潟県における古墳出現前後に盛行する装飾器台・結合器台について」『新潟考古』第15号　新潟県考古学会
辻　秀人　1993　「東北南部の古墳出現期の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会シンポジウム２　日本考古学協会新潟大会実行委員会
辻　秀人　2003　『ふくしまの古墳時代』歴春ふくしま文庫㊿　歴史春秋社
辻　秀人　2006　『東北古墳研究の原点　会津大塚山古墳』シリーズ「遺跡を学ぶ」029　新泉社

辻　秀人・菊池芳朗　1993　「会津盆地の前期古墳」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』平成２年度文部科学省科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書　研究課題番号02301056　「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ（研究代表者　甘粕　健）
都出比呂志　1995　「祖霊祭式の政治性－前方後円墳分布圏の解釈」『日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究』平成６年度科学研究費補助金（一般A）研究成果報告書（研究代表者　小松和彦）　大阪大学文学部
寺沢　薫　1988　「纒向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ　同志社大学考古学シリーズ刊行会
寺村光晴　1981　「玉」『三世紀の考古学　中巻　三世紀の遺跡と遺物』　学生社
富山市教育委員会　1974　『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』
富山市教育委員会　1984　『富山市呉羽山丘陵古墳分布調査報告書』
富山市教育委員会　2004　『富山市打出遺跡発掘調査報告書－富山市打出土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告－』富山市埋蔵文化財調査報告138
富山市教育委員会　2006　『富山市打出遺跡発掘調査報告書－一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告－』富山市埋蔵文化財調査報告7
富山文化研究会　1975　『富山市杉谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告書』
中井正幸　2004　「二つの前方後方墳－群構成からみた東海の前方後方墳－」『古墳時代の政治構造　前方後円墳からのアプローチ』　青木書店
長岡市教育委員会　1999　『藤ヶ森遺跡－県営ほ場整備事業に伴う発掘調査－』
中村五郎　1998　「１・２号周溝墓について」『県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業　塩川西部地区遺跡発掘調査報告書３　舘ノ内遺跡』　塩川町教育委員会
新潟県教育委員会　1984　「下新町遺跡の調査」『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ　今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集
新潟県教育委員会・㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団　2002　『二級河川郷本川広域基幹河川改修工事・一般国道116号線和島バイパス関係報告書　奈良崎遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集
新潟大学人文学部考古学研究室　2000　『古墳時代における首長層の居館と奥津城の関連性に関する研究』平成９年度～平成11年度科学研究費補助金（基盤研究（C）(2)）研究成果報告書（課題番号：09610403号　研究代表者　橋本博文（新潟大学人文学部教授））
新津市教育委員会　1992　『古津八幡山古墳Ⅰ　1991年測量調査報告』
新津市教育委員会　2001　『八幡山遺跡発掘調査報告書』
新津市教育委員会　2004　『八幡山遺跡発掘調査報告書－第11・12・13・14次調査－』
野島　永　2000　「弥生時代の鉄流通試論」『製鉄史論文集』　たたら研究会
橋本博文　1996a　「いわゆる纒向型前方後円墳の再検討」『考古学と遺跡の保護』甘粕　健先生退官記念論集　甘粕　健先生退官記念論集刊行会
橋本博文　1996b　「鶏形埴輪の起源－鶏形土製品をめぐって－」『堂ヶ作山古墳Ⅲ　1990・1991・1994年度発掘調査の記録』　堂ヶ作山古墳調査団・会津若松市教育委員会
林　大智・佐々木勝　2001　「北陸南西部地域における弥生時代の鉄製品」『石川県考古資料調査・集成事業報告書』補遺編　石川考古学研究会
広井　造　1992　「古津八幡山古墳と八幡山遺跡前方後方形周溝墓について」『古津八幡山古墳Ⅰ　1991年測量調査報告』　新津市教育委員会
広井　造　1995　「越後における前方後方形墳墓の出現」『新潟考古』第６号　新潟考古学会
福島県教育委員会・㈶福島県文化振興事業団・国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所　2005　『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告５　荒屋敷遺跡（４次）・桜町遺跡（１次）』福島県文化財調査報告書第430集
藤沢　敦　2004　「前方後方墳の変質」『古墳時代の政治構造　前方後円墳からのアプローチ』　青木書店
藤田富士夫　1977　「農耕の開始と弥生文化」『富山県の歴史と風土』　創土社
藤田富士夫　1999　「富山県における四隅突出墳出現の系譜について」『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立50周年記念シンポジウム発表要旨・資料集　富山考古学会
藤田富士夫　2002　「魏志倭人伝の「奴国」と婦負王国」『地域考古学の展開－村田文夫先生還暦記念論文集－』　村田文夫先生還暦記念論文集刊行会
婦中町教育委員会　2002　『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書』
婦中町教育委員会　2003　『富山県婦中町鍛冶町遺跡発掘調査報告』一般国道359号道路改良工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告
北條芳隆　2000　「前方後円墳と倭王権」『古墳時代像を見なおす』　青木書店
古川知明　1999　「杉坂古墳群」『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立50周年記念シンポジウム発表要旨・資料集　富山考古学会
古川知明　2006　「甘粕健新潟大学名誉教授の古墳見学に随行して」『連絡紙185』　富山考古学会
前田清彦　1997　「前方後方墳造営の背景」『加賀　能美古墳群』　石川県寺井町・寺井町教育委員会
松井和幸　1999　「竪穴住居跡出土鉄器について」『和田原D地点遺跡発掘調査報告書』　㈶広島県埋蔵文化財調査センター
松井和幸　2001　『日本古代の鉄文化』　雄山閣
村上恭通　1998　『倭人と鉄の考古学』日本史のなかの考古学　青木書店
村上恭通　2000　「鉄と社会変革をめぐる諸問題」『古墳時代像を見なおす　成立過程と社会変革』　青木書店

第6章　総括

ここでは、遺跡ごとではなく、おおむね時代ごとに調査成果をまとめ、総括とする。

第1節　縄文時代と地形形成過程

遺構は検出されなかったが、百塚住吉遺跡・百塚遺跡では出現期古墳の周溝覆土等や遺物包含層、撹乱に混入して縄文時代晩期後半の土器が出土した。また、百塚遺跡（A・B地区）でⅣ層下位に縄文時代晩期後半の遺物を若干包含するⅥ層（黒色土）と、その下位に基盤層のⅧ層（黄橙色土）が確認されたことは、地形や遺跡の形成過程を考えるうえで重要である。Ⅵ層（下半）出土遺物は少量だが、遺構覆土・撹乱出土遺物との顕著な時期差はない。これらの編年的位置は第5章第1節などに詳しい。遺構底面がⅣ層下半に及んだのは百塚遺跡（A・B地区）SD01のみであり、それは北（百塚遺跡→百塚住吉遺跡→百塚住吉B遺跡）に行くほどⅣ層上半の堆積が厚いことによる。

Ⅵ層土壌の放射性炭素年代測定の結果、Ⅵ層の形成開始年代は暦年で約7,000年前以前と推定された（第4章第5節）。Ⅵ層土壌の植物珪酸体分析の結果、クマザサ属を含むタケ亜科が生育していた可能性が指摘された。また、Ⅴ層出土炭化材同定の結果、本遺跡周辺に常緑広葉樹のアカガシ亜属が生育していたと考えられる（第4章第8節）。Ⅴ～Ⅷ層までの間に遺構が存在するかどうかを試掘確認調査（百塚遺跡A・B地区）で追究したが、遺構は検出されなかった。Ⅳ層下半およびⅥ層から遺物が少量出土したに過ぎないことを考慮すると、今次発掘調査区におけるⅤ～Ⅷ層形成期の人々の活動は顕著でなかったと考えられる。

Ⅳ・Ⅴ層の軟X線写真観察を含めた総合的な検討の結果、次のような堆積環境の変遷が復元された（第4章第8節）。遺跡が立地する段丘はAT降灰以前に離水したのち、植生に覆われることで土壌が発達し、上述の環境にあった。呉羽山断層による断層活動によってⅤ層が北に向かって下降する地形勾配が形成された後、何らかの理由（おそらく相対的な地盤の下降）によって水位が以前に比べて相対的に上昇し、標高の低い領域では泥質堆積物が累重した（Ⅳ層下半）。偽礫や炭化物片の存在から人の活動が示唆されているが、これは百塚遺跡A地区の当該層から縄文土器片が出土したこととも整合する。牛ヶ首神社参道沿いに敷設された下水管埋設工事の立会調査（平成20年度）でも、当該層から縄文土器片が少量出土しており、Ⅳ層の堆積過程の安定した時期には何らかの人の活動があったことがうかがえる。その後、氾濫堆積物（Ⅳ層上半）が遺跡周辺を覆い、それまでの植生は著しく擾乱された。Ⅳ層上半からの出土遺物はほとんどないが、それは上記の復元と合致する。Ⅳ層下半では縄文時代晩期後半の遺物が出土するので、Ⅳ層上半は最古段階の遺構が形成される弥生時代後期後半までの間に堆積したことになる。

ほぼすべての遺構は掘削底面がⅣ層に留まる。古墳の周溝のようにⅣ層深くまで掘削された遺構から出土した縄文土器は、Ⅳ層下半に存在したものが掘削時に掘り上げられ、墳丘盛土に転用されたなかに混入し、墳丘の崩落と共に周溝内に埋没したものが多いと考えられる。平成20年度に牛ヶ首神社南方の計画法線上で試掘確認調査を実施した際、当該部では表土直下でⅧ層が検出された。つまり、断層活動によって変化した地形は主に牛ヶ首神社北方であり、南方ではⅣ～Ⅶ層は堆積せず、現在までの間にⅧ層上面までが削平されたのである。百塚遺跡における地中レーダー探査（測線25）では、東と西に断層由来の落ち込み状の反射が確認されており（第4章第7節）、上記の復元と整合する。

Ⅳ層上半の氾濫堆積物の供給源は、最寄りの旧流路（神通川）に求められる。水量が安定した弥生時代後期後半以降、人々の活動が再開されたが、旧流路からの堆積が途絶えた後もしばらくは流路として機能していたと考えられる。つまり、神通川を呉羽山丘陵に向かって遡上してくると、眼前には墳丘の高まりが見える環境にあったのである。日本海から神通川を遡上してきて最初に到達する丘陵が当地であり、河川交通に適した位置にあったことが、3遺跡が形成される際に大きな役割を果たした。神通川を下った河口部の拠点的集落である打出遺跡（富山市教育委員会2004・2006）は、3遺跡

と同様に弥生時代後期後半～古墳時代前期前葉を集落形成のピークとする。遺跡脇の神通川の旧流路が古墳時代前期頃に河跡湖のような状態になり、流路の中心が他に移った（パリノ・サーヴェイ株式会社2004）ことにより、集落が途絶えた。3遺跡の古墳出現期の消長も、打出遺跡と同様に旧流路の状態に影響された可能性もある。

第2節　弥生時代

後期後半から、当地で人々の活動が本格化した。百塚住吉遺跡A地区の竪穴建物（SI01）・井戸（SE01）が該当する。百塚住吉遺跡C地区のSX01・SD01・SD16も当該期に遡る可能性がある。建物は内部に主柱がなく、小規模であることから、仮小屋などの性格を想定できる。百塚住吉遺跡C地区では、終末期前葉の竪穴建物（SI01）や方形周溝墓（SZ06）を検出した。SZ06は長軸7.0m、短軸5.2mの墳丘をもち、周溝は全周する。SI01はSZ06に隣接し、主柱や貼床がなく、赤色塗彩された土器が多数出土したことから、SZ06の埋葬に伴う殯屋的な建物と推定される。

時期幅をもたせざるを得ないが、百塚住吉SZ06に先行する可能性もある方形周溝墓として、百塚遺跡A地区のSZ04がある。辺長9.0mで、中央に幅4.3mの陸橋をもつ。北陸の類例との比較や3遺跡の形成時期との関係から、百塚SZ04は後期後半～終末期前半の時期幅で捉えられ、当地における墓域形成の端緒となった墓の一つと考えられる。

百塚遺跡B地区で検出したSZ06は四隅に陸橋をもつ方形周溝墓（長軸約10m・短軸約9m）で、呉羽山丘陵南部の杉谷A遺跡（富山文化研究会1975）との比較から、終末期の時期幅で捉えられる。百塚SZ06は杉谷A遺跡の大型方形周溝墓に相当する。杉谷A遺跡では、周溝が全周する方形周溝墓が四隅に陸橋をもつ方形周溝墓に先行することが判明しており、百塚住吉SZ06が百塚SZ06に先行する可能性もある。百塚SZ06の方が大形化しており、この点を後出的要素と捉えることもできる。

終末期には、前方後方形墳丘墓が出現する（百塚SZ05）。地中レーダー探査で短小の前方部の存在が推定された（第4章第7節）。鉄鏃の年代観と短小の前方部をもつことから、終末期中葉～後葉の時期幅で捉えられる。

第3節　古墳時代

古墳以外に、前期のものと確定した遺構はない。百塚住吉遺跡（A・B地区）SX01は、床面まで削平されて、壁溝のみ遺存した竪穴建物と考えられる。詳細な時期は特定できないものの、古墳出現期の土器が出土した。百塚遺跡A地区のSX01は、百塚住吉SX01と規模や形状、主軸方向が類似し、同様に壁溝のみ遺存した竪穴建物と考えられる。出土遺物からの時期比定は困難だが、上記した百塚住吉SX01との類似性から、両者はほぼ同時期と考えられる。百塚住吉遺跡B地区では、百塚住吉SX01の壁溝の一部（SD20）と畠跡（畝間の溝SD27）が重複し、畠跡の方が新しいことが判明している。従って、百塚住吉SX01出土土器は建物が機能していた時期を示唆するものである。3遺跡の形成時期幅を考慮して、2棟の竪穴建物は弥生時代後期後半～古墳時代前期前半のどこかの時点で機能していたと推定できる。竪穴建物も畠跡も遺物包含層／表土下で検出された。小溝群・包含層出土遺物の検討から、9世紀以降に畑地として利用されたと考えられる（第3章第3節）ので、耕地開発に伴って旧地形が平坦に整地される段階で、微高地に存在した竪穴建物は床面まで削平されたのである。これは、遺物包含層が比較的良好に遺存していた百塚住吉遺跡A地区で、SX01周辺から多くの遺物が出土したことと合致する。

弥生～古墳時代の土器はある程度出土したものの、生活痕跡（遺構）は少ない。これは、今次発掘調査区が神通川寄りに位置することによると考えられる。今次発掘調査区の北西にある百塚住吉遺跡の市道宮尾6号線調査区（富山市教育委員会2002）では古墳出現期の掘立柱建物や土坑が確認されており（第5・6図）、集落の居住域は西側に、墓域は東側の神通川寄りに存在したと推定できる。

百塚住吉遺跡・百塚遺跡における出現期古墳総括表

遺跡・遺構名	規　模	墓　制	時　期
百塚SZ04	辺長9.0m	方形周溝墓（陸橋１：陸橋幅4.3m）	弥生時代後期後半～終末期前半
百塚住吉SZ06	辺長7.0m	方形周溝墓	弥生時代終末期前葉
百塚SZ06	辺長約10m	方形周溝墓（陸橋４）	弥生時代終末期
百塚SZ05	後方部長約８m	前方後方墳（前方後方形墳丘墓）	弥生時代終末期中葉～後葉
百塚住吉SZ03	全長約14m	前方後円墳	古墳時代前期前葉
百塚住吉・百塚SZ02	全長17.3m	前方後方墳	古墳時代前期前葉
百塚住吉SZ01	全長約24m	前方後円墳	古墳時代前期前葉
百塚住吉SZ04	全長22m以上	前方後円墳	古墳時代前期前葉
百塚SZ01	辺長約16m	方墳	古墳時代前期前葉
百塚SZ03	辺長約15.5m	方墳	古墳時代前期前半
百塚住吉SZ05	直径12m	円墳	古墳時代前期前半

出現期古墳の時期認定根拠や相対的先後関係、歴史的意義については、第３章および第５章第４節で述べた。各古墳の規模や時期は表の通りである。百塚住吉遺跡・百塚遺跡では、弥生時代後期後半～終末期にかけて方形周溝墓が営まれた。現状では、杉谷A遺跡と異なり、方形周溝墓が群集する状況とは言えない。終末期のうちに、前方後方墳（前方後方形墳丘墓）が採用された（百塚SZ05）。この墓制に関する情報は、鉄鏃と共に北加賀の集団からもたらされた可能性がある（第５章第４節）。本例は、越中では最古例であり、北陸でも最古級のものである。

古墳時代前期前葉の前方後方墳・前方後円墳は、前方部を直交／斜交させるかのように、あるいは直列して、重複することなく２基一対として計画的に配置された。これらは同心円上に並ぶように企画されたうえで配置された可能性もあり（第５章第２節）、短期間に相次いで造営された。後円部・後方部の周溝が深く、くびれ部で急激に深さを減じ、幅も狭くなる古墳（百塚住吉SZ01，百塚住吉・百塚SZ02）があることも、特徴の一つである。このような配置や周溝形態をもつ類例は会津盆地北西部で認められる。古墳出現期には、会津盆地で北陸系要素が多数認められるが、このような北陸から会津への大きな動きのなかの一つとして、呉羽山丘陵北部の集団から、会津盆地北西部等の東方に墓制が伝えられたと考えられる。前方後円墳は北陸最古段階のものであり、百塚住吉SZ01と周溝形態が類似する能登の宿東山１号墳（石川県立埋蔵文化財センター1987）はわずかに後出するので、呉羽山丘陵北部にもたらされた前方後円墳の情報は、石動・宝達山地等の西方にも二次的に発信された可能性が高い（第５章第４節）。方墳も２基一対として計画的に配置され、円墳も造営されるなど、多様な形態の古墳が造営された。前期前半に終焉を迎える点では、羽根丘陵と共通する。

百塚SZ03の周溝内埋葬を除いて、埋葬後に墳丘の手入れや儀礼が継続した痕跡はない。基本的には埋葬時のみ葬送儀礼が執り行われ、その後は放置された。周溝上部の覆土は遺物包含層（最新遺物は９世紀頃）に由来しており、９世紀頃に堆積したことがわかる。つまり、深さ1.5mの百塚住吉SZ01後円部周溝などが、遺構検出面まで自然埋没するまでには500～600年程度の時間を要したことになるのである。呉羽山丘陵北部から伝えられたと考えられる、福島県会津坂下町男壇遺跡SZ02・04（前方後方形周溝墓：会津坂下町教育委員会1990）では、深さ1.3mの後方部周溝の中位で検出された浅黄色土について、榛名－二ッ岳火山灰（FA）または榛名－二ッ岳軽石（FP）の可能性が指摘された（パリノ・サーヴェイ株式会社1990）。男壇SZ02・04は百塚住吉遺跡・百塚遺跡の前方後方墳・前方後円墳とほぼ同時期であり、周溝は自然堆積で埋没している。このようななか、周溝中位でFA／FPが検出されたということは、検出面まで埋没するまでに同程度の時間が経過した可能性が高い。この点でも、両遺跡は類似している。

植物珪酸体分析から、周溝上部が埋没した頃にはクマザサ属を含むタケ亜科が減少し、ススキ属が分布を拡げた可能性が指摘された（第４章第１節）。また、周溝内は好気的環境にあり、珪藻化石・花粉化石の産状からは、古墳が造営された河岸段丘上は乾いた草地が主体で、周辺には落葉広葉樹が生育していたと推定された（第４章第２節）。炭化したオニグルミの堅果皮片は食用残滓と推定された（第４章第６節）。

調査担当者によって東海系土器とされた古墳出土土器、および弥生土器・土師器は、薄片観察法による胎土観察の結果、富山平野の地質学的背景をもつと推定された（第４章第１・３節）。従って、「東海系」とされる土器は搬入品ではなく、在地産ということになる。また、土器・土製品12点（縄文土器・土偶・弥生土器・土師器）に塗布された赤色顔料は、蛍光X線定性分析の結果、すべてがベンガラと推定された（第４章第９節）。分析に先立って、編集者（小黒）と分析者（秋葉）が今次発掘調査出土全資料を実見し、赤色顔料が塗布された資料を抽出した。肉眼観察では赤色・くすんだ赤色・暗赤褐色の３色に大別でき、それらから分析試料を抽出した。このような前提作業を経た分析試料のすべてがベンガラと推定された以上、３遺跡出土品に塗布された赤色顔料は、時代を問わず、ある程度の確実性をもってベンガラと想定することが許されるのではなかろうか。

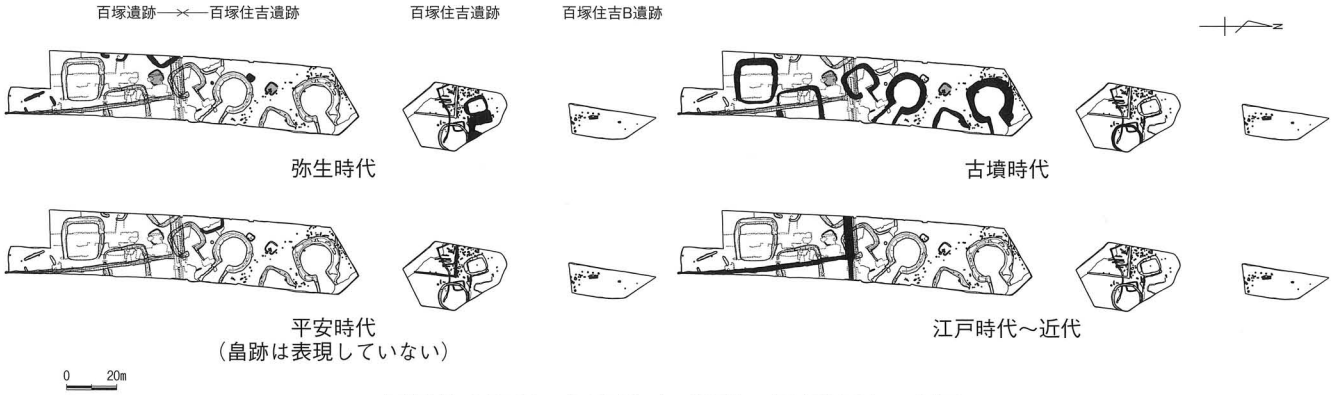
第４節　平安時代

百塚住吉遺跡（A・B地区）で畑作が行われた。それは、古墳の周溝が埋没し、地形が平坦になったことが契機である。周溝が完全に埋没したのは、層相の類似性と畝間の溝と包含層出土遺物との関係から、９世紀頃と推定できる。埋没後、耕地開発に先立って平坦地形を設けるために微高地が削平されるなかで、墳丘の削平を免れた古墳もある。墓域との認識が残っていたのだろう。

畑作はおおむね平安時代（９世紀以降）に行われたと考えられ、畝間の溝から検出されたイネ属由来の植物珪酸体は、栽培植物ではなく、農業資材として利用された稲藁に由来する可能性が想定された（第４章第１節）。百塚住吉遺跡A地区SX02は、重複関係から畑作に先行するものの、覆土上位が遺物包含層に由来することから、平安時代の遺構と推定できる。百塚住吉遺跡C地区SX01覆土（遺物包含層由来）出土鉄滓は、EPMA半定量分析の結果、鍛冶炉の底に堆積形成された鍛錬鍛冶滓と推定され（第４章第４節）、近傍に鍛冶炉が存在する可能性が高い。この他、百塚住吉遺跡C地区では直角に折れ曲がる溝が検出された。

第５節　江戸時代～近代

百塚遺跡（A・B地区）のSD01・02（区画溝）が該当する。当該期の遺物は包含層・撹乱出土品を含め、17世紀後半～18世紀前半の時期幅で捉えられるものと、18世紀後半以降19世紀代までの時期幅を想定すべきものの２群にわかれる。寛永16（1639）年の富山藩分藩の折、藩主前田利次は百塚での築城を幕府から許可されたが、万治年間（1658－1661）に至り、財政難から築城を断念した。この間に武士や商人の屋敷地が造成され、百塚周辺は賑わった（平凡社1994）。百塚村の由来は不明だが、今次発掘調査で検出した出現期古墳など、多数の墳丘が江戸時代まで残っていたことで、百塚村が成立したのではなかろうか。百塚周辺には、築城計画の断念以降も肝煎や十村がいた（平凡社1994）が、SD01・02はそれ以降もこの地で人々が生活していたことを示している。　（小黒智久）



百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡の変遷

巻末原色図版　百塚遺跡Ａ地区・百塚住吉遺跡Ａ地区平行投影（オルソ）写真（合成）

N

0　(1/300)　10m

百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡の位置（▶・◀の交点付近，1947年11月13日米極東空軍撮影）

写真図版２　百塚住吉遺跡Ａ地区

完掘状態（北から）

完掘状態（東から）

完掘状態（垂直写真　画面右が北）

SZ01完掘状態（南から）

完掘状態（垂直写真　画面右が北）

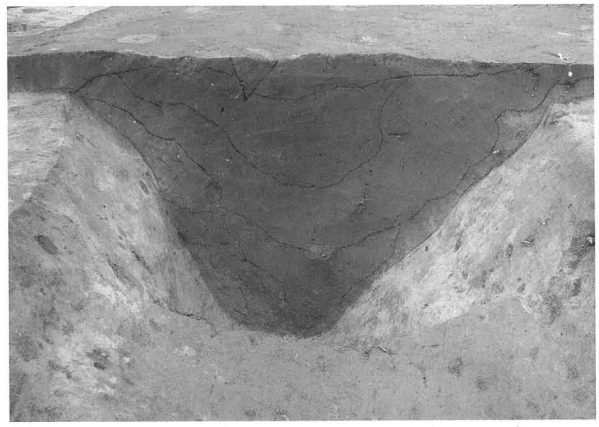
SI01検出状態（西から）

SX01検出状態（南から）

SX02検出状態（南西から）

写真図版5　百塚住吉遺跡A地区

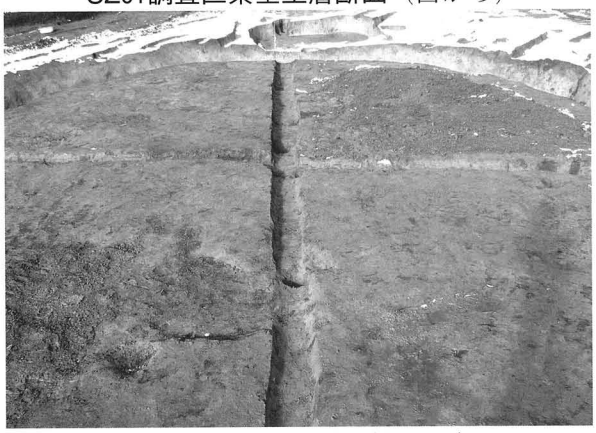
SZ01 A—A'ライン土層断面（西から）



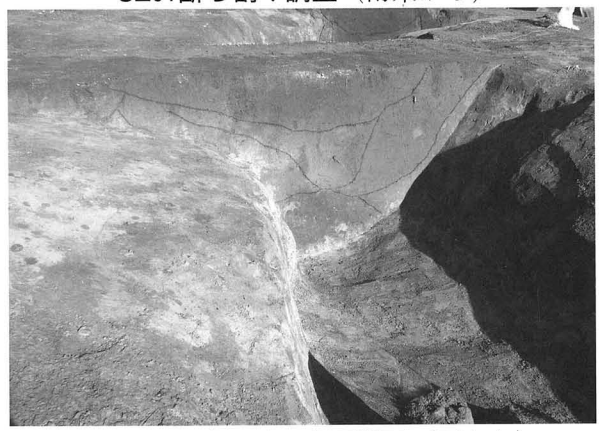
SZ01 B—B'ライン土層断面（南から）

SZ01調査区東壁土層断面（西から）

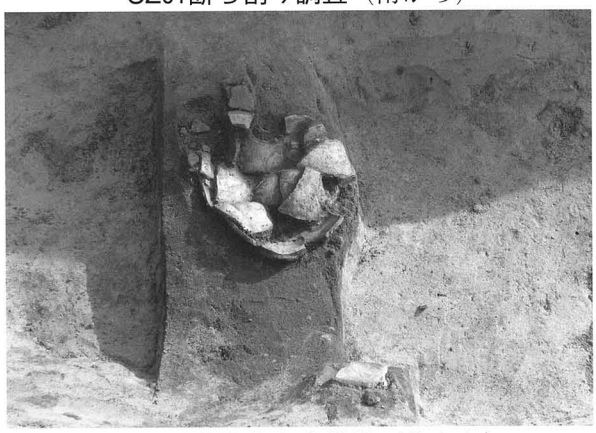
SZ01断ち割り調査（南東から）



SZ01断ち割り調査（南から）

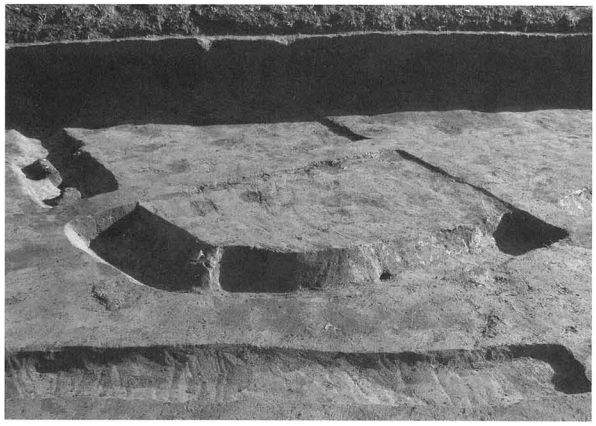


SZ02 A—A'ライン土層断面（西から）

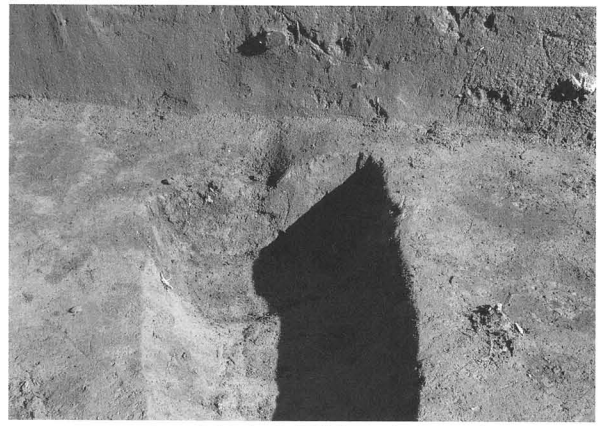


SZ02周溝遺物出土状態（北から）

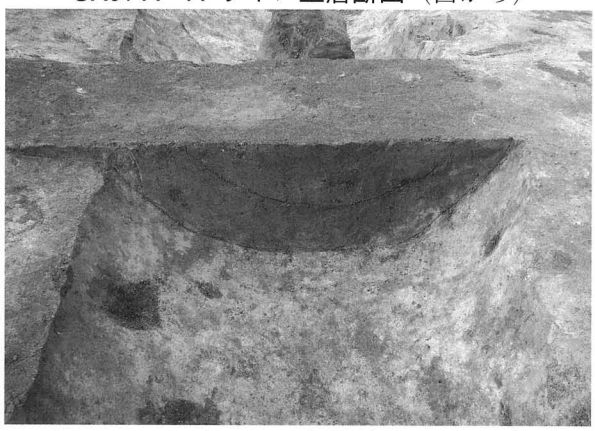
SZ02周溝遺物出土状態（北から）



SX01 A—A' ライン土層断面（西から）



SX01 A' 地点土層断面（西から）



SX02 B—B' ライン土層断面（北から）

SX02 遺物出土状態（北から）

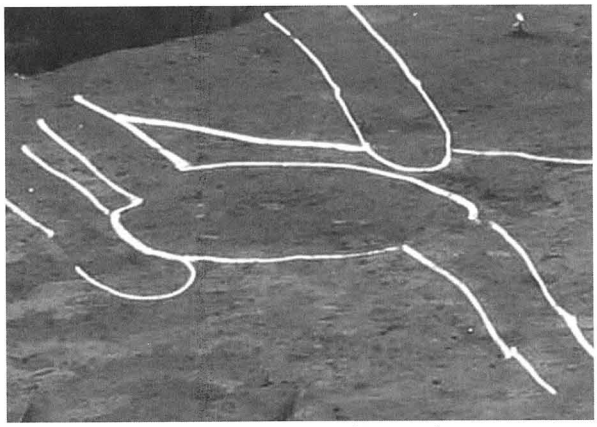
SI01（SZ01 A—A' ライン）土層断面（西から）

SI01覆土上面遺物出土状態（東から）

SI01—SK01遺物出土状態（東から）

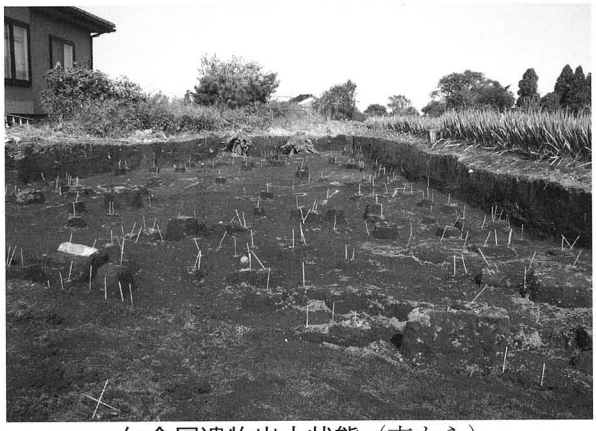
SI01—SK01遺物出土状態（東から）

写真図版7　百塚住吉遺跡A地区



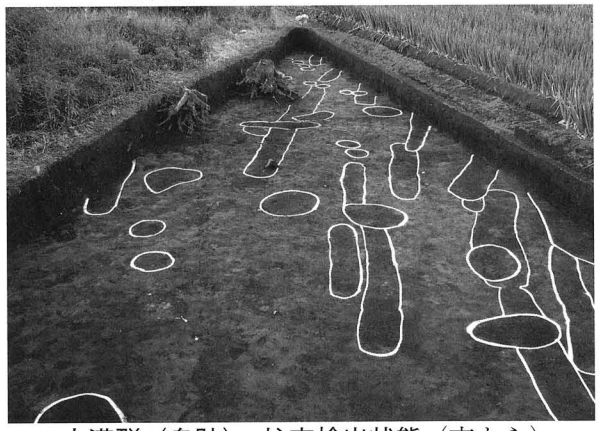
SE01 検出状態（南から）

SE01 A—A' ライン土層断面（南から）



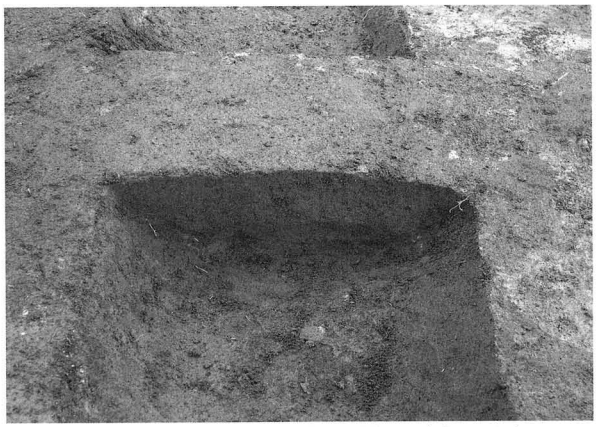
包含層遺物出土状態（南から）

包含層遺物出土状態（東から）



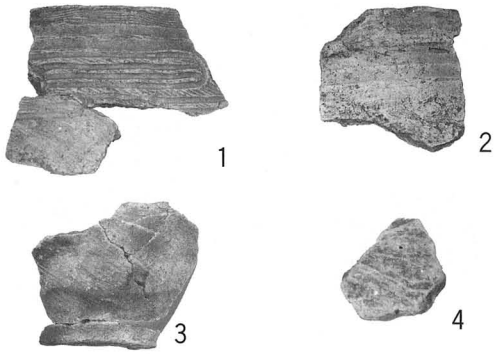
小溝群（畠跡）・柱穴検出状態（南から）

SD28・SD29 A—A' ライン土層断面（南から）

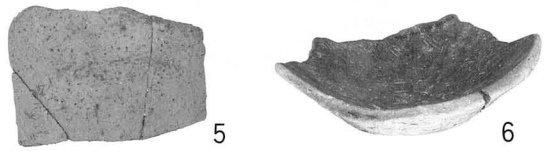


SD46 A—A' ライン土層断面（南から）

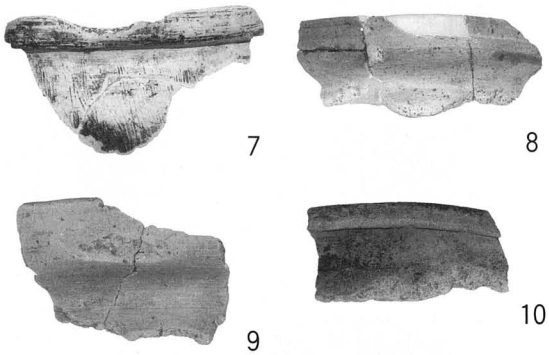
小溝群（畠跡）完掘状態（東から）



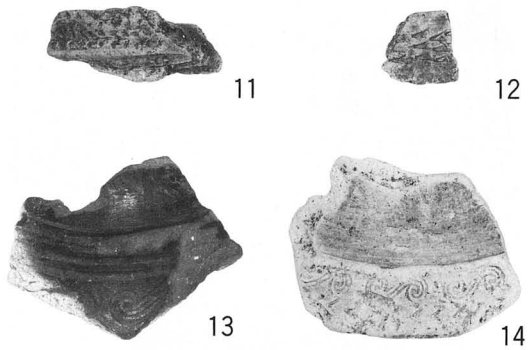
SZ01出土遺物（1～3：深鉢，4：鉢）



SZ01出土遺物（5・6：壷）

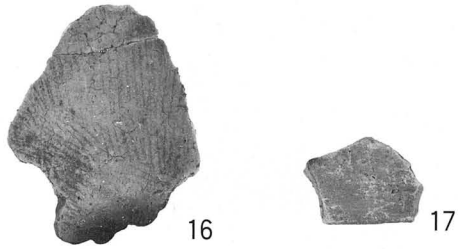


SZ01出土遺物（7～10：甕）

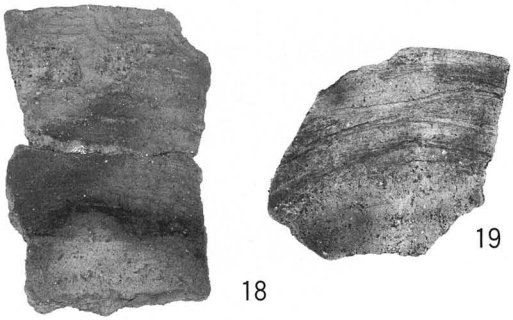


SZ01出土遺物（11・12：壷，13：器台，14：高坏）

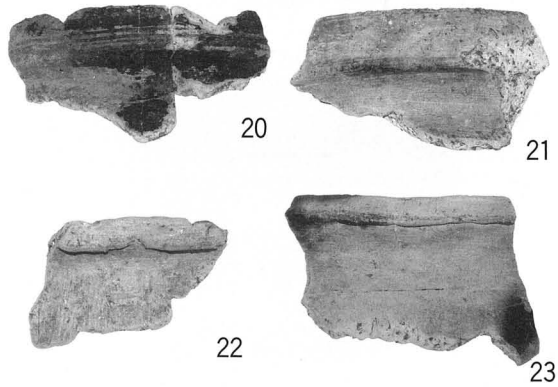
SZ01出土遺物（15：壷）



SZ01出土遺物（16：台付甕，17：器台）

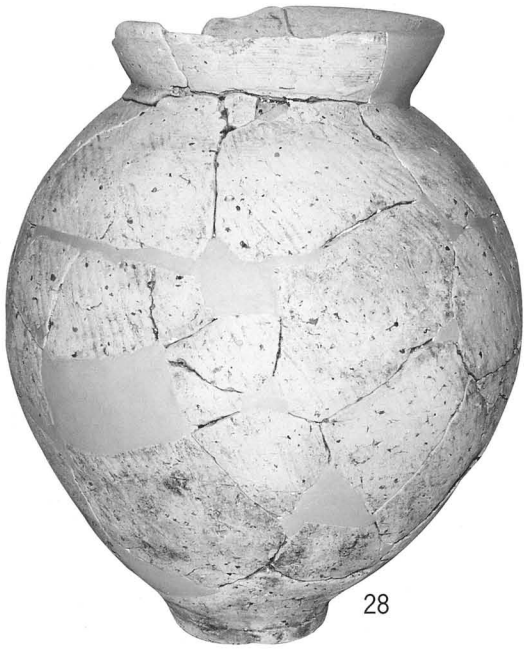


SZ02出土遺物（18：深鉢，19：鉢）



SZ02出土遺物（20～23：甕）

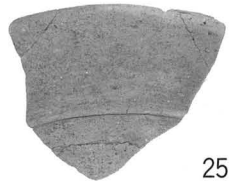
SZ02出土遺物（24：甕）

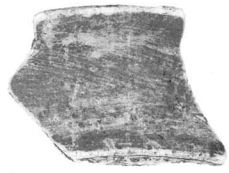


SZ02出土遺物（28：壷）

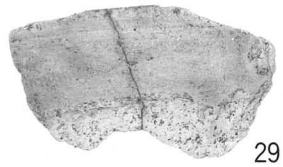
SX01出土遺物（45：高坏）

SI01出土遺物（32：甕）





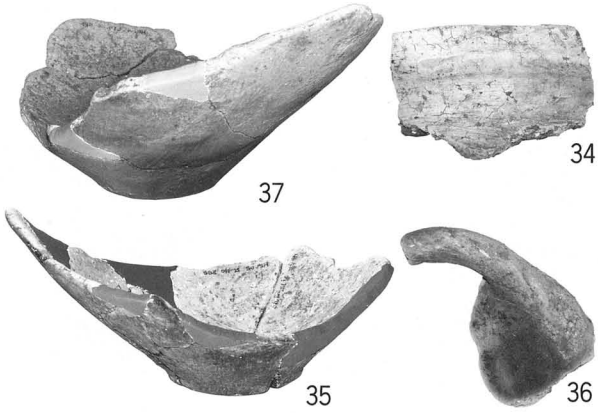
SZ02出土遺物（25～27：高坏）



SZ02出土遺物（29：壷，30：甕，31：高坏）

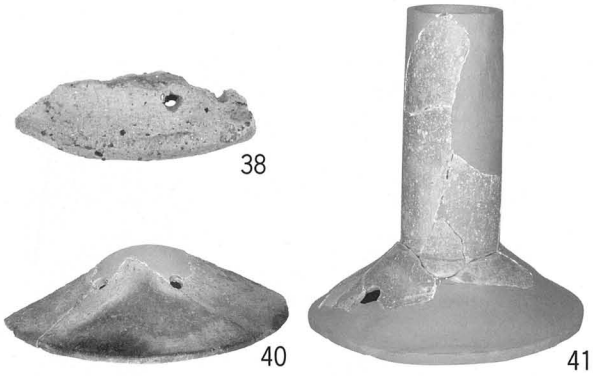
SX02出土遺物（46：壷，47：高坏）

SI01出土遺物（33：甕）

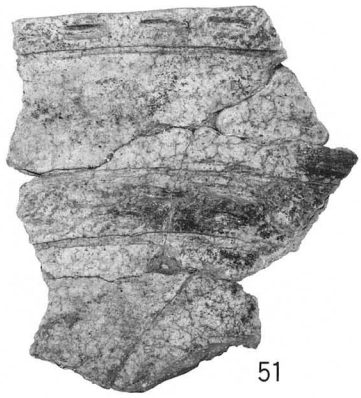


SI01出土遺物（34～37：甕）

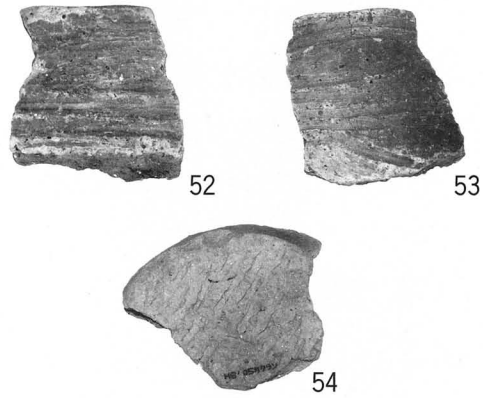
SI01出土遺物（39：高坏）



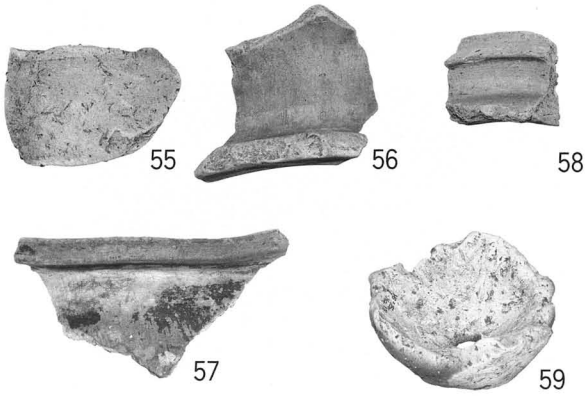
SI01出土遺物（38：蓋，40・41：高坏）



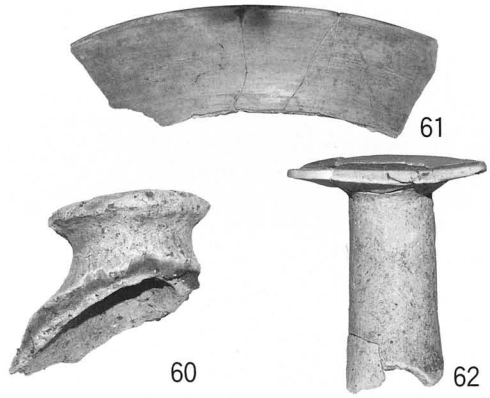
遺構外（包含層・表土・撹乱）出土遺物
（51：深鉢）



遺構外（包含層・表土・撹乱）出土遺物
（52：壷，53・54：深鉢）

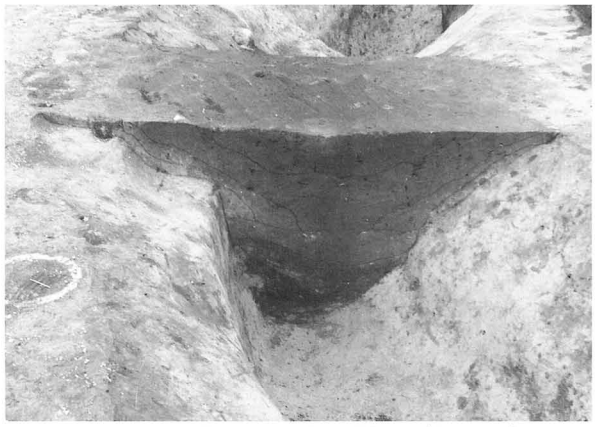


遺構外（包含層・表土・撹乱）出土遺物
（55・56：壷，57・58：甕，59：甑）



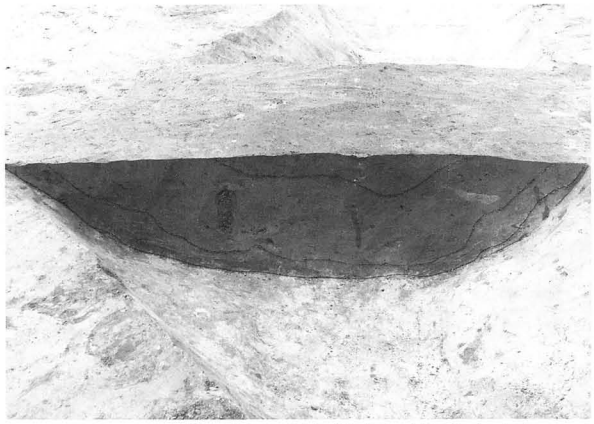
遺構外（包含層・表土・撹乱）出土遺物
（60：蓋，61・62：高坏）

遺構検出状態（南から）

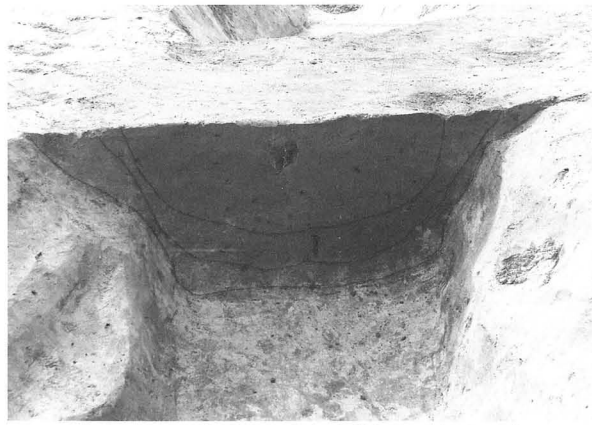


SZ01 A－A’ ライン土層断面（北から）

SZ01 B－B’ ライン土層断面（北から）



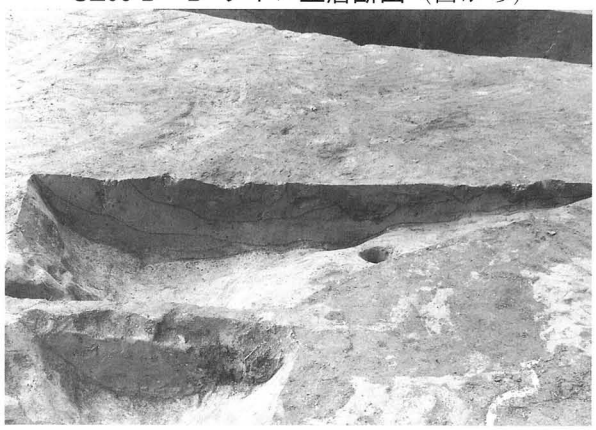
SZ03 A－A’ ライン土層断面（北東から）



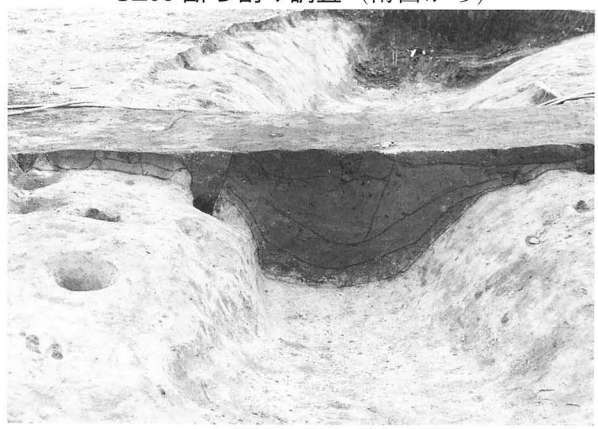
SZ03 B－B’ ライン土層断面（北から）

SZ03 D－D' ライン土層断面（西から）

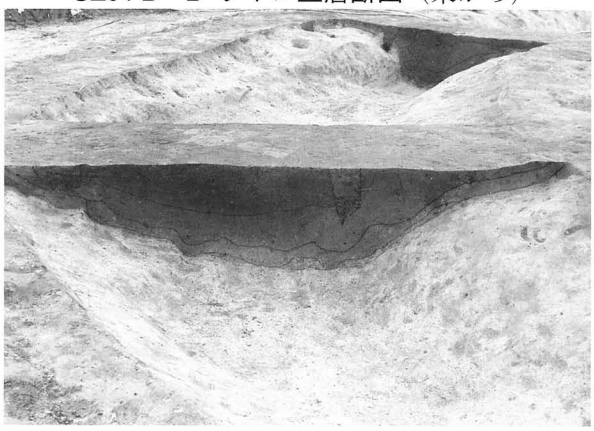
SZ03 断ち割り調査（南西から）



SZ04 B－B' ライン土層断面（東から）



SZ04 D－D' ライン土層断面（東から）

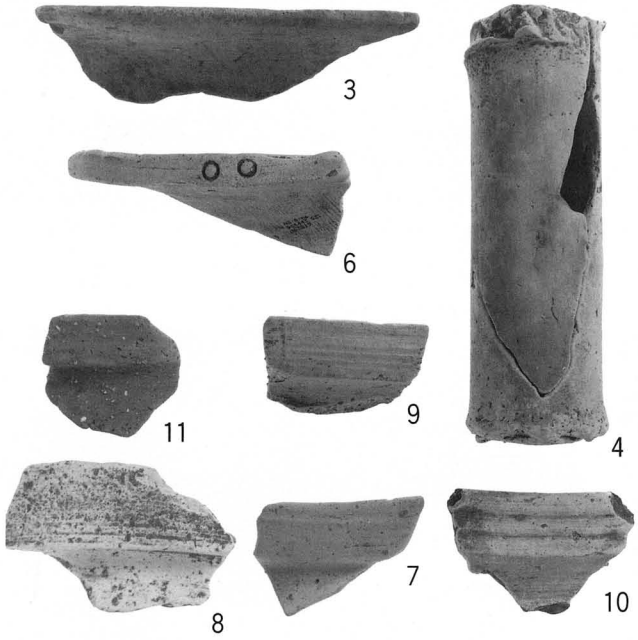


SZ04 G－G' ライン土層断面（南東から）

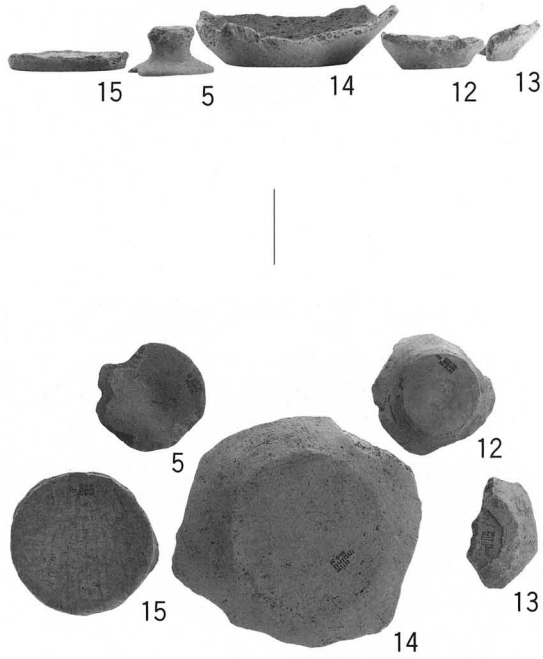
SZ04 I－I' ライン土層断面（東から）

SZ04 南側くびれ部遺物出土状態（東から）

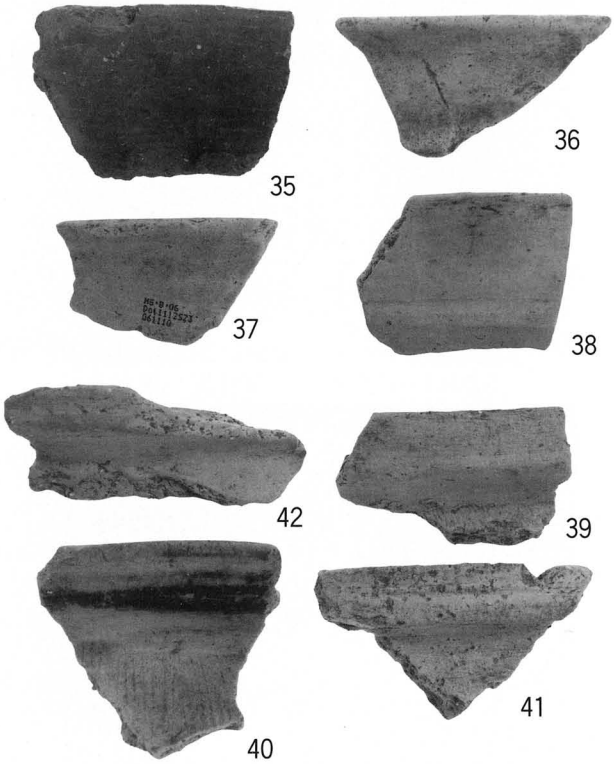
SZ04 断ち割り調査（北西から）



SZ01出土遺物（3・4：高坏，6～11：甕）

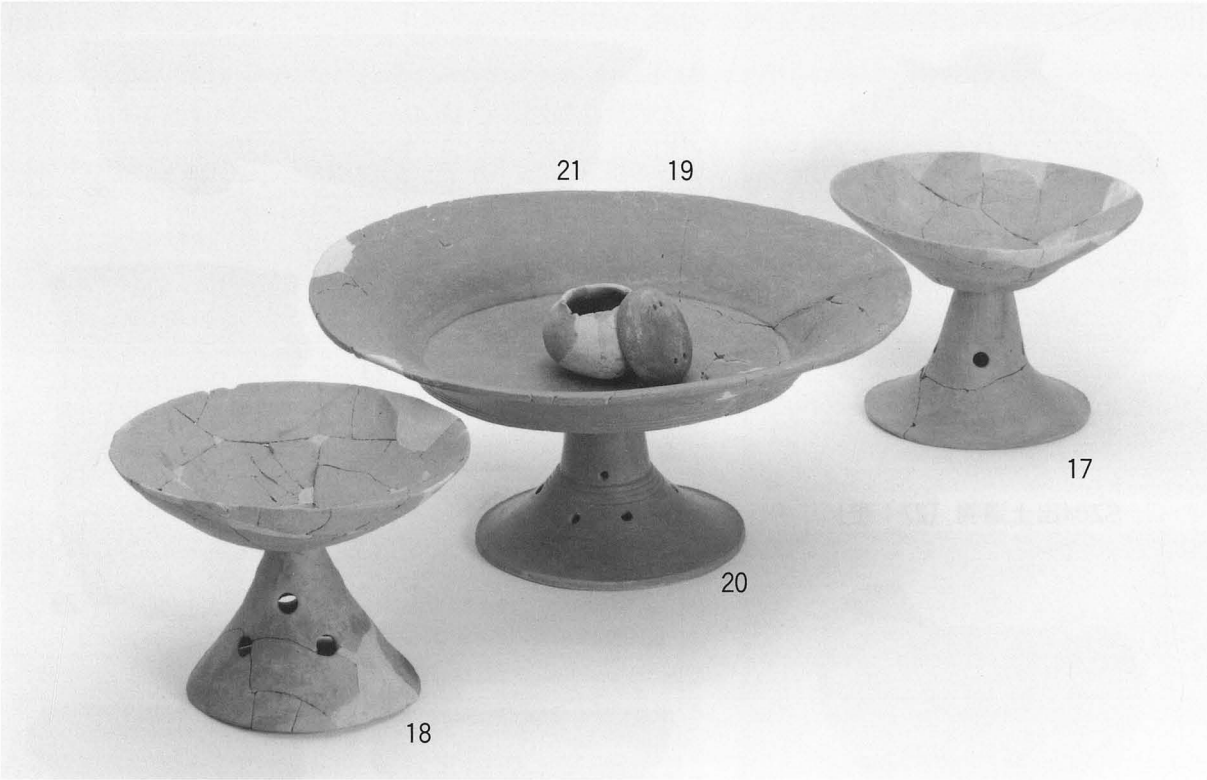


SZ01出土遺物
（5：低脚高坏，14：壷，12・13・15：壷または甕）



SZ03出土遺物（35：浅鉢？，36～38：高坏，40～42：甕）

SZ03出土遺物（43：壷，44：甑）



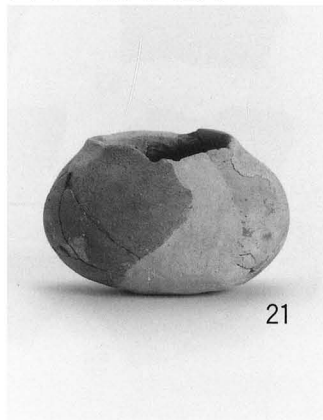
SZ04くびれ部出土一括遺物

SZ04くびれ部出土高坏

SZ04くびれ部出土高坏

SZ04くびれ部出土高坏

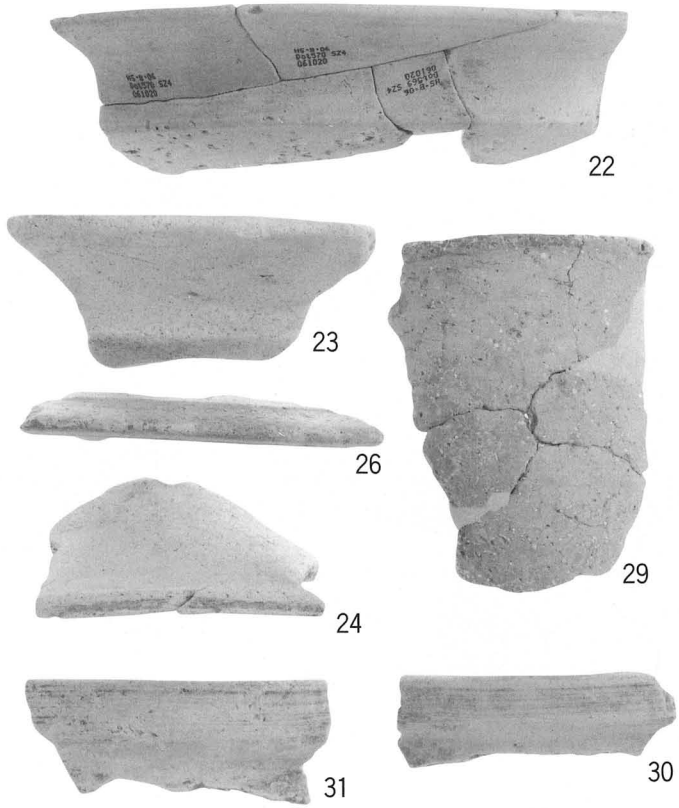
SZ04くびれ部出土小壷蓋



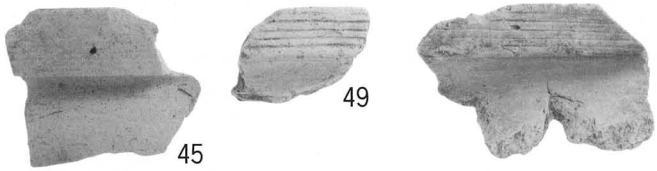
SZ04くびれ部出土小壷

SZ04出土遺物（27：壷）

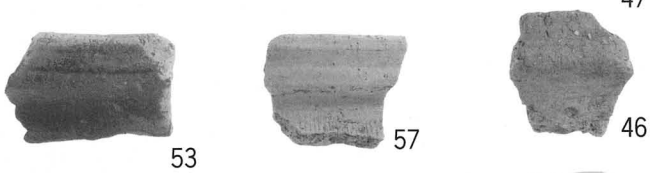
SZ04出土遺物（28：鉢）



SZ04出土遺物（22～24・26：高坏，29～31：甕）



SZ04出土遺物
（25：高坏または器台，32・33：甕）



遺構外（包含層）出土遺物
（60：甕または壷，61：甕）

遺構外（包含層）出土遺物
（45～55・57・59：甕，56：壷，59：壷または鉢）

遺構外（包含層）出土遺物（63：坏）

遺構検出状態（東から）

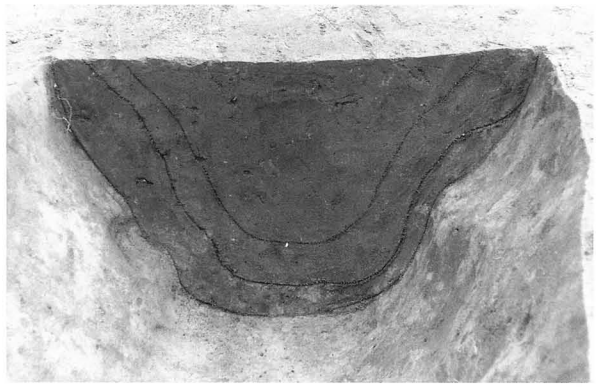
SI01 完掘状態（南東から）

SI01 遺物出土状態（南から）

SI01 遺物出土状態（西から）

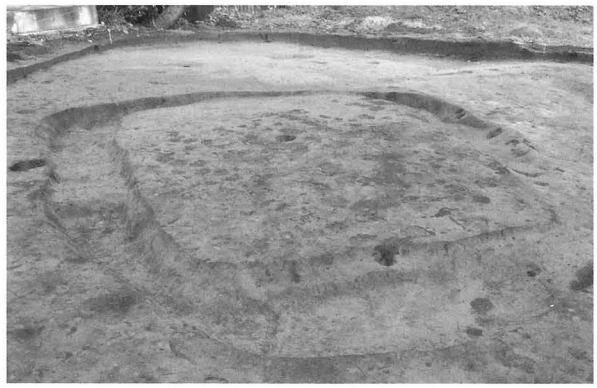
SX01 遺物出土状態（南から）

SZ05 完掘状態（南から）

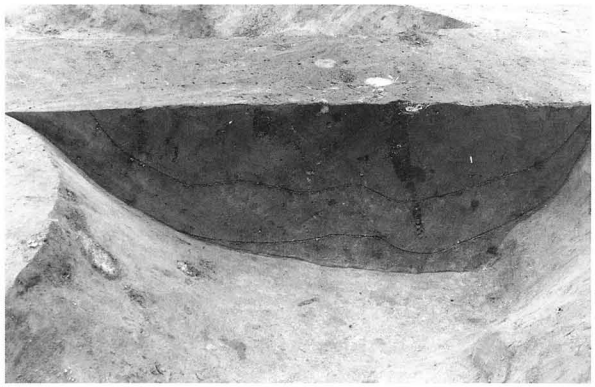


SZ05 B－B’ ライン土層断面（北から）

SZ05 C－C’ ライン土層断面（北西から）



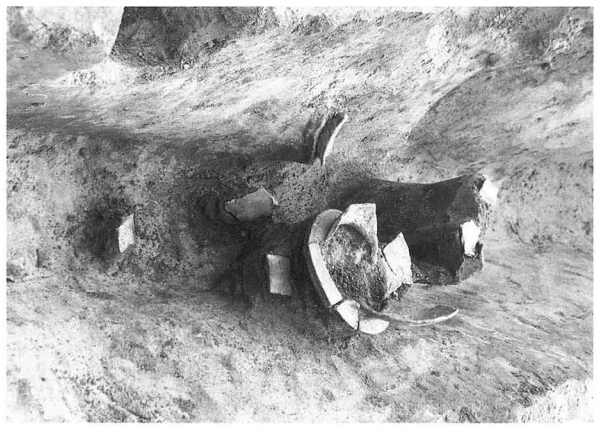
SZ06 完掘状態（南から）



SZ05 E－E’ ライン土層断面（北東から）

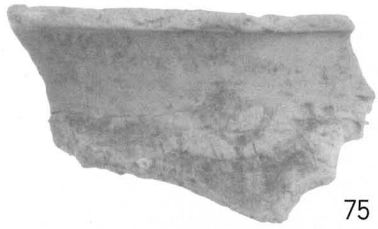
SZ06 断ち割り調査（南東から）

SD01 遺物出土状態（東から）



SD01 遺物出土状態（東から）

72


75

78

71

SZ05出土遺物
（71：器台，78：壷または甕）

74

74

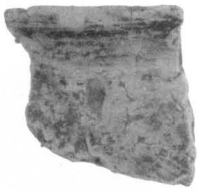
69

68

SZ05出土遺物（68・69：深鉢）

77

73


76

70

SZ05出土遺物（70：高坏，72～74・76・77：甕，75：壷または甕）

81

SZ06出土遺物（81：高坏または器台）

82

126

127

SI01出土遺物（126・127：蓋）

84

115

116

SI01出土遺物（115・116：高坏）

83

79

80

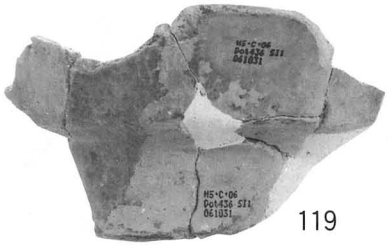
SZ06出土遺物（79・80：高坏，82～84：甕）

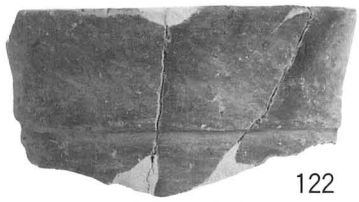
139　117　137　140　138

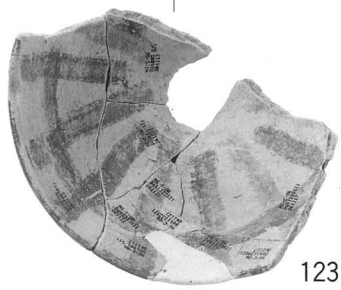
SI01出土遺物（117：高坏，
137・138：甕または壷，139：壷，140：甑？）

119

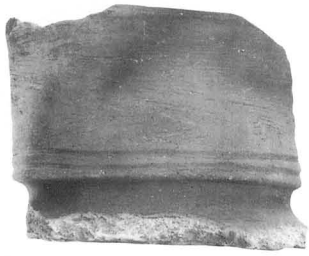
119

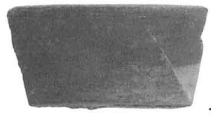

119


122


123

SI01出土遺物(123：鉢または高坏)


121


118

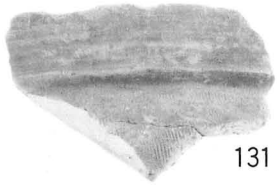
125

SI01出土遺物（118・119・121：壷，122：壷または鉢，125：鉢）

124

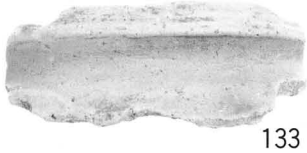
SI01出土遺物（124：鉢）

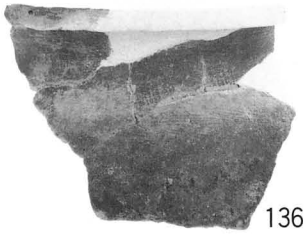
128

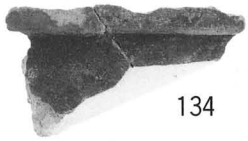

131

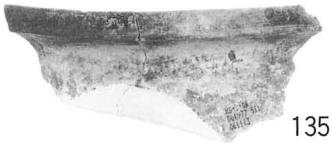
130

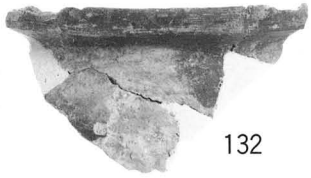
129


133


136

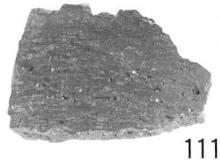

134


135


132

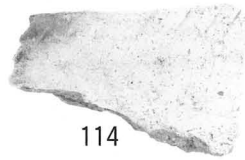
SI01出土遺物（128～136：甕）

110


111

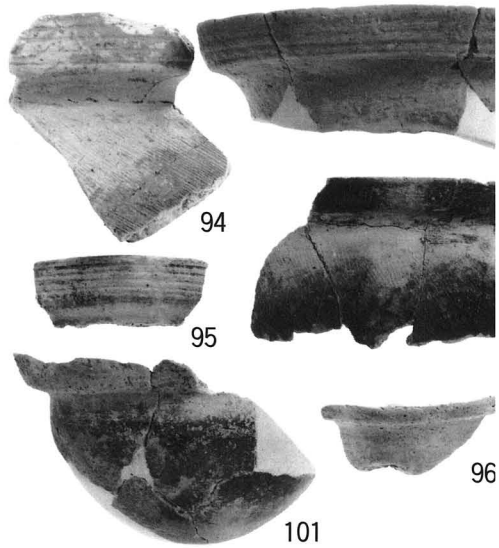
112

113

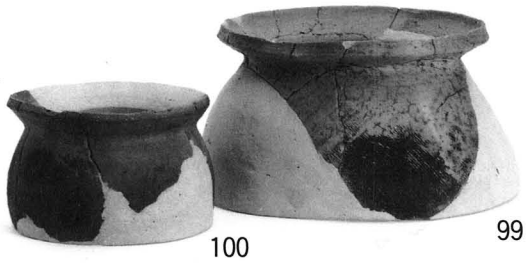

114

SI01出土遺物
（110・111・113・114：深鉢，112：鉢または深鉢）

SI01出土遺物（120：壷）

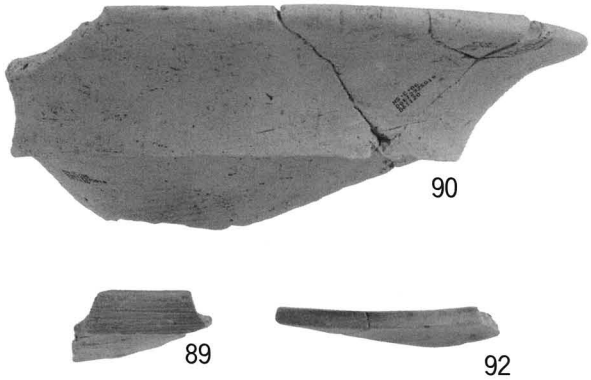


SD01出土遺物（94・95・97・98：甕，96：壷，

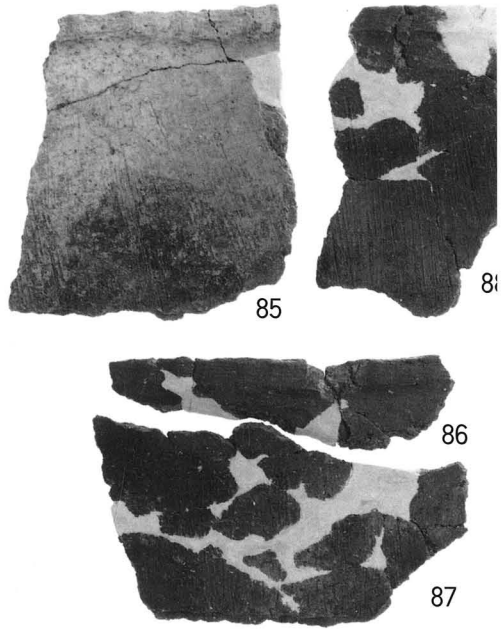


SD01出土遺物（99・100：甕）

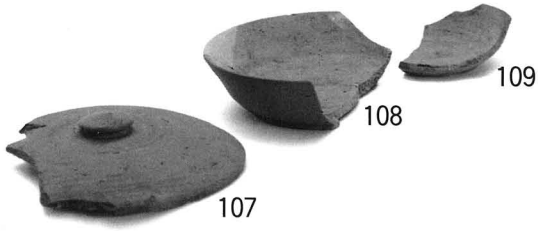
SI01出土遺物（91・93：高坏または器台，1



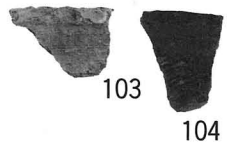
SD01出土遺物
（89：器台，90：高坏，92：高坏または器台）



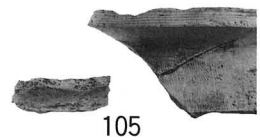
SD01出土遺物（85～88：深鉢）



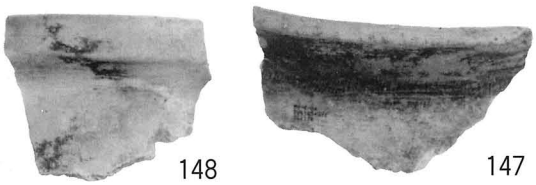
SD19出土遺物（107：蓋，108・109：椀）



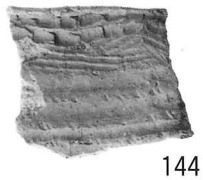
SD19出土遺物
（103・104：深鉢）



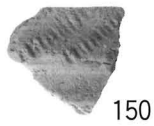
SD19出土遺物
（105：高坏または器台，



SX01出土遺物（147・148：甕）

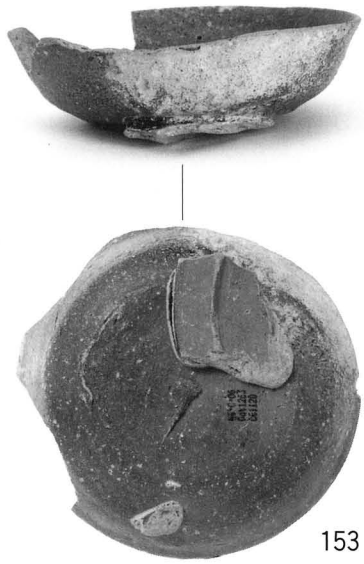


SX01出土遺物(144:深鉢)



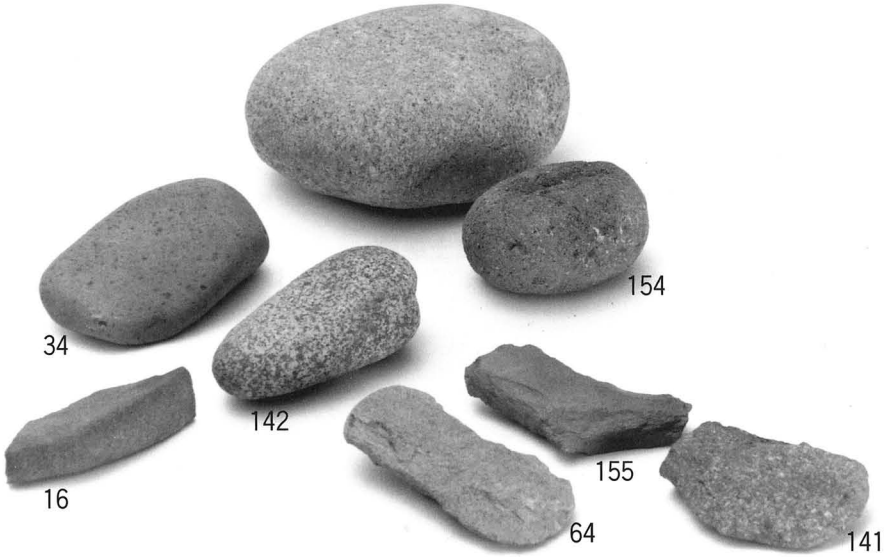
包含層出土遺物(150:深鉢)

SX01出土遺物(145・146：高坏，149：甕または壷)



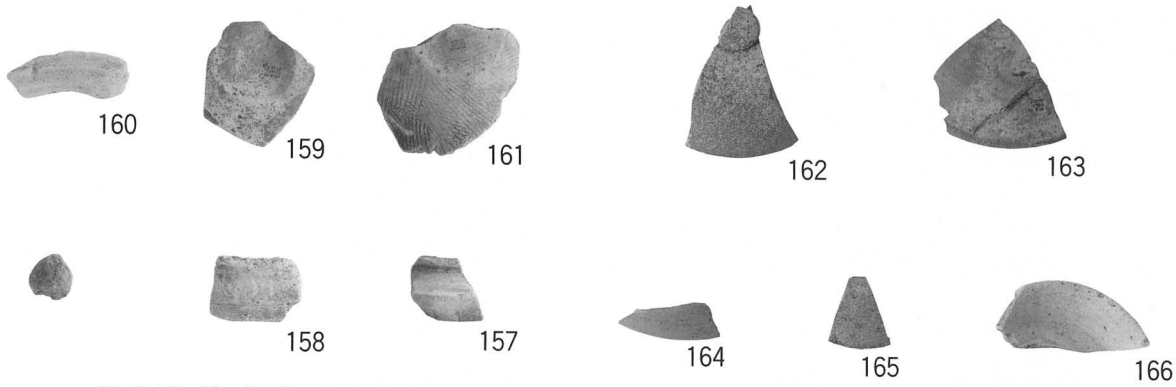
遺構外（包含層）出土遺物（坏）

遺構外（包含層）出土遺物（151：甕，152：壷）



B地区SZ01出土遺物(16：磨石)，SZ04出土遺物(34：磨石)，遺構外(包含層)出土遺物(64：打製石斧)，
C地区SI01出土遺物(141：打製石斧，142：磨石)，遺構外(包含層)出土遺物(154：敲石，155：打製石斧)

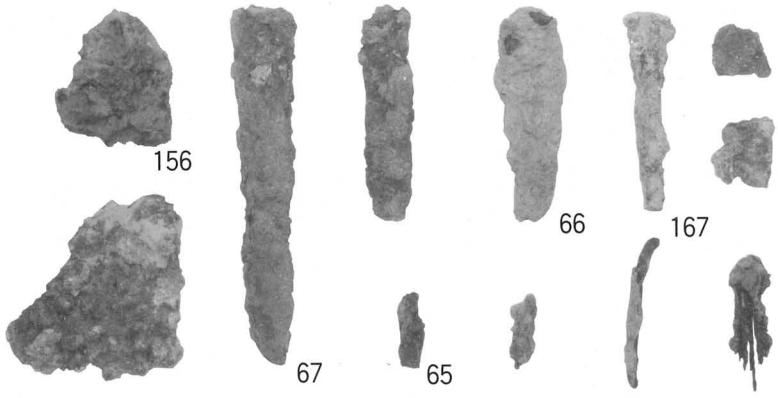
遺構検出状態（南東から）



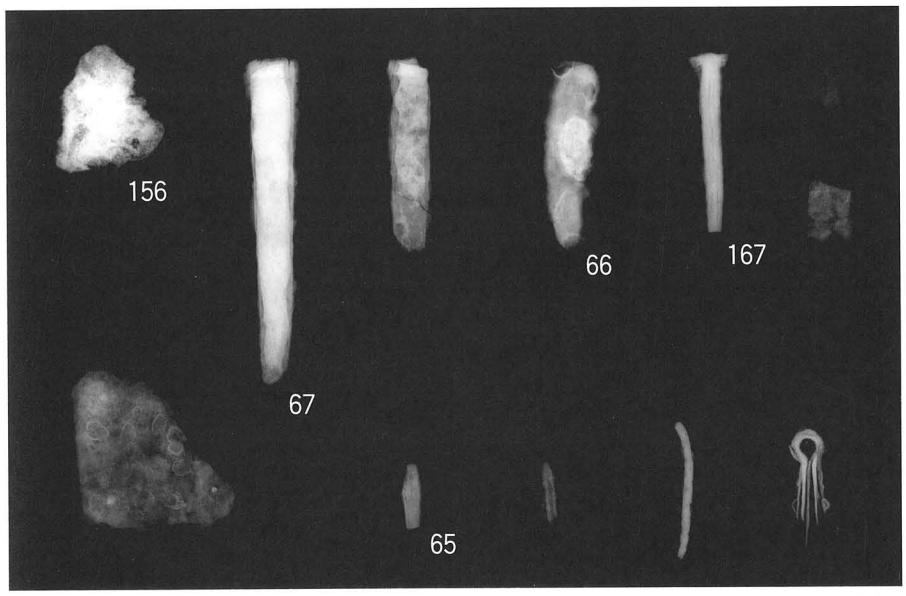
遺構外（包含層）出土遺物
（157・158・161：甕，159：壷，160：高坏）

遺構外（包含層）出土遺物
（162～165：蓋，166：坏）

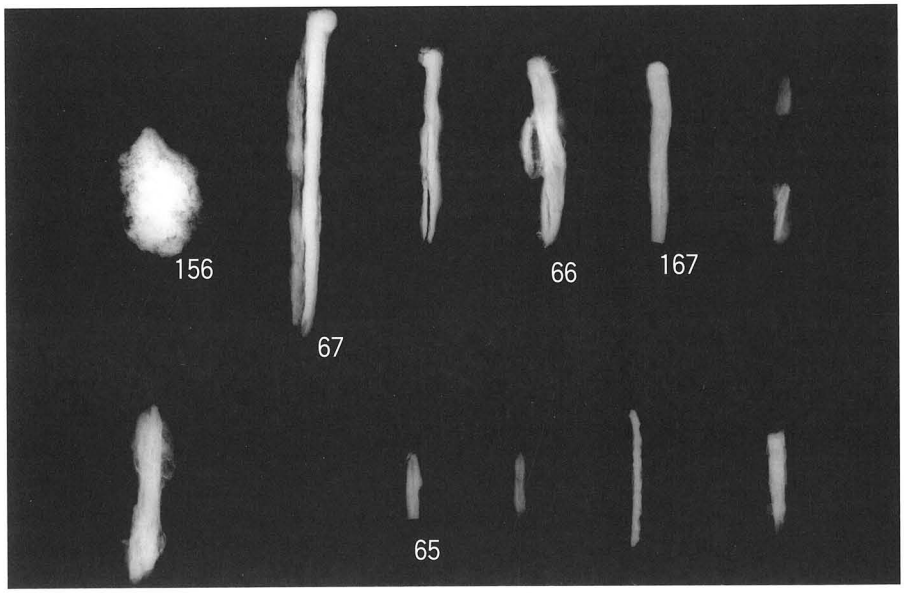
写真図版23　百塚住吉遺跡B地区



鉄製品実体写真



鉄製品X線写真（正面）



鉄製品X線写真（横位）

遺跡遠景（東から）

第Ⅱ区完掘状態（西から）

遺跡遠景（東から）

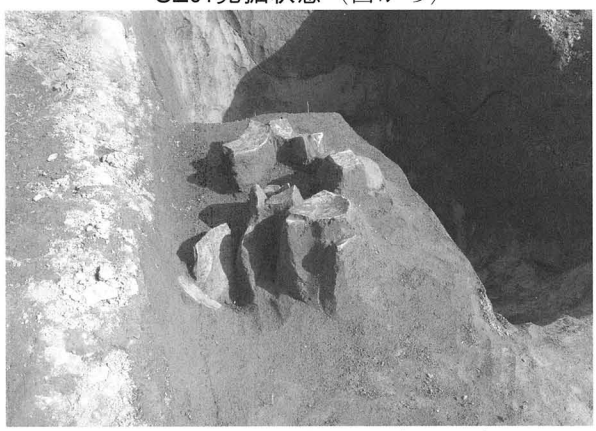
第Ⅱ区完掘状態（西から）

SZ01 B—B' ライン土層断面（西から）

SZ01 A—A' ライン土層断面（北から）

SZ01完掘状態（西から）

SZ02 N—N' ライン土層断面（南から）



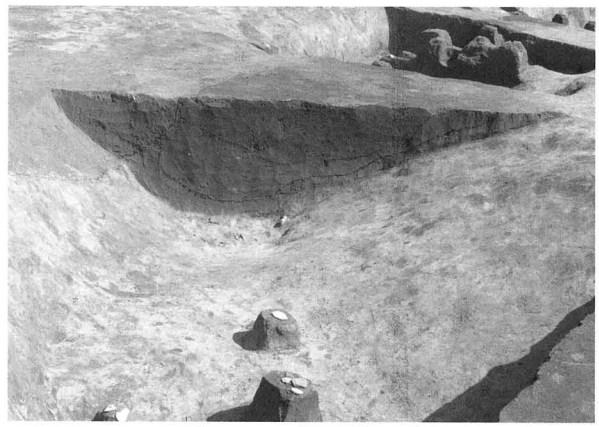
SZ02周溝遺物出土状態（西から）

SZ02完掘状態（北西から）

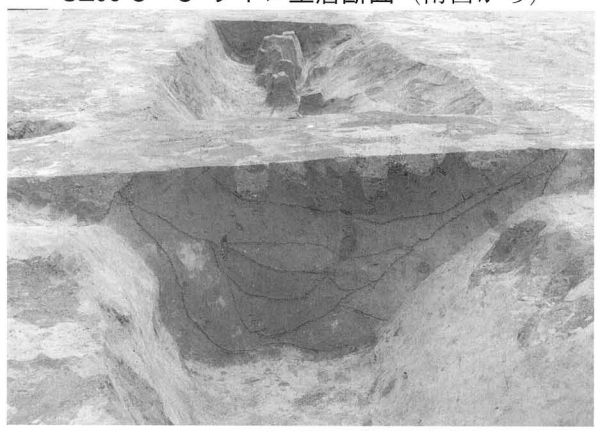
SZ03検出状態（南から）

SZ03 A—A' ライン土層断面（南から）

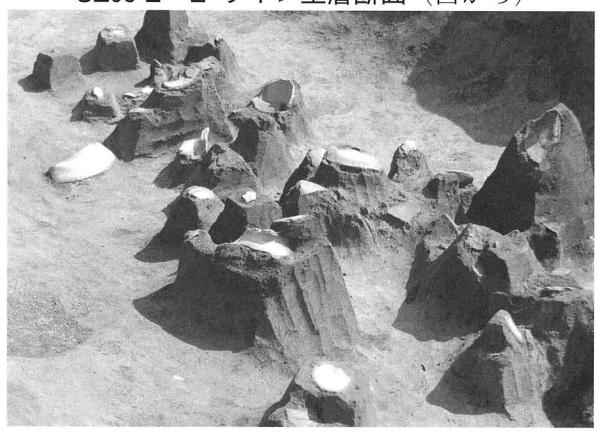
SZ01 B－B’ライン土層断面（西から）


SZ03 C－C’ライン土層断面（南西から）

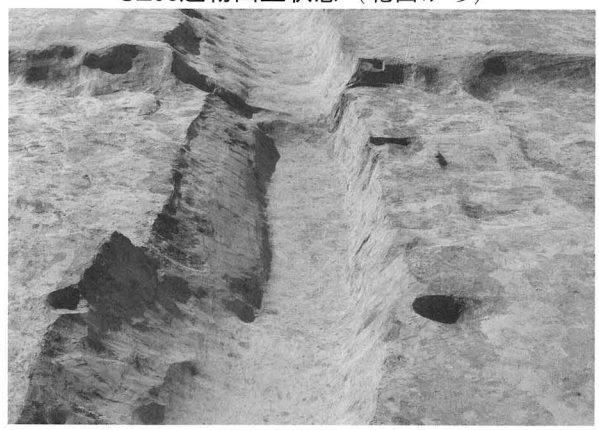
SZ03 D－D’ライン土層断面（南東から）


SZ03 E－E’ライン土層断面（西から）

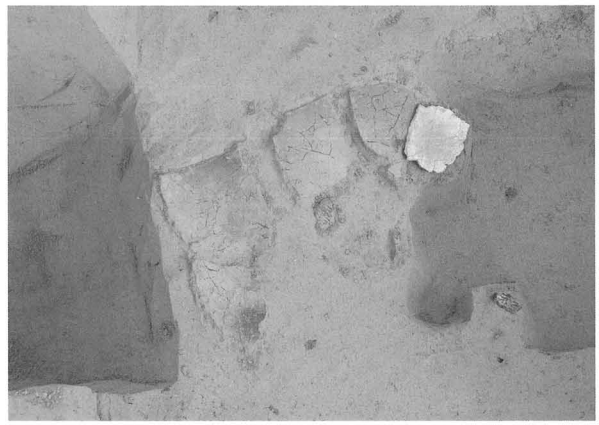
SZ03遺物出土状態（北から）


SZ03遺物出土状態（北西から）

SZ03完掘状態（北から）


SZ03－SK01完掘状態（東から）

SZ03断ち割り調査（南から）



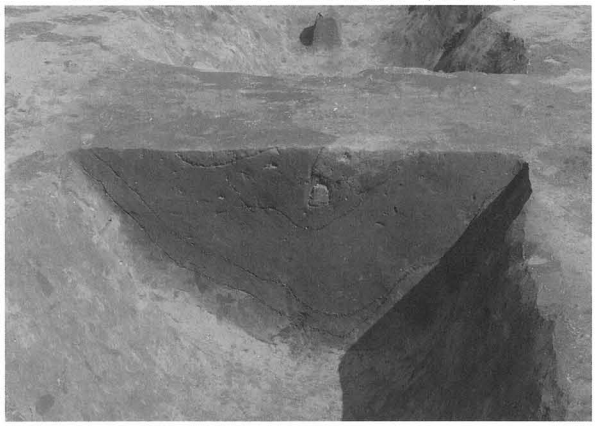
SZ03断ち割り調査 縄文土器出土状態（西から）

SZ04 A—A' ライン土層断面（南から）

SZ04 B—B' ライン土層断面（東から）

SZ04 C—C' ライン土層断面（北から）

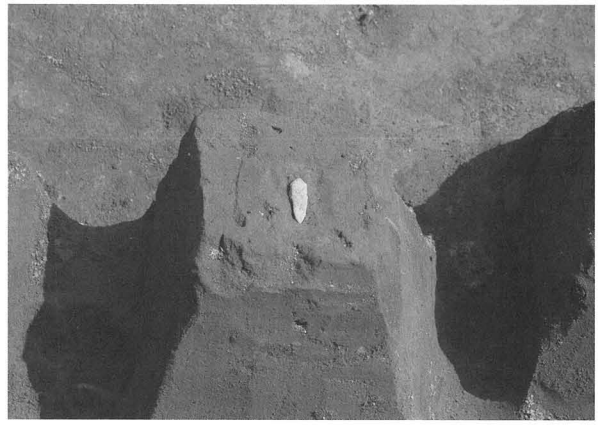
SZ04完掘状態（東から）



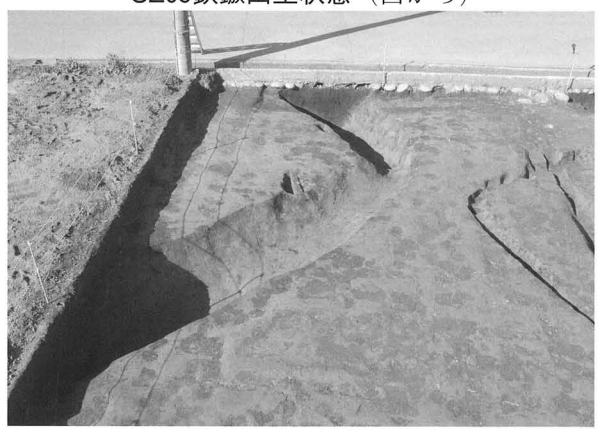
SZ05 A—A' ライン土層断面（西から）

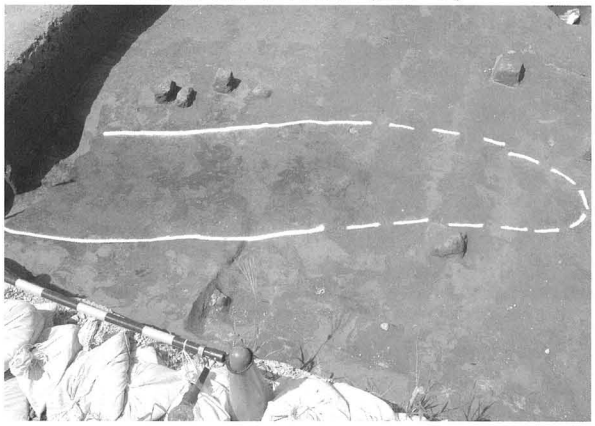
SZ05 B—B' ライン土層断面（西から）

SZ05 D—D' ライン土層断面（東から）

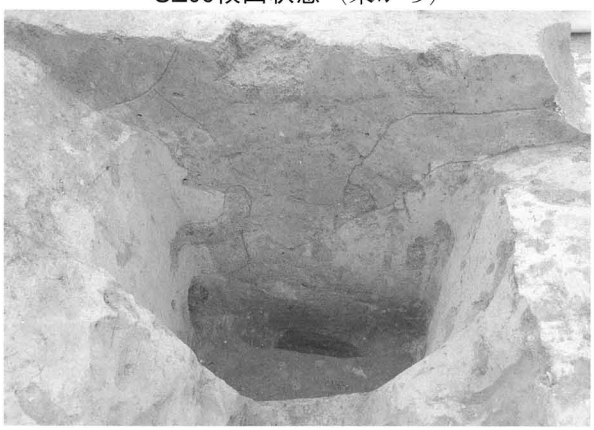

SZ05鉄鏃出土状態（西から）

SZ05遺物出土状態（西から）

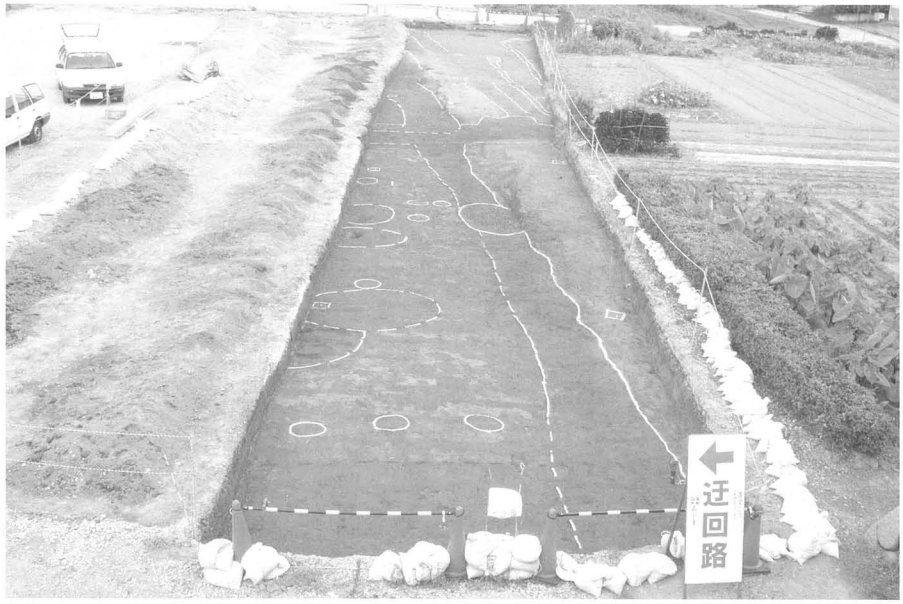

SZ05完掘状態（南から）


SZ06検出状態（東から）

SZ06土層断面（調査区南壁，北から）

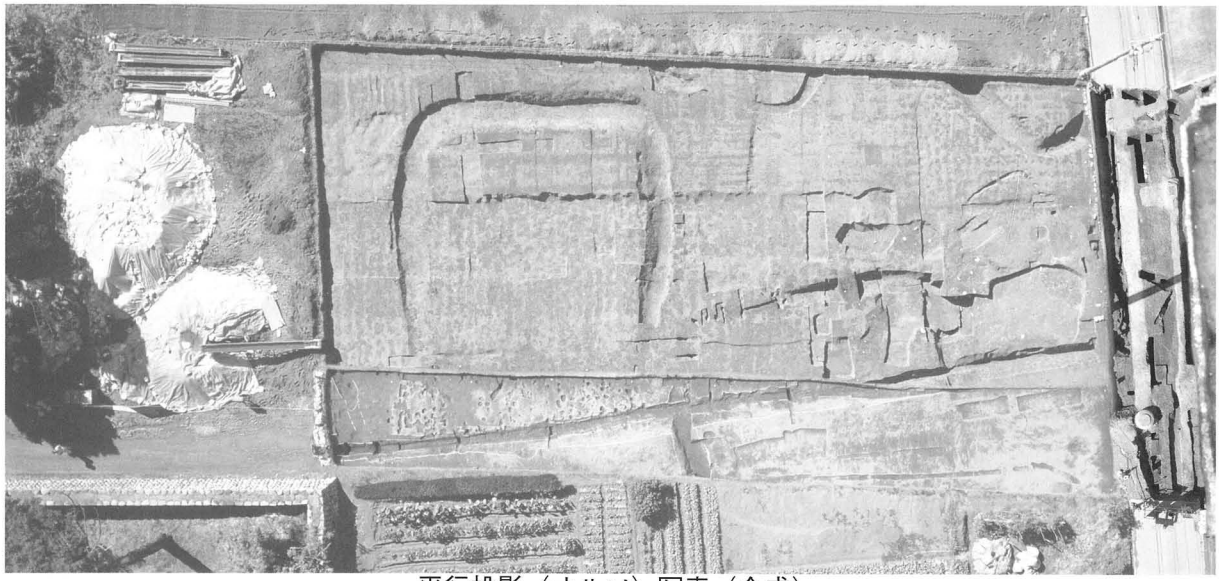

SD01 C—C' ライン土層断面（北から）

SD01完掘状態（北東から）

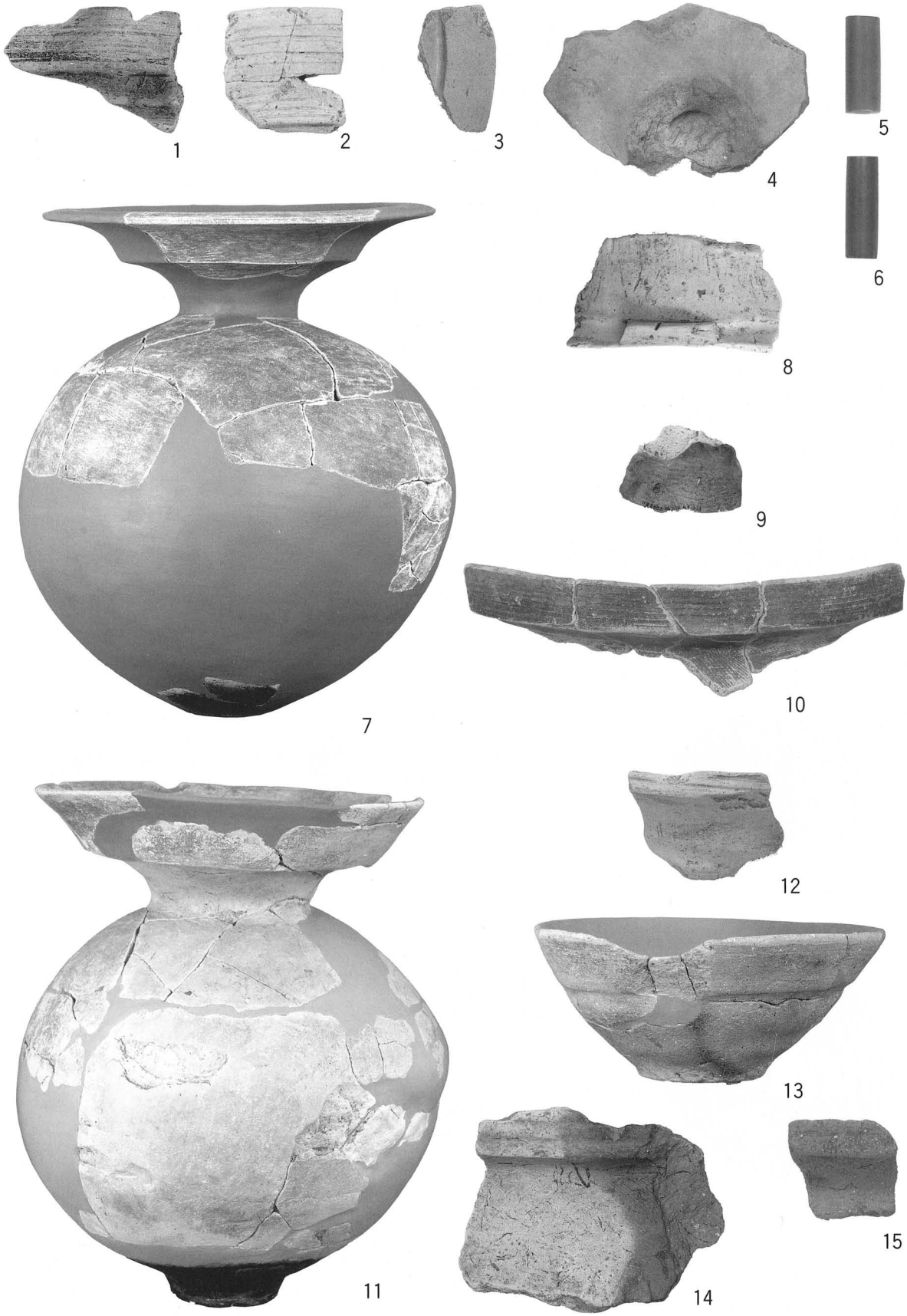


第Ⅰ区　遺構検出状態
（南から）

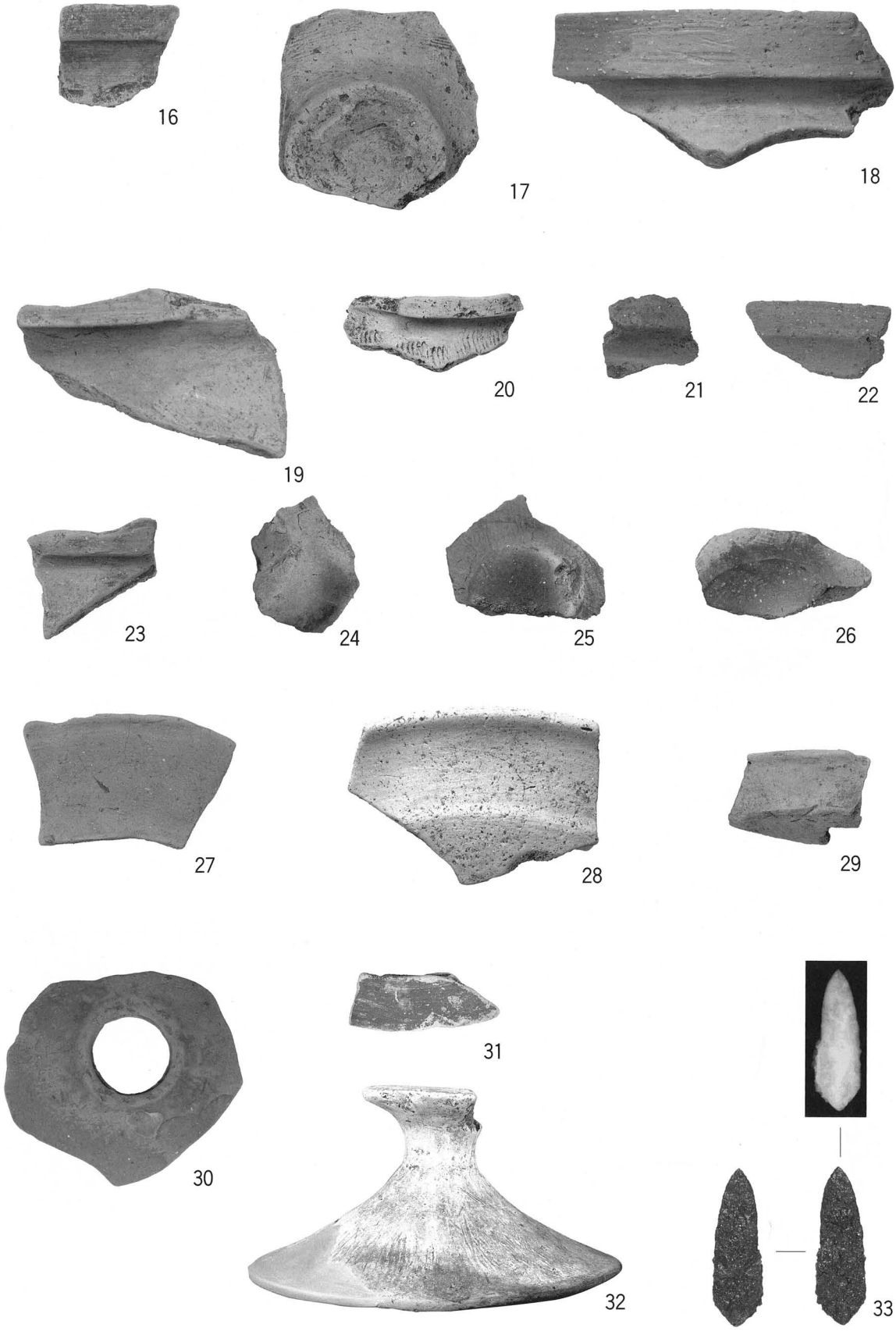
第Ⅲ区　完掘状態
（垂直写真，画面上が北）



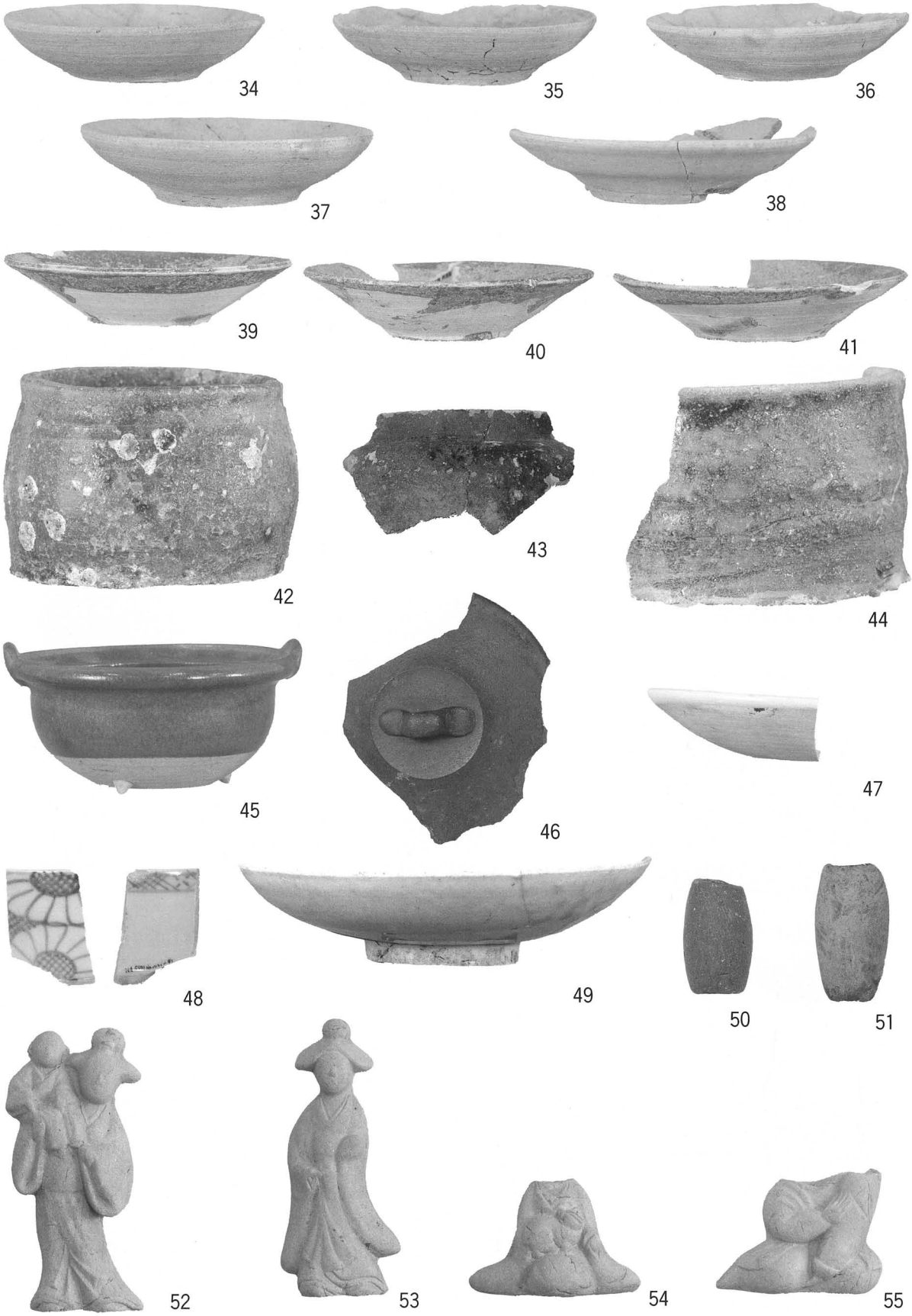
平行投影（オルソ）写真（合成）



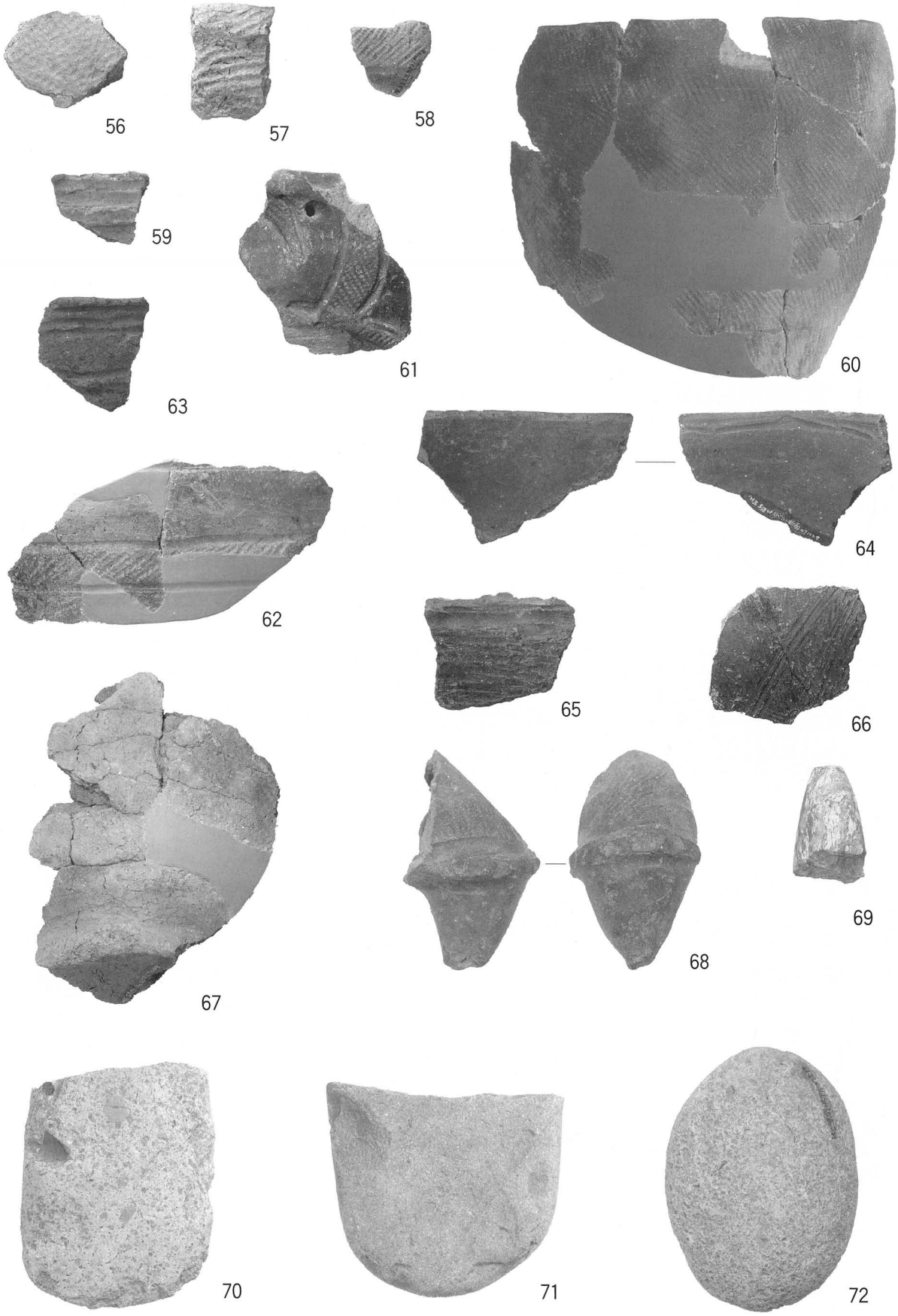
SZ01出土遺物（1：壷，2～4：高坏，5・6：管玉），SZ02出土遺物（7～9：壷，10：甕），
SZ03出土遺物（11・12：壷，13：鉢，14・15：甕）



SZ04出土遺物(16：壷)，SZ05出土遺物(17：壷，18～26：甕，27～31：高坏，32：蓋，33：鉄鏃)



SD01出土遺物(43:陶磁壷, 47:磁器丸皿, 48:染付磁器筒碗), 遺構外(撹乱)出土遺物(34～41:越中瀬戸皿, 42・44:建水, 45:陶製鍋, 46:陶製蓋, 49:肥前磁器皿, 50・51:陶錘, 52～55:土人形)



遺構外（撹乱・地山）出土遺物（56～60・62・65～67：深鉢，61：浅鉢，63・64：鉢，68：土偶，69：磨製石斧，70：打製石斧，71：磨石，72：凹石）

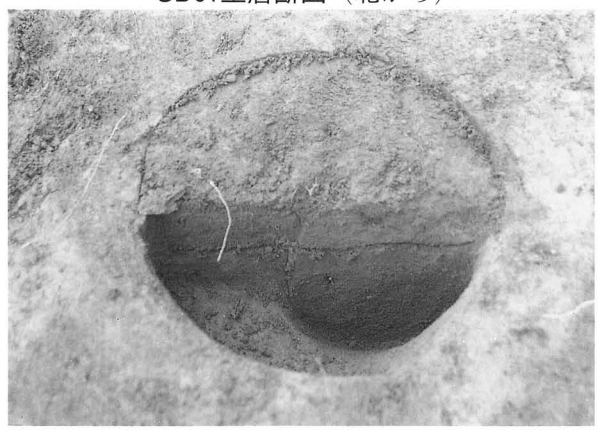
SZ06検出状態（北から）

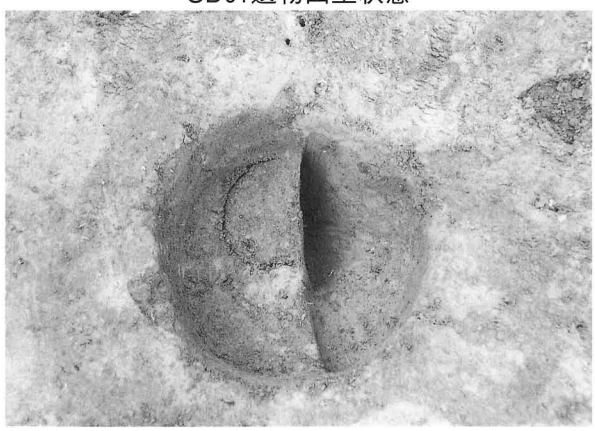
SD01完掘状態（北から）

SD01調査区北壁土層断面（南から）

SD01土層断面（北から）

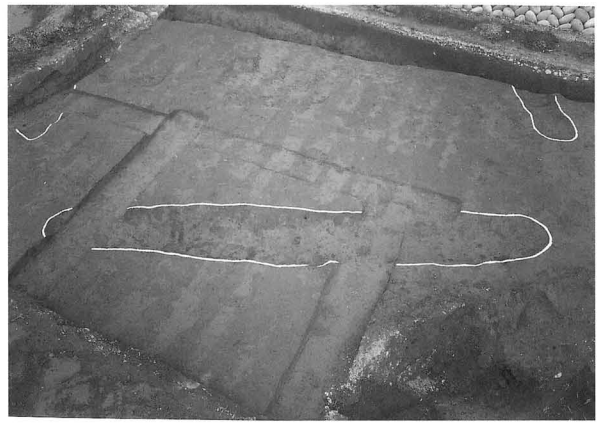
SD01遺物出土状態


P01土層断面（西から）


P01柱痕検出状態

SZ06西側周溝 土層断面（南から）

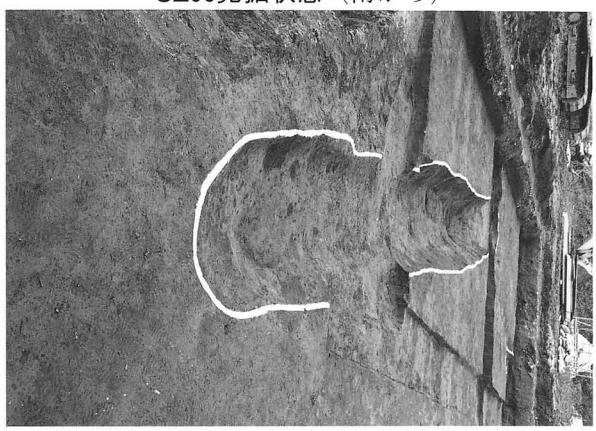
SZ06完掘状態（北から）



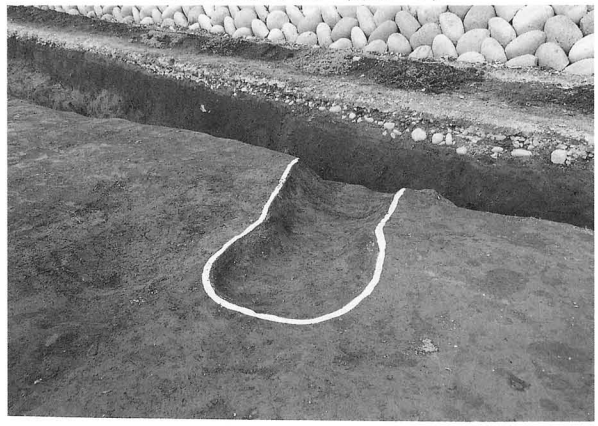
SZ06完掘状態（西から）

SZ06完掘状態（南から）

SZ06完掘状態（東から）

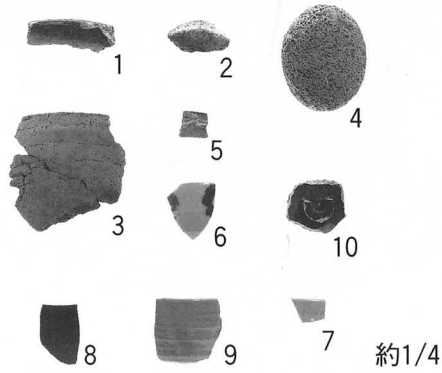


SZ06西側周溝 完掘状態（南から）



SZ06南側周溝 完掘状態（西から）

試掘坑１ 土層断面（南から）



出土遺物（1：甕，2：壷，3：浅鉢，4：磨石，5：鉢，6・7：碗，8：天目，9：火入れまたは香炉，10：燭台）

報告書抄録

ふりがな	とやまし　ひゃくづかすみよしいせき・ひゃくづかすみよしびーいせき・ひゃくづかいせき　はっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山市　百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡　発掘調査報告書
副書名	主要地方道富山八尾線道路改良事業に伴う発掘調査報告
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	32
編著者名	小黒智久・秋葉保香・細辻嘉門・小柳太一・小柳リラコ・佐藤好司・後藤太一・下島健弘・辻本裕也・矢作健二・馬場健司・辻本崇夫・千葉博俊・斎藤崇人・高橋　敦・鹿又喜隆・汐見　真・山田悟郎・伊藤雅乃・渡辺広勝
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0091　富山市愛宕町1丁目2番24号　TEL　076-442-4246
発行年月日	西暦2009年3月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
ひゃくづかすみよしいせき 百塚住吉遺跡	富山市宮尾(みやお) 3242-3外6筆	162019	201187	36度 43分 10秒	137度 12分 20秒	20051013 ～ 20051215	800m²	主要地方道富山八尾線道路改良事業
	富山市宮尾(みやお) 2338-2外10筆					20060907 ～ 20061213	1,640m²	
ひゃくづかすみよしびーいせき 百塚住吉B遺跡	富山市宮尾(みやお) 2326-2外7筆	162019	201185	36度 43分 20秒	137度 12分 20秒	20061011 ～ 20061213	300m²	
ひゃくづかいせき 百塚遺跡	富山市松木(まつのき) 1115-3外9筆	162019	201189	36度 43分 10秒	137度 12分 20秒	20070723 ～ 20071107	1,300m²	
	富山市松木(まつのき) 1140-8	162019	201189			20080807 ～ 20080827	150m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ひゃくづかすみよしいせき 百塚住吉遺跡	集　落 古　墳	縄文		縄文土器	北陸最古段階の前方後円墳をはじめとする、多様な出現期古墳を検出した。
		弥生 古墳	竪穴建物・井戸・方形周溝墓・前方後円墳・前方後方墳・円墳	弥生土器・鉄器 土師器	
		平安	畠跡・方形周溝状遺構	須恵器・鉄滓	
ひゃくづかすみよしびーいせき 百塚住吉B遺跡	集　落	平安	土坑・溝・ピット（時代不明）	土師器・須恵器	
ひゃくづかいせき 百塚遺跡	散布地 古　墳	縄文		縄文土器・土偶	多様な出現期古墳を検出。遺構検出面下で縄文時代晩期の遺物包含層を確認。
		弥生 古墳	方形周溝墓・方形周溝状遺構・前方後方形墳丘墓・前方後方墳・方墳	弥生土器・鉄鏃 土師器・管玉	
		江戸	区画溝	越中瀬戸・伊万里	

要　約

３遺跡は、おおむね類似した変遷を辿る。特に弥生時代後期後半～古墳時代前期前半は一連の動きを示し、神通川(旧流路)の河岸段丘上に墓域が形成された。方形周溝墓３基、前方後方形墳丘墓１基、前方後方墳２基、前方後円墳２基、方墳２基、円墳１基が、限られた時間で重複せずに相次いで造営された。前方後円墳は北陸最古段階のもので、くびれ部を境に前方部周溝が急激に浅くなる特徴的なものがあり、前方後方墳と前方部を直交／斜交させるかのように、２基一対として計画的に配置された。このような特徴的な周溝形態と配置をもつ類例は会津盆地北西部(男壇遺跡・宮東遺跡・稲荷塚遺跡)で認められるが、その祖形は百塚住吉遺跡・百塚遺跡に求められる。また、新津丘陵(八幡山遺跡)の前方後方墳の祖形も百塚住吉遺跡に求められる。この他、竪穴建物や井戸なども検出された。

平安時代頃に周溝が埋没した後は、基本的に墳丘を避けつつ、微高地を削平して耕地開発(畑地)された。当地には江戸時代に百塚村が成立した。その頃まで墳丘の高まりが残っていたことが、村名の由来と考えられる。この他、詳細不明ながら、江戸時代～近代の区画溝も検出された。

縄文時代晩期から弥生時代後期までの遺跡のあり方は、呉羽山断層や旧神通川などの自然環境に大きく影響されたものであった。

富山市埋蔵文化財調査報告32

富山市　百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡　発掘調査報告書

―主要地方道富山八尾線道路改良事業に伴う発掘調査報告―

2009（平成21）年3月17日発行

発　行　　富山市教育委員会
編　集　　富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
〒930-0091
富山市愛宕町１丁目２番24号
Tel　076-442-4246　Fax　076-442-5810
E-mail：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印　刷　　越浜印刷株式会社